

# 北洋大学紀要

## 第4号

### (第1部) 教育研究論文

モンゴル語の帯気性対立の母語話者による知覚 — モンゴル語母語話者を対象とした知覚実験 —	◀ 植田尚樹 ▶	3
コスプレイベントにおけるイベント参加者の実態と今後の可能性 — 「とまこまいコスプレフェスタ」参加者へのアンケート調査を通して —	◀ 樋口葵 ▶	21
中国語の類別詞重複語について	◀ 馮一峰 ▶	39
現代における「神仏習合」言説 — 2000年以降の新聞記事を中心に —	◀ 広池真一 ▶	55
現代日本社会における敬語使用の規則・基準・注意点に対する考察 — 1990年代の敬語に関する実用書の例を通して —	◀ 福本達也 ▶	73
スポーツ専攻の大学生における痩せ願望と自尊感情および摂食行動との関連性	◀ 山中慎・苧毛鈴奈・杉山喜一 ▶	89
Design and Demographic Factors in Online Mindfulness Interventions — Exploring Cultural Adaptations in Japan —	◀ LI Sheng ▶	99
実践報告・研究ノート・レビュー論文		
考古学からみた北日本地域の古代言語について	◀ 種石悠 ▶	115
学習者が主体となる中国語教育の実践 — 少人数の初級・中級クラスの学習者を対象としたいくつかの活動 —	◀ 陳曦 ▶	125
擬似分裂文の特性と出題意図 — TOEIC L&R Test における調査 —	◀ 福嶋剛司 ▶	135
(第2部) 北洋大学のこの一年		147



# 第1部

## 教育研究論文

実践報告・研究ノート・レビュー論文



# モンゴル語の帯気性対立の母語話者による知覚

— モンゴル語母語話者を対象とした知覚実験 —

植田 尚樹  
東京外国語大学

Perception of the Mongolian Aspiration Contrast by Native Speakers  
— A Perceptual Experiment with Native Mongolian Speakers —

UETA Naoki  
Tokyo University of Foreign Studies

## Abstract

This study investigates the perception of aspiration contrast in Mongolian through a perceptual experiment involving native Mongolian speakers. It examines how accurately native Mongolian speakers can distinguish between /t<sup>h</sup>/-/t/ and /t<sup>h</sup>/-/ts/. The findings reveal that: (i) Native Mongolian speakers can distinguish aspiration contrasts more precisely than native Japanese and Chinese speakers, although the accuracy is not very high; (ii) the aspiration contrast in affricates is difficult to distinguish compared to that in stops, possibly because of the large range of VOT, and the vague VOT boundary between aspirated and unaspirated for affricates; (iii) perception accuracy decreases when the VOT difference between aspirated and unaspirated sounds is minimal, or when the VOT range within same phonological category is extensive; and finally, (iv) minimal pairs in which the VOT difference is small tend to be judged as the same word and vice versa, although VOT is not the only perceptual cue for distinguishing the aspiration contrast.

## 1. はじめに

### 1.1. モンゴル語の帯気性の対立

モンゴル語ハルハ方言（モンゴル国で広く話される、いわゆる標準モンゴル語。以下モンゴル語とする）は破裂音と破擦音において、喉頭素性による二項対立を持つ。これらは伝統的に「張り子音 (tense / strong / fortis consonants)」と「弛み子音 (lax / weak / lenis consonants)」の対立であると言われている。近年の音響音声学的分析によると、この対立は基本的には帯気性の対立であり、張り子音は無声有気音、弛み子音は無声（一部は有声）無気音であるとみなされる (Karlsson and Svantesson 2011; 2012, Svantesson et al. 2005, Svantesson and Karlsson 2012, Ueta 2018, 植田 2020 など)。表 1 に、モンゴル語の破裂音・破擦音の体系を示す。なお、表内の ( ) は、借用語および擬音語・擬態語のみに現れることを示す。また、無気音系列の両唇破裂音と軟口蓋破裂音については、音声実現や音韻的な振る舞いから、有声音 (b, g) であると解釈されうる。詳しくは植田 (2020) を参照されたい。

表 1 モンゴル語の破裂音・破擦音の体系

	破裂音			破擦音	
	(p <sup>h</sup> )	t <sup>h</sup>	(k <sup>h</sup> )	tʰ	tʃ <sup>h</sup>
張り子音 (有気音系列)	(p <sup>h</sup> )	t <sup>h</sup>	(k <sup>h</sup> )	tʰ	tʃ <sup>h</sup>
弛み子音 (無気音系列)	b	t	g	ts	tʃ

語頭での音声実現に注目すると、張り子音は無声有気音 [p<sup>h</sup>, t<sup>h</sup>, k<sup>h</sup>, ts<sup>h</sup>, tʃ<sup>h</sup>]、弛み子音は無声無気音 [p, t, k, ts, tʃ] として実現し、両者は VOT (Voice Onset Time) で十分に区別される (Ueta 2018)。語中（特に母音間）では、b, g は頻繁に有声化・摩擦化を起こすのに対し、t, ts, tʃ は安定して無声無気音で実現し、t<sup>h</sup>, ts<sup>h</sup>, tʃ<sup>h</sup> とは帯気性の有無によって弁別される (植田 2020)。

### 1.2. 中国語とモンゴル語の帯気性の対立における音声的差異

中国語は、破裂音と破擦音に帯気性の対立を持つ (Lin 2007 など)。その意味で、中国語とモンゴル語は似た体系を有する。しかし、語頭の有気音の VOT の値について、両言語で異なった特徴を持つという指摘がある。植田 (2018) は、中国語 (北方方言)、内蒙古語 (中国内蒙古自治区で話されるモンゴル語の総称)、モンゴル語 (ハルハ方言) の 3 言語を対照し、語頭有気破裂音の VOT の値が中国語、内蒙古語、モンゴル語の順に大きいことを明らかにした。中国語とモンゴル語を比較すると、有気音の VOT の平均値は中国語で 79~85ms、モンゴル語で 49~61ms であり、両者には 20~30ms 程度の差がある (図 1)。そして、Cho and Ladefoged (1999) による無声音の 4 つの音声カテゴリー、すなわち VOT が 30ms 程度の無気音 (unaspirated)、50ms 程度の弱い有気音 (slightly aspirated)、90ms 程度の有気音 (aspirated)、120ms 程度かそれ以上の強い有気音 (highly aspirated) の 4 つのカテゴリー

にあてはめると、中国語は有気音 (aspirated)、モンゴル語は弱い有気音 (slightly aspirated) に入り、それぞれ別のカテゴリーに入ることを示した。言い換えると、中国語とモンゴル語は、同じ帯気性の対立を持つとされるが、有気音の音声の特徴は両者で異なり、中国語の方がモンゴル語より帯気性が強いと言える。

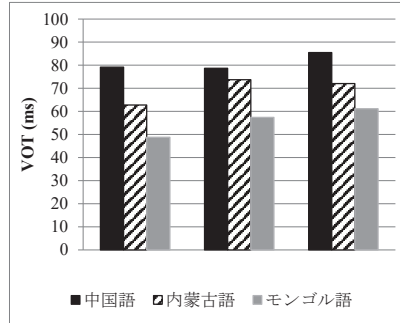


図1：有気音の VOT の平均値 (植田 2018: 175、図 2)

### 1.3. 日本語における有声性の対立

日本語は阻害音にいわゆる清音と濁音の対立があり、音韻的には無声音と有声音の対立であるとされる (Labrune 2012 など)。音声的には、基本的に清音は無声音、濁音は有声音であるとされる (斎藤 2006: 86–92)。

しかし、朱 (2010) や高田 (2011) などによると、日本語の清音および濁音には音声的バリエーションがある。濁音では、子音区間中に声帯振動がなく、調音器官の開放の後に声帯振動が始まるパターン、つまり音声的に (有声ではなく) 無声無気音であるパターンも観察されるという。一方、清音は典型的には無声無気音で現れるが、VOT がやや長く、無声有気音に近い音声で現れる場合もある。そして、濁音と清音の対立は元来、声帯振動の有無 (つまり有声と無声) によって弁別されていたが、近年では帯気性の有無 (つまり無気と有気) によって弁別されるケースもあることが指摘されている。つまり、日本語では濁音が無声無気音、清音が無声有気音で現れるバリエーションがあると言える。ただし、帯気性の有無によって弁別される場合においても、清音と濁音の VOT の差はそれほど大きくない。そしてこのケースは、VOT の短いものとやや長いものとの間で対立するという点で、モンゴル語の帯気性の対立に近いことが示唆される。

### 1.4. モンゴル語の帯気性の対立の知覚

モンゴル語における喉頭素性による対立は、音韻的には帯気性の対立だと言えるが、モンゴル語の音声的な特徴は中国語の帯気性の対立よりもむしろ日本語の有声性の対立に近い。この事実を背景に、植田 (2024) はモンゴル語の帯気性の対立が中国語と日本語 (およ

び韓国語)の母語話者にどのように知覚されているかを検討した。植田(2024)では、仮説として以下の2つが挙げられた。

- (1) a. モンゴル語は帯気性の対立を持つので、同じく帯気性の対立を持つ中国語や韓国語の母語話者の方が、有声性の対立を持つ日本語の母語話者よりも、モンゴル語の有気音/無気音の区別を容易に知覚できる。
- b. モンゴル語の有気音と無気音のVOTの差が小さいので、両者のVOTの差が大きい中国語や韓国語の母語話者よりも、両者のVOTの差が小さい変種を持つ日本語の母語話者の方が、モンゴル語の有気音/無気音の区別を容易に知覚できる。

(植田 2024: 9 (2))

この仮説を基に、植田(2024)は中国語母語話者5名と日本語母語話者5名(および韓国語母語話者1名)に対してモンゴル語の帯気性の対立に関する知覚実験を行った。具体的には、モンゴル語の語頭破裂音 /<sup>h</sup>/-/<sup>h</sup>/ および語頭破擦音 /<sup>h</sup>/-/<sup>h</sup>/ の対立が、各母語話者に弁別され得るのか、聴取者の母語によって弁別の正確さに差があるのかを検討した。図2~図4はその結果である。図の「正答」とは、母語話者の弁別の意図通りに知覚したものを指し、具体的には音声提供者が同じ語として発音したペアを「同じ語である」と判定した場合と、音声提供者が異なる語として発音したペアを「違う語である」と判定した場合を合わせたものである。図2は全体の正答率を母語話者別に示したものである。図3は、「同一音韻カテゴリーの正答率」(つまりモンゴル語で「同じ音」とされる /<sup>h</sup>/ と /<sup>h</sup>/、 /<sup>h</sup>/ と /<sup>h</sup>/、 /<sup>h</sup>/ と /<sup>h</sup>/、 /<sup>h</sup>/ と /<sup>h</sup>/ のペアを実験参加者が「同じ音」として判定した割合)、および「異なる音韻カテゴリーの正答率」(つまりモンゴル語で「異なる音」とされる /<sup>h</sup>/ と /<sup>h</sup>/、 /<sup>h</sup>/ と /<sup>h</sup>/ のペアを実験参加者が「異なる音」として判定した割合)を母語話者別に示したものである。また図4は、刺激音のタイプ(破裂音か破擦音か)ごとに正答率を示したものである。

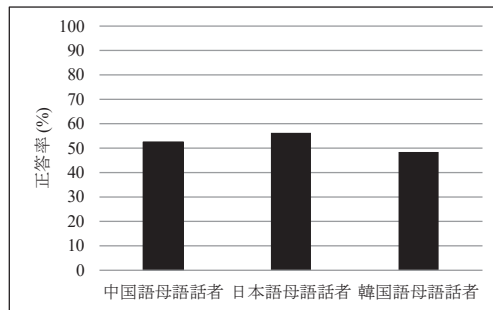


図2: 各言語母語話者の音韻知覚の正答率(全体)(植田 2024: 14、図4)



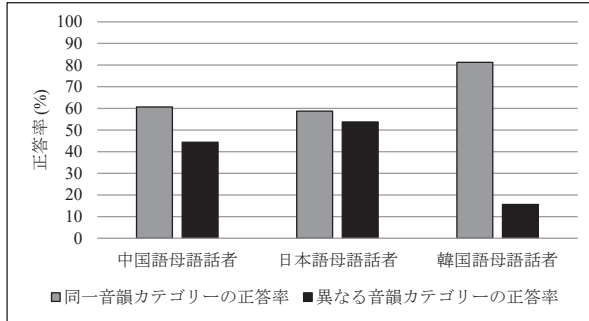


図3：各言語母語話者の音韻知覚の正答率（音韻カテゴリー別）（植田 2024: 15、図5）

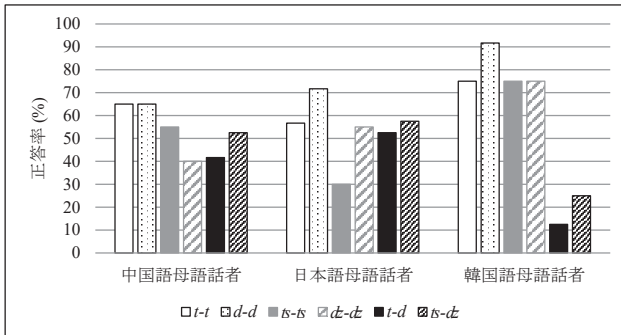


図4：各言語母語話者の音韻知覚の正答率（刺激音タイプ別）（植田 2024: 16、図6）

なお、図では /t<sup>h</sup>/, /t/, /ts<sup>h</sup>/, /ts/ をそれぞれ *t*, *d*, *ts*, *ɕ* で表している。

図2より、全体の正答率はどの各母語話者においても50%程度であることが読み取れ、各言語話者ともモンゴル語母語話者の意図通りに帯気性を弁別できたとは言いがたいことがわかる。

続いて図3より、日本語母語話者では、異なる音韻カテゴリーの正答率が中国語母語話者（および韓国語母語話者）に比べてやや高いことが読み取れる。これは、日本語母語話者が中国語母語話者よりもモンゴル語の有気音と無気音の違いを「やや正確に」知覚していることを示唆する。ただし、両者の正答率の差は大きくなく、個人差も非常に大きいため、正答率の差が聴取者の母語によるものであるかどうかは定かではないことも指摘されている。

さらに図4より、中国語母語話者と日本語母語話者で、知覚に傾向の違いが見られることがわかる。まず *t-d* に注目すると、中国語母語話者よりも日本語母語話者の方が、モンゴル語の *t-d* の対立を「正確に」弁別していることから、モンゴル語の *t-d* の対立は、音韻的

には帯気性の対立とされるものの、特徴としては日本語の有声性の対立に近いことが示唆される。次に *h-h* については、日本語母語話者の正答率が低い。この理由として、モンゴル語の *h* の VOT のレンジが広く、日本語の *h* と *ç* の両方にあたる音が混在しているために、日本語母語話者にとって知覚が難しい、という可能性が指摘されている。一方で、*ç-ç* については中国語母語話者の正答率が低い。この理由として、モンゴル語の *ç* の VOT のレンジが広く、中国語の *h* と *ç* の両方にあたる音が混在しているために中国語母語話者にとって知覚が難しい、という可能性が述べられている。そして、以上の考察が正しいとすれば、モンゴル語は有気音 *h* も無気音 *ç* も VOT のレンジが広く、両者の VOT のレンジが重なることになるため、モンゴル語母語話者にとっても両者の弁別が難しいのではないかということが指摘され、モンゴル語母語話者が両者を知覚的に正確に弁別できるかを確認する必要があると述べられている。

植田 (2024) はモンゴル語の帯気性の対立について、他言語の母語話者がどのように知覚するかという新たな観点から考察した点で意義がある。しかしながら、植田 (2024) も述べているように、この研究にはいくつかの残された課題がある。そのうち最も大きなものは、モンゴル語母語話者自身がモンゴル語の帯気性の対立を十分に知覚しているかどうか、確認する必要があるという点である。知覚実験に用いた音声データはモンゴル語母語話者から得られたものであるが、母語話者が有気音を (あるいは無気音を) 意図して発話した音声は、別の母語話者にその通り有気音に (あるいは無気音に) 聞き取られるとは限らない。モンゴル語の有気音と無気音の VOT の差がそれほど大きくないことがわかっているため、実はモンゴル語母語話者にとっても帯気性の弁別は (特に切り出された音声を聞くという実験下においては) 難しいという可能性もある。また、先に述べたように植田 (2024) の観察から、モンゴル語の破擦音 *h-ç* はモンゴル語母語話者にとっても知覚的に弁別が難しいのではないかという見通しもある。

そこで本研究では、モンゴル語の帯気性の対立をモンゴル語母語話者がどの程度正確に知覚しているかを明らかにするために、モンゴル語母語話者を対象にした知覚実験を行う。そして、植田 (2024) の非母語話者に対する実験の結果と対照しつつ、モンゴル語の帯気性の対立の特徴について考察する。

## 2. 知覚実験

### 2.1. 知覚実験の概要

本研究では植田 (2024) と同様、対象を語頭閉鎖音 */h/-t/* および語頭破擦音 */ts<sup>h</sup>/-ts/* に絞り、モンゴル語母語話者がこれらの対立をどの程度正確に弁別できるかを調査した。なお、本調査の手法は植田 (2024) で用いられた手法と同一であるため、2.2 節に示す刺激音の作成、2.5 節に示す刺激音自体の音声特徴は植田 (2024) と全く同じであり、2.3 節に示す知覚実験の手順は植田 (2024) とほぼ同じである (ただし、刺激音自体の音声特徴については新たな分析を加えている)。以下では実験の手順をやや簡略化して示す。詳細は植田 (2024)

を参照されたい。なお、便宜上、以下ではモンゴル語の有気音系列 /t<sup>h</sup>, ts<sup>h</sup>, tʃ<sup>h</sup>/ を t, ts, tʃ、無気音系列の /t, s, ʃ/ を d, d̥, d̥ʃ の記号を用いて表す。

## 2.2. 刺激音の作成

まずは、モンゴル語母語話者による発話を材料に、刺激音を作成した。語頭が有気音 t, ts であるか無気音 d, d̥ であるかでミニマルペアをなす4つのペア（表2に示す計8語）を調査語彙とし、1つずつキャリア文(2)に入れて読み上げてもらい、録音した。

表2 刺激音に用いたミニマルペア

語頭有気音	語頭無気音
<i>taxix</i> “供える”	<i>daxix</i> “繰り返す”
<i>tesʃegʃ</i> “火薬”	<i>desʃegʃ</i> “中尉”
<i>tosʃax</i> “手伝う”	<i>dosʃax</i> “滴る”
<i>tsɔxix</i> “打つ”	<i>d̥ɔxix</i> “適する”

(2) ..... gedeg n<sup>i</sup> juu wee? “..... というのは何ですか?”

全ての調査語彙の読み上げが一通り終わった後に、順序を変えてもう一度読み上げを行い、1つの調査語彙につき2つ(1回目と2回目)の音声を得た。以下では、1回目と2回目の発話から得られた調査語彙を、それぞれ「調査語彙<sub>(1)</sub>」「調査語彙<sub>(2)</sub>」(具体的には *taxix*<sub>(1)</sub>、*taxix*<sub>(2)</sub> など)のように示すこととする。

音声提供者は18歳~20歳のモンゴル語母語話者4名(OB:18歳男性、TN:18歳男性、ER:20歳女性、BB:19歳女性)である。録音はデジタルレコーダー(ZOOM H4nPro)およびヘッドセットマイク(AKG C520)を用いて行われた。

次に、音響分析ソフトPraat(Boersma and Weenink 2021)を用いて録音された調査語彙を全て切り出し、同じ音声提供者の1回目の発話と2回目の発話から、同じ語として発話された音声(例えば *taxix*<sub>(1)</sub> と *taxix*<sub>(2)</sub>)、およびミニマルペアとして発話された音声(例えば *taxix*<sub>(1)</sub> と *daxix*<sub>(2)</sub>)を、1秒の空白を挟んで繋ぎ合わせた。1人の音声提供者の音声から作られた刺激音は表3の通りとなる。これらの刺激音を、4名の音声提供者の音声からそれぞれ作成した。つまり、刺激音は合計64個作られたことになる。

表3 刺激音一覧

ともに有気音	有気音と無気音	無気音と有気音	ともに無気音
<i>taxix</i> <sub>(1)</sub> - <i>taxix</i> <sub>(2)</sub>	<i>taxix</i> <sub>(1)</sub> - <i>daxix</i> <sub>(2)</sub>	<i>daxix</i> <sub>(1)</sub> - <i>taxix</i> <sub>(2)</sub>	<i>daxix</i> <sub>(1)</sub> - <i>daxix</i> <sub>(2)</sub>
<i>tesɮegɣf</i> <sub>(1)</sub> - <i>tesɮegɣf</i> <sub>(2)</sub>	<i>tesɮegɣf</i> <sub>(1)</sub> - <i>desɮegɣf</i> <sub>(2)</sub>	<i>desɮegɣf</i> <sub>(1)</sub> - <i>tesɮegɣf</i> <sub>(2)</sub>	<i>desɮegɣf</i> <sub>(1)</sub> - <i>desɮegɣf</i> <sub>(2)</sub>
<i>tɔsɮax</i> <sub>(1)</sub> - <i>tɔsɮax</i> <sub>(2)</sub>	<i>tɔsɮax</i> <sub>(1)</sub> - <i>dɔsɮax</i> <sub>(2)</sub>	<i>dɔsɮax</i> <sub>(1)</sub> - <i>tɔsɮax</i> <sub>(2)</sub>	<i>dɔsɮax</i> <sub>(1)</sub> - <i>dɔsɮax</i> <sub>(2)</sub>
<i>ɮɔxix</i> <sub>(1)</sub> - <i>ɮɔxix</i> <sub>(2)</sub>	<i>ɮɔxix</i> <sub>(1)</sub> - <i>ɕɔxix</i> <sub>(2)</sub>	<i>ɕɔxix</i> <sub>(1)</sub> - <i>ɮɔxix</i> <sub>(2)</sub>	<i>ɕɔxix</i> <sub>(1)</sub> - <i>ɕɔxix</i> <sub>(2)</sub>

### 2.3. 知覚実験の手順

知覚実験は、Google Form を用いてオンラインで行われた。実験は3つのセクションに分けられる。なお、実験参加者はモンゴル語母語話者であるので、Google Form 上の説明および記入は全てモンゴル語で行われた。

最初のセクションでは、調査協力者に年齢や母語、成育地、外国語学習歴を記入することを求めた。なお、これらの個人情報調査のみに使用することを明記している。

続くセクション2とセクション3では、実際に刺激音を聞き判定することを求めた。これらのセクションでは、URL および再生ボタンをクリックすることで、音声ファイルが開き、2.2節に示した64の刺激音のいずれかが流れる。実験参加者には刺激音（語の連鎖）を1つずつ聞いてもらい、2つの音声と同じ単語であるか、違う単語であるかを強制選択で判定（いずれかをクリック）してもらった。なお、刺激音は2秒の空白を挟んで2度流れるようにした。実験に際し、イヤホンもしくはヘッドホンを使って音声を聞くこと、音声は何度聞いても良いことを伝えた。

なお、本調査の刺激音では、たとえ「有気音－有気音（例えば *taxix*<sub>(1)</sub> - *taxix*<sub>(2)</sub>）」や「無気音－無気音（例えば *daxix*<sub>(1)</sub> - *daxix*<sub>(2)</sub>）」の刺激音であったとしても、1つ目と2つ目の音声は別の音声であることから、初頭子音以外にも音声的な違いが生じる可能性は否定できない。しかし、実際に用いた刺激音では初頭子音以外の音声的な違いはごくわずかであり、初頭子音以外の箇所でも語を弁別する可能性はほぼない。したがって、実験では参加者に初頭子音に注目するようにという指示は出していない。

セクション2では(1)～(35)、セクション3では(36)～(70)の35間が用意され、ともに最初の3間はダミーの刺激音とした。なお、セクション2およびセクション3において、刺激音は類似の刺激音が連続しないという条件で、ランダムに配列された。

### 2.4. 実験参加者

実験参加者は、モンゴル語母語話者10名である。実験実施時の年齢は25歳～52歳（無回答2名）、平均年齢は33.1歳である。出身地はウランバートル（5名）のほか、ゴビアルタイ県（2名）、ザヴハン県（1名）、アルハンガイ県（1名）、ウムヌゴビ県（1名）であるが、全員がハルハ方言の話者であると回答したため、本研究では実験参加者の下位方言について

は考えないこととする。また、実験参加者は英語・日本語・ロシア語の少なくとも1つを1年以上学習した経験があり、日本語を流暢に話す話者も含まれている。厳密には、他言語の学習歴がモンゴル語の知覚に影響を及ぼす可能性もあるが、学習歴を考慮に入れると分析が煩雑になりすぎるため、こちらも本研究では考慮しないこととする。

### 2.5. 刺激音自体の音声特徴

前述のように、刺激音の音声自体は1つ1つ異なる。そのため、刺激音の元音声自体の差異が知覚に大きな影響を与えることも予想される。そこで、本節では刺激音自体のVOTの特徴について記述し、分析の前提とする。なお、喉頭素性の対立の知覚には、VOTだけでなく後続母音における基本周波数(F<sub>0</sub>)や第1フォルマント(f<sub>1</sub>)など、様々な音響的指標が関わっていることが指摘されている(Haggard et al. 1970, Klatt 1975, Kent and Read 1992, 高田 2011 など)が、本稿では議論を単純化するため、VOTのみに焦点を当てて分析を進めることとする。

図5は、刺激音として使われた音声の語頭の *t*, *d* および *ʙ*, *ɗ* のVOTの値を、音声提供者ごとに示したものである。破裂音 *t*, *d* (図の左側) については、VOTのレンジ(最大値と最小値)を棒グラフで表しており、平均値を白い○で表している。一方、破擦音 *ʙ*, *ɗ* (図の右側) については1語ずつ各2回の発話しかないため、全データの値を列挙している。なお、刺激音においては、*ʙ* (1) と *ʙ* (2)、*ʙ* (1) と *ɗ* (2)、*ɗ* (1) と *ʙ* (2)、*ɗ* (1) と *ɗ* (2) がそれぞれペアになる。

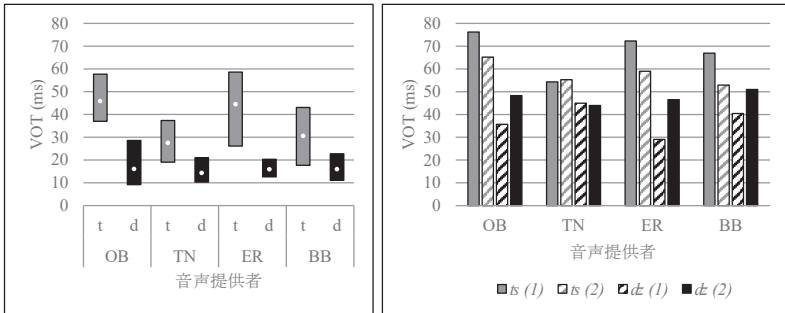


図5：刺激音として使われた音声のVOTの値  
(左：破裂音のVOTのレンジと平均値、右：破擦音のVOTの値)

図5より、刺激音の *t/d* および *ʙ/ɗ* の違いは概ねVOTの長短で区別されるが、音声提供者によってはVOTの差が小さいことがわかる。破裂音では、特に音声提供者TNとBBにおける有気音 *t* のVOTが短く、有気音と無気音のVOTのレンジが一部重なっており、平均値の差も小さい。破擦音では、やはりTNにおける有気音 *ʙ* のVOTが短く、無気音との

差が小さい。また、ER と BB では、無気音  $\text{ɬ}$  の 2 回の発話における VOT の差が大きく、その差は有気音  $\text{t}$  と無気音  $\text{ɬ}$  の VOT の差よりも大きい傾向にある。特に、BB の  $\text{t}$  (2) と  $\text{ɬ}$  (2) を比較すると、VOT の値はほぼ同じである。

次に、1 つ 1 つの刺激音における VOT の差について述べる。今回の調査では VOT の値について統制していないため、刺激音ごとに VOT が異なり、また 1 つの刺激音におけるペア音声の VOT の差もまちまちである。図 6 は、各刺激音のペア音声における VOT の差をヒストグラムにしたものであり、左は同一の音韻カテゴリーのペア、右は異なる音韻カテゴリーのペアの刺激音の場合である。

当然のことながら、同一音韻カテゴリーのペアでは VOT の差が小さいものが多く、異なる音韻カテゴリーのペアでは VOT の差が大きいものが多い。しかしながら、異なる音韻カテゴリーのペアでも、VOT の差が 20ms 以下、つまり VOT の差が同一音韻カテゴリーのペアと変わらないような例も多く見られた。これらの刺激音では、本来は異なる音韻カテゴリーのペアとして発音されているが、知覚の際は同一の音として知覚されやすいことが予想される。分析の際は、このような VOT の差にも注目する。

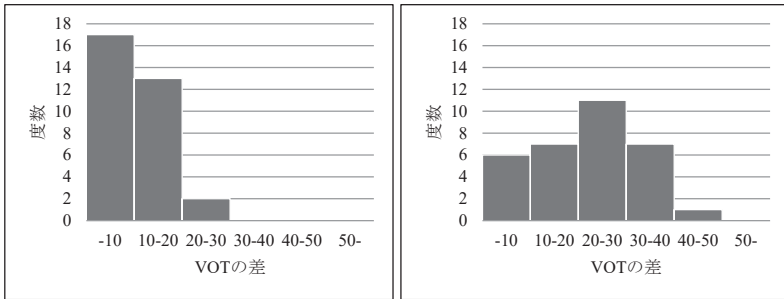


図 6：各刺激音ペア音声における VOT の差  
(左：同一音韻カテゴリー、右：異なる音韻カテゴリー)

### 3. 結果

#### 3.1. 全体の傾向

まずは全ての刺激音に対する知覚について、全体的な傾向を示す。以下では植田 (2024) と同様、音声提供者が同じ語として発音したペアを「同じ語である」と判定した場合、および音声提供者が異なる語として発音したペアを「違う語である」と判定した場合を合わせて「正答」と呼ぶ。図 7 は、全刺激音および同一音韻カテゴリー（すなわち  $/\text{h}^{\text{h}}/ - / \text{h}^{\text{h}}/$ 、 $/\text{u} - / \text{t}/$ 、 $/\text{ts}^{\text{h}}/ - / \text{ts}^{\text{h}}/$ 、 $/\text{ts}^{\text{h}}/ - / \text{ts}^{\text{h}}/$  のペア）ならびに異なる音韻カテゴリー（すなわち  $/\text{h}^{\text{h}}/ - / \text{u}/$ 、 $/\text{t} - / \text{ts}^{\text{h}}/$ 、 $/\text{ts}^{\text{h}}/ - / \text{ts}^{\text{h}}/$  のペア）の正答率を示している。

図 7 より、全刺激音の正答率は 65.9% であり、ほぼ 3 分の 2 の刺激音が「正しく」（話者の意図通りに）判定されていることがわかる。また、同一カテゴリーのペアの正答率

(60.9%) よりも、異なるカテゴリーのペアの正答率 (70.9%) の方が高いことも見て取れる。

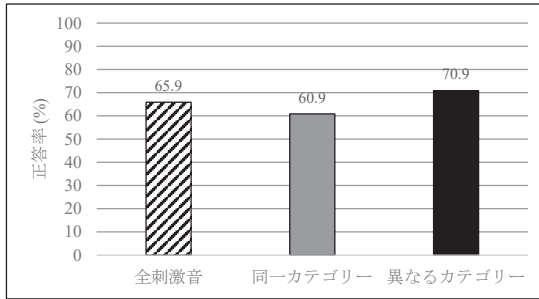


図7：全刺激音、同一カテゴリー、異なるカテゴリーの正答率

この結果を、図2および図3に示したモンゴル語非母語話者（日本語母語話者と中国語母語話者）の結果と対照しながら、議論を進める。まず、全体の正答率については、当然のことながら非母語話者よりも母語話者の方が正答率が高い。しかし、母語話者であっても正答率は66%程度である。本実験は二者択一の強制選択であり、チャンスレベルが50%であることをふまえると、母語話者でも正答率は決して高くはないと言える。

この要因として、1つには実験環境下での弁別の難しさが挙げられる。現実においては、文脈や先行発話の音韻・音声情報も利用して音韻の弁別を行っていると考えられるため、語単独の音声が突然流れるという今回の実験環境では、たとえ母語話者であっても正確に帯気性の対立を弁別するのは難しかったと思われる<sup>1</sup>。しかし同時に、この正答率の低さはモンゴル語の帯気性の特徴を反映したものであるという見方もできる。先述のように、モンゴル語の有気音と無気音はVOTの差が小さい。また、モンゴル語では有気音と無気音は確かに音韻的に対立するものの、1.1節で述べたように、 $/k^h/$ 、 $/p^h/$ は借用語および擬音語・擬態語のみに現れるため出現頻度が低く、 $/b/$ 、 $/g/$ との対立は周延的である。したがって、実質的に帯気性の対立が顕著に見られるのは $/t^h/$  -  $/t/$ 、 $/s^h/$  -  $/s/$ 、 $/ʃ^h/$  -  $/ʃ/$ のみである。また、これらの中でも $/s^h/$ 、 $/ʃ^h/$ 、 $/s/$ 、 $/ʃ/$ は頻度がそれほど高くなく、ミニマルペアがそれほど多くないと思われる。さらに、 $/t^h/$ と $/t/$ 、 $/ʃ^h/$ と $/ʃ/$ は一部の接辞において交替する。以上を勘案すれば、モンゴル語の帯気性の対立は機能負担量が低いと考えられる。この事実を背景に、モンゴル語の帯気性の対立は弁別的な機能がやや低く、結果としてモンゴル語母語話者にとっても弁別が難しい、という可能性が十分考えられる<sup>2</sup>。

また、モンゴル語母語話者では、同一カテゴリーの正答率よりも、異なるカテゴリーの正答率の方が高い。つまり、モンゴル語母語話者は異なるカテゴリーの音を異なるものと判定すると同時に、同じカテゴリーの音も異なるものとして判定する傾向にあった。ここが非母語話者の結果と大きく異なる点である。モンゴル語母語話者はモンゴル語に *t-d, s-ɬ*

の対立があることを知っていることから、知覚実験においても敏感に（そして過剰に）両者の違いを聞き取ったと思われる。

### 3.2. 刺激音のタイプ別の正答率

次に、刺激音のタイプごとの正答率を図8に示す。

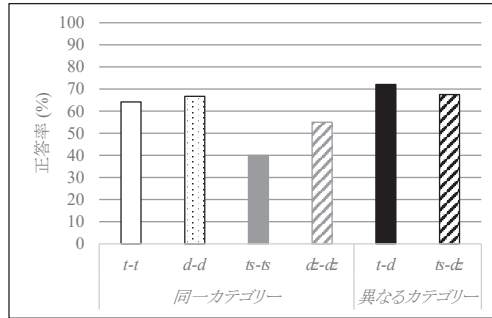


図8：刺激音タイプ別の正答率

図8より、破裂音に比べ破擦音では正答率が低いことがわかる。とりわけ、ts-tsのペアでは正答率が50%を下回っている。これはすなわち、発話者がtsを意図して産出した音声を、sともzとも知覚し、両者を混同していることを意味する。dz-dzのペアも同様に、正答率はチャンスレベルの50%を少し超える程度であることから、やはりtsとdzを混同していると言える。1.5節では、モンゴル語の破擦音ts-dzはモンゴル語母語話者にとっても知覚的弁別が難しいのではないかという見通しを述べた。本実験の結果をもとに推察すると、モンゴル語のtsとdzは、両者を異なる音だと弁別することは比較的容易であるものの、おそらく両者ともVOTのレンジが広く、有気音と無気音の境界も曖昧であるために、同一カテゴリーの音を誤って違うカテゴリーの音だと判定するケースが多いと考えられる。

また、この結果を図4に示した非母語話者の結果と対照すると、モンゴル語母語話者の正答パターンは中国語母語話者よりも日本語母語話者の正答パターンに類似していることがわかる。このことは、モンゴル語の帯気性の対立は中国語の帯気性の対立よりもむしろ日本語の有声性の対立に似た特徴を持つことを示唆する。

### 3.3. 音声提供者ごとの正答率

2.5節で示したように、本実験ではVOTの特徴は音声提供者ごとに異なる。そこで、本節では音声提供者ごとに正答率を見つめる。図9は、各刺激音の正答率を音声提供者ごとに示したものである。



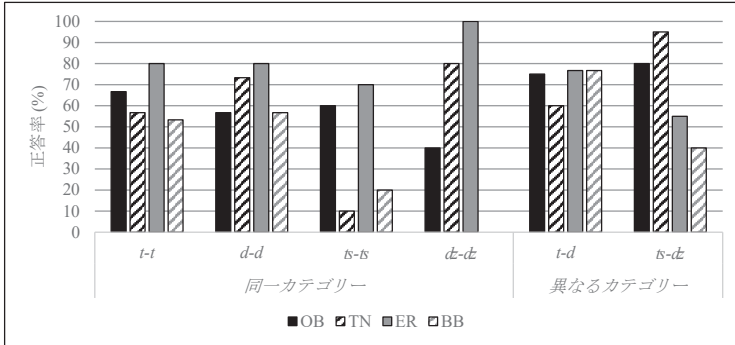


図9：音声提供者別の正答率

図9の結果を、図5に示したVOTの特徴と対照しながら議論を進める。まず特筆すべきは、音声提供者BBによる *t-d* のペアの正答率が0%である点である。これは、BBでは *t* の2回の発話におけるVOTの差が大きかったことと関連があると考えられる。つまり、*t-d* のペアにおける両者のVOTが大きく異なっていたため、両者を連続して聞くという本実験においては異なる音だと判定されたということである。同じことが、*t-d* の正答率が40%と低かったOBについても言える。しかし、ERについては、*t-d* のVOTの差が大きかったにもかかわらず、*t-d* の正答率は100%であるので、VOTの差のみで結果を全て説明できるわけではない。

次に、*ts-ts* のペアに着目すると、TNとBBの正答率が著しく低い。BBでは *ts* のVOTが比較的短く、ペアのうち片方は *t* に近かったことから、*ts* を意図した音声のうち片方が *t* と聞き取られたのではないかと推察される。TNについては、*ts-ts* のペアにおけるVOTの差はほとんどなかったものの、*ts* のVOT自体が比較的短く、*t* とも捉えられるような音声であったことから、聴取者にとって判定が難しかったのではないかと推察される。

*t-t* のペアでは、TNとBBの正答率が比較的低い。これは、両者の *t* のVOTのレンジが比較的低いところにあり、一部は *d* とレンジが重なることに起因していると考えられる。*d-d* のペアの結果を統一的に説明するのは難しいが、OBの正答率が低いことについては、OBの *d* のVOTのレンジが比較的広いことが要因として挙げられる。

異なるカテゴリに目を移すと、*t-d* のペアではTNの正答率が低いことがわかる。これは、TNの *t* のVOTが概して短く、*d* との差があまりないことが原因であろう。

最後に *ts-t* のペアに注目すると、ERとBBの正答率が低い。このうちBBについては、*ts* と *t* のVOTの値が比較的近いために両者が混同される、という説明が可能である。しかし、ERにはこの説明は当てはまらない。さらに、TNでは *ts* と *t* のVOTの値が非常に近いにもかかわらず、正答率はむしろ極めて高い。これらをVOTの観点のみから説明することは困難である。

以上を総合すると、話者ごとの VOT の特徴が、帯気性の知覚的弁別にある程度影響を及ぼしていると言える。ただし、帯気性の知覚は VOT のみで説明できるわけではないことも事実である。

### 3.4. 刺激音の VOT と知覚との関係

2.5 節で示したように、本実験における VOT の値は刺激音ごとに異なる。モンゴル語母語話者が音声的な VOT の差を音韻カテゴリーの弁別に用いていると仮定すると、VOT の差が小さい刺激音には「同じ語である」と判定し、逆に VOT の差が大きい刺激音には「違う語である」と判定することが予想される。そこで本節では、それぞれの刺激音における VOT の差と、「同じ語である」という回答の数との相関を見る。図 10 は、その結果を示したものである。図内の点線は近似直線を表している。

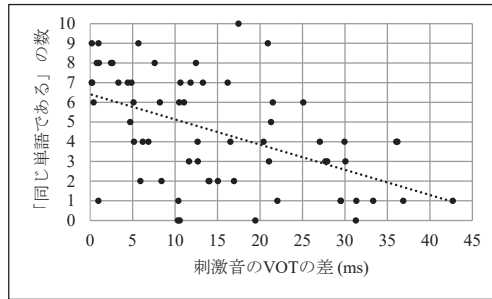


図 10：各刺激音における VOT の差と「同じ語である」という回答の数の関係

図 10 より、刺激音における VOT の差と「同じ語である」という回答の数には、顕著ではないものの、一定の関係があることがわかる。具体的には、VOT の差が小さい刺激音では「同じ単語である」という回答が多く、VOT の差が大きい刺激音では「同じ単語である」という回答が少ない（つまり、違う単語と判定した）。この傾向は、予測に当てはまるものである。相関係数は  $-0.51$  であり、弱いながらも負の相関が認められる。つまり、今回の知覚実験においては、VOT の音声的な差を用いて帯気性という音韻カテゴリーの対立を知覚する傾向が観察されたと言える。なお、植田 (2024) は、日本語母語話者と中国語母語話者では VOT の差と回答との間に一定の関係は見られなかったと述べている。つまり、母語話者と非母語話者とは VOT を知覚の手がかりとして用いる度合いが異なるようである。モンゴル語母語話者は、母語話者であるがゆえに、VOT の情報を深く利用して帯気性の弁別を行っていると言える。ただし、相関係数は  $-0.51$  であり、それほど絶対値が大きくはないことから、VOT のみをもとに帯気性の弁別を行っているわけではないということも示唆される。

#### 4. まとめ

本研究では、植田 (2024) において残された課題、すなわちモンゴル語母語話者がモンゴル語の帯気性の対立をどのくらい正確に弁別しているかを明らかにするため、モンゴル語母語話者を対象に知覚実験を行った。結果は以下のようにまとめられる。

- (3) a. モンゴル語母語話者は、モンゴル語非母語話者（日本語母語話者と中国語母語話者）よりもやや正確に帯気性の対立を弁別した。ただし、母語話者であっても正答率は決して高くはなかった。モンゴル語の帯気性の対立は機能負担量が低いいため、モンゴル語母語話者にとっても弁別が難しい、という可能性が考えられる。
- b. 破裂音に比べ、破擦音では正答率が低い。とりわけ、*ɬ-ʈ*, *ɕ-ɕ* のペアでは正答率が著しく低い。これは、モンゴル語の *ɬ* と *ɕ* は VOT のレンジが広く、有気音と無気音の境界も曖昧であるために、同一カテゴリーの音を違うカテゴリーの音だと判定するケースが多いためだと考えられる。
- c. 音声提供者によって正答率が異なり、概して有気音と無気音の VOT の値に近い話者、あるいは同じ音韻カテゴリーに属する音の VOT のレンジが広い話者の音声では弁別が難しい。しかし、VOT のみで全てが説明できるわけではない。
- d. 刺激音の VOT の差と判定との間には一定の相関があり、VOT の差が小さい刺激音のペアは同じ単語であると判定され、VOT の差が大きい刺激音では違う単語であると判定される傾向にあった。このことは、VOT の差を用いて帯気性の対立を知覚する傾向があることを意味する。ただし、VOT のみをもとに帯気性の弁別を行っているわけではないことも示唆された。

以上を総合すると、モンゴル語に帯気性の対立は存在し、有気音と無気音は VOT の違いによって弁別されるが、話者によっては両者の音声的差異が顕著ではなく、その場合は聴取者にとって知覚的弁別が難しい、とまとめることができる。特に、破擦音においてその傾向が顕著である。

本研究では VOT のみに焦点を当てたが、2.5 節で述べたように、帯気性の弁別には他の音響的特徴も関わっていることが知られている。また、本研究の知覚実験では、破擦音のペアが少ないなど、実験上の制約もあった。これらを考慮に入れ、モンゴル語の帯気性の対立がモンゴル語母語話者にどの程度正確に知覚されているかをさらに追究することが、今後の課題である。

#### 謝辞

本研究の調査において、モンゴル国立科学技術大学外国語学部の学生ならびに教員の皆様に多大なご尽力を賜った。また、知覚実験にはモンゴル高専の教職員の方々にご協力い

ただいた。ここに記して感謝申し上げる。なお、本研究は JSPS 科研費 21K20015 および 23K12168 の助成を受けている。

---

## 注

- 1 その他にも、実験に用いた音声の音量が小さかったため、弁別に必要な音響情報が十分に聞き取られなかったという可能性も考えられる。
- 2 本実験では、破裂音では3つのミニマルペア（6語）が用いられているのに対し、破擦音では1つのミニマルペア（2語）しか用いられていない。その意味で、破擦音よりも破裂音の方が結果の信憑性が高いと言える。刺激音の数を増やすと実験参加者の負担が増大するため、本実験では破擦音の刺激音を増やすことは避けたが、本実験の結果の正しさを検証するためには刺激音を増やして追実験を行う必要があるかもしれない。今後の課題としたい。

## 参考文献

- Boersma, Paul and David Weenink (2021) Praat: Doing phonetics by computer (ver. 6.1.50). <https://www.fon.hum.uva.nl/praat/>
- Cho, Taehong and Peter Ladefoged (1999) Variation and universals in VOT: Evidence from 18 languages. *Journal of Phonetics* 27: 207–229.
- Haggard, Mark, Stephen Ambler and Mo Callow (1970) Pitch as a voicing cue. *The Journal of the Acoustical Society of America* 47 (2): 613–617.
- Karlsson, Anastasia and Jan-Olof Svantesson (2011) Preaspiration in Mongolian dialects: Acoustic properties of contrastive stops. Paper Presented at the 10th Seoul International Altaistic Conference: 125–140.
- Karlsson, Anastasia M. and Jan-Olof Svantesson (2012) Aspiration of stops in Altaic languages: An acoustic study. *Altai Hakpo* 22: 205–222.
- Kent, Ray D. and Charles Read (1992) *The Acoustic Analysis of Speech*. San Diego: Singular Publishing Group.
- Klatt, Dennis H. (1975) Voice onset time, friction, and aspiration in word-initial consonant clusters. *Journal of Speech and Hearing Research* 18: 686–706.
- Labrune, Laurence (2012) *The Phonology of Japanese*. Oxford: Oxford University Press.
- Lin, Yen-Hwei (2007) *The Sounds of Chinese*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 齋藤純男 (2006) 『日本語音声学入門 改訂版』東京：三省堂。
- Svantesson, Jan-Olof, Anna Tsendina, Anastasia M. Karlsson and Vivan Franzén (2005) *The Phonology of Mongolian*. Oxford: Oxford University Press.
- Svantesson, Jan-Olof and Anastasia Karlsson (2012) Preaspiration in modern and old Mongolian. *Suomalais-ugrilaisen Seuran Toimituksia* 264: 453–464.
- 高田三枝子 (2011) 『日本語の語頭閉鎖音の研究 — VOT の共時的分布と通時の変化 —』東京：くろしお出版。
- 植田尚樹 (2018) 「中国語・内蒙古語・モンゴル語の語頭閉鎖音における VOT の差異」『日本言語学会 第 157 回大会 予稿集』172–177 (京都：日本言語学会)。
- Ueta, Naoki (2018) Voice onset time of word-initial stops and affricates in Khalkha Mongolian. *Journal of the*

*Phonetic Society of Japan* 22 (2): 131–140.

植田尚樹 (2020) 「モンゴル語ハルハ方言の語中閉鎖音の音声的バリエーションと音韻解釈」『日本モンゴル学会紀要』50: 1-18.

植田尚樹 (2024) 「モンゴル語の帯気性対立の他言語話者による知覚 — 日本語・中国語・韓国語母語話者を対象とした知覚実験 —」『北洋大学紀要』3: 5-19.

朱春躍 (2010) 『中国語・日本語音声の実験的研究』東京：くろしお出版.

植田 尚樹 (ueta\_naoki@aa.tufs.ac.jp)



# コスプレイベントにおけるイベント参加者の実態と 今後の可能性

—「とまこまいコスプレフェスタ」参加者への  
アンケート調査を通して—

樋口 葵  
北洋大学

Survey of event participants at cosplay events and future possibilities  
for cosplay events

— Through a survey of participants in “Tomakomai Cosplay Festa” —

HIGUCHI Aoi  
Hokuyo University

## Abstract

The purpose of this paper is to examine cosplay events from the perspective of regional revitalization, where participants can freely walk around town wearing their costumes and enjoy cosplaying. As an example of this, we took up the “Tomakomai Cosplay Festa”. The survey results showed that most of the participants were young people and many were repeaters, and that the Tomakomai Cosplay Festa had a high level of recognition and retention. However, the number of participants who dine while wearing cosplay costumes was still low. There was also the issue of transportation. In recent years, cosplay events have been spreading throughout Japan. They have the potential to make great use of all kinds of local resources as venues for cosplay photo shoots, and at the same time, they can help participants get to know the local community by making them visit the area. This event is also expected to attract repeat visitors to the area.

## 1. はじめに

コスプレを行う人は、「コスプレイヤー」や「レイヤー」と呼ばれ、アニメやマンガ、ゲームの世界に入り込んで好みのキャラクターになり、日常の自分から離れて、非日常の自分に転じる。田中（2009）によると、レイヤーの数は1990年代半ば以降に増加し、2000年前後には著しく一般化したと述べており、「国内におけるコスプレイベントについて、1980（年代）はプライベート空間であるイベント会場で行われ、そこから1990年代にサービス性の高い施設での開催、2000年代に公共空間での展開、2010年代に地域イベントとしての展開へと変遷が確認された」（村松，2017）。つまり、日本国内においては、ここ20年ほどで急速にコスプレや、コスプレ活動を催しとして取り入れたイベント「コスプレイベント」が定着してきたといえる。また、矢野経済研究所が2022年度に行った市場規模推移調査でも、コロナ禍の2020年度は240億円と推計されたが、2022年度は265億円、2023年度では280億円<sup>1</sup>と年々上昇しており、今後もさらなる広がりが期待されている。

コスプレイベントは、世界最大級のコスプレの祭典といわれる世界コスプレサミットをはじめ、日本橋ストリートフェスタ、池袋ハロウィンコスプレフェス、acosta! などさまざまある。北海道内に限っても、洞爺湖町でのTOYAKOアニメ・マンガフェスティバル（以下、TMAF）をはじめ、札幌市でのSapporo City Cos!（以下、サツコス）、新さっぽろコスプレフェスタ、小樽市でのウイングベイコスプレフェス（以下、ウイコス）、函館市での函館コスプレ、「啄コス!」など数多くのイベントが開催されている。それぞれ形態も多様で、コスプレが目的となっているイベントもあれば、サブカルチャーイベント等もある。街全体をイベント会場とし、コスプレ衣装に身を包んだまま自由に街中や店内を移動し、遊んだり撮影したりできるイベントも増えており、北海道千歳市では地域活性化を目的に、2024年に初めてコスプレイベントを開催した。

本研究では、地域活性化や町おこしで開催されているコスプレイベントに焦点をあて、コスプレイベントがもたらす効果やその可能性について考えたい。そこで、本論文では、2024年度で12回目となった北海道苫小牧市の「とまこまいコスプレフェスタ（以下、とまコス）」を対象に、参加者へのアンケート調査を通して現状や課題を調査し考察することとする。

## 2. コスプレとコスプレイベント

そもそもコスプレとは、漫画やアニメなどに登場するキャラクターの衣装、容姿をまねてそのキャラクターになりきるコスチューム・プレイのことである（野村総合研究所，2005）。アニメやマンガ、ゲームの登場人物らの中からコスプレする対象を決めて、化粧のほか、自作した衣服やウィッグ、小道具などを装着して、対象とする像に外見を近づけていく。その始まりは、「アメリカのSF『スターウォーズ』のファンが、登場するキャラクターの扮装をしていたことであり、1980年代に日本SF大会の会場などに波及し、日本でも行われるようになった」（田中，2009）といわれている。レイヤーたちは、コスプレが可能な



施設のほか、撮影会やコスプレイベントなどの機会にコスプレを行い、複数のレイヤーが集まって撮影を楽しんだり、交流を楽しんだりする。野村総合研究所(2005)では、自分たちの好きな作品のキャラクターになりきることで、キャラクターへのあこがれや愛情を表現できるとしている。貝沼(2016)は、コスプレの特徴としての異質性を5つあげた。「①本名と異なるコスプレネーム(名前の非日常性)②アニメやマンガ・ゲームのキャラクターを模したメイク・ウィッグ・厚底靴(顔・身体の非日常性)③アニメやマンガ・ゲームのキャラクターを模した服装(服装の非日常性)④普段の交友関係とは異なる仲間(交流関係の非日常性)⑤撮影に適した日常感の薄い場所(場所の非日常性)」とし、「名前、顔・身体、服装、交流関係、場所これらすべての要素が日常と異なるため、演技手には高揚感が生じる」としている。

かつて、コスプレは、原作に敬意を表した2次創作という位置付けであり、ごく一部の者が行っているという認識であった(野村総合研究所, 2005)。菊地・志塚(2017)の論文では「コスプレを見慣れていない人に怖がられたり、作品に悪いイメージが付いてしまったりすることを防ぐために、会場以外での衣装やウィッグ(コスプレ用のカツラ)着用はしないことがマナーとして知られていた」と記載しており、「自宅からコスプレをしながら公道を歩くことは、コスプレイヤーの間で作られたコミュニティやコスプレイベントのルールに反する」(貝沼, 2016)とされてきた。

しかし、近年では、ハロウィンをはじめとした行事にコスプレを行う人々も増加している。都市空間で広がりを見せる地域イベントとしてのコスプレイベントに焦点をあてた村松(2017)は、5W2H(誰が、何故、何を、どのように、誰に、どこで、どのくらい)の形式に合わせてカテゴリー情報を整理し、広域積極開催型、商店街型、公園・広場型、広域非積極開催型、拠点開催型、複数拠点型の6つに分類した。貝沼(2016)はコスプレを行う場所を「コスプレができるサブカルチャーのイベント」「コスプレを目的としたイベント」「個人撮影もしくは少人数のグループでの撮影会」の3つに分類したが、菊地(2022)は、「貝沼の整理に加えて、近年のコスプレ文化のトレンドでは『街中』も1つのカテゴリーとして追加して良いように思われる」と述べ、菊地(2022)は、ハロウィンをはじめ、さまざまな時期に街中でコスプレができるイベントの呼称を「街コス」と呼んだ。その街コスについて、菊地・志塚(2017)は埼玉県宮代町開催の「ラブコスみやしろ2016」を対象に、街コスがどのような性質を持ったコスプレの場であるのか等を研究し、その中で「これまでのコスプレを目的としたイベントとは異なり、街中や店舗内でのコスプレ撮影やコスプレしたまま飲食ができる点を求めて参加者が参加している」と述べた。

とまコスについても、レイヤーがコスプレ写真の撮影を楽しめる撮影会場を市内数か所設けているほか、ステージイベントや写真展、トークショーなどを展開しており、街コスともいえるイベントである。苫小牧民報による報道では、2023年度の第11回目のとまコスの参加者数は延べ9500人(前年比約1500人増)、2日間のイベントでの経済効果は3856万円(前年比約1000万円増)で、宿泊者数は延べ2400人、日帰りは延べ7100人だっ

た<sup>2</sup>と記載されており、高い人気を誇っていることがわかる。では、実際に参加者は撮影会場をどの程度回ったり、どの程度が飲食店を利用していたりするのだろうか。

### 3. とまこまいコスプレフェスタ

#### 3.1. 概要

はじめに、とまコスの概要について確認する。とまこまいコスプレフェスタ実行委員会が主催するイベントで、街中を盛り上げることを目的に2014年に始まった。開始した1年目は年に2回実施していたというが、翌年以降はイベントの閑散期である11月に開催している<sup>3</sup>。コロナ禍で縮小した年もあったが、2024年度で12回目に上り、同年度は2024年11月2、3日の土日の2日間に行った。

2日間の内容としては、コスプレ撮影やトークショー、アニソンDJイベント、写真展、痛車<sup>4</sup>の展示、コスプレボーリング大会、同人グッズ頒布コーナー、「とまコス市民交流会場ステージイベント&コスプレフェスタ専属コンシェルジュコーナー」などで、コスプレを楽しむにとどまらず、多岐にわたっている。目玉企画としては、SNS総フォロワー300万人以上のオランダ出身のエラ・フレイヤ氏と身長182cmの高身長系インフルエンサーでモデルやコスプレイヤーとして活動するミシャ氏による特別トークショーであり、イベントの主会場である苫小牧市表町のグランドホテルニュー王子ほか、木場町のMEGAドン・キホーテ苫小牧店や表町の苫小牧市元気ホールでもコスプレ要素を感じる様々なステージイベントを開いた。

イベントの特徴としては、市内18か所に設けられた撮影会場でコスプレ写真を撮影することが可能で、イベント開催中の2日間はコスプレをしながら自由に街中を移動できる点にある。2024年度は、1日目が12か所で、2日目が13か所で、フェリーターミナルやフェリーの船内、ゴルフ場、神社、高校、公園、ホテル、企業敷地内等を設けた。表1がそれぞれの撮影会場の地点であり、図1が1日目の撮影会場の地点を表した地図である。撮影会場は、自由に開放されている場所と、とまコスのチケットがなければ入ることのできない場所があり、今回のチケット代は1日のみの場合で通常料金2200円、学割料金1000円、2日間の通しであれば、通常料金3200円、学割料金1800円の設定となっている。

また、コスプレの衣装のまま店内で食事をする 것도大きな特徴である。ランチ時間はもちろんディナーの時間帯も可能で、コスプレ可の飲食店は約30店舗<sup>5</sup>ある。海鮮料理店や中華料理、カレー店、喫茶店など多様で、とまコスのチケットまたはイベント参加がわかるリストバンドを持っている人、またはコスプレをしている人には、「サワー飲み放題30分延長無料」や「人数分の人気メニュー提供」といったイベント特典を設けている店があった<sup>6</sup>。

表1 2日間の撮影会場のまとめ

	撮影会場地点	チケット	1日目	2日目
①	樽前山神社	チケット必要	○	○
②	MEGA ドン・キホーテ (夜間：屋上)	屋上のみチケット必要	○	
③	万代苦小牧店	自由開放	○	○
④	王子製紙迎賓館	チケット必要	○	
⑤	グランドホテルニュー王子	撮影会場はチケット必要	○	○
⑥	苦花地方卸売市場	自由開放	○	
⑦	苦小牧西港フェリーターミナル	自由開放	○	○
⑧	太平洋フェリーきそ	チケット必要	○	
⑨	キラキラ公園	自由開放	○	○
⑩	新苦小牧プリンスホテル和展望レストラン (夜間)	チケット必要	○	
⑪	タピオパークゴルフ場	自由開放	○	○
⑫	北海道大学苦小牧研究林	自由開放	○	○
⑬	沼ノ端クリーンセンター	チケット必要		○
⑭	トヨタ自動車北海道	チケット必要		○
⑮	駒澤大学附属苦小牧高等学校	チケット必要		○
⑯	商船三井さんふらわあ	チケット必要		○
⑰	日本軽金属	チケット必要		○
⑱	T.M.CLASS	自由開放		○



図1 2日間の撮影会場のマップ (Yahoo! マップを元に筆者が加筆し作成)

### 3.2. とまこまいコスプレフェスタの様子

レイヤーの多くが、街中や撮影会場を2人以上で歩き回っており、撮影会場では、さまざまな角度から色々なポーズで写真撮影を行う様子が見られた。特別珍しい場所ともいえないような、ディスカウントストア内の白い壁でポーズをとって撮影する様子も見受けられた。また、カメラマンと帯同している人や、レイヤー同士で写真を取り合う場面も見ら

れた。このほか、コスプレをしていない人がレイヤーに対して、一緒に写真を撮りたいと申し出て2ショットで写真を撮っていたりする人もいた。

イベント後、インスタグラムやXなどのSNSでは「#とまコス」「#とまコス12」とタグ付けされた写真が出回り、写真とともに「色んな人とお会いできて楽しかったです！来年が今から楽しみ～」「ほんと自然が素晴らしかった」といった感想が記されていた。

#### 4. 研究方法

北洋大学の学生7人と筆者が、主会場であるグランドホテルニュー王子とステージイベントが行われたMEGA ドン・キホーテ苫小牧店の2か所に分かれて、アンケート調査を実施した。男女問わずレイヤーに声をかけ、1人5分程度のアンケート用紙に記入をお願いした。

項目としては、各レイヤーが撮影会場をどの程度回っているかを知るために、訪問した撮影会場を記入してもらったほか、撮影会場への交通手段、とまコス開催中の食事情、とまコス参加に伴う宿泊の有無、市内で使った金額、これまでの参加回数、今回のイベントの参加日数、参加理由、他のコスプレイベント参加の有無、年齢、居住地、職業といった回答を求めた。調査日時は、とまコス1日目である2024年11月2日の午後3時半から5時半に行い、有効回答数は46件だった。その様子が図2と図3である。



図2 グランドホテルニュー王子での調査の様子（筆者撮影）



図3 MEGA ドン・キホーテ苫小牧店の調査の様子（筆者撮影）

#### 5. アンケート調査結果

##### 5.1. 参加者の年齢層と居住地

図4は参加者の年齢層を表したグラフである。20代が48%と最も多く、次いで30代の28%、10代の20%と続いた。レイヤーは全国に数十万人いるとされ、普段は別の仕事を持っていて、趣味として活動する人が多い<sup>7</sup>と言われており、今回のアンケート調査でも、レイヤーを本業とする人は0人で、学生や会社員、保育士、教師といった回答があり、他に本業を持つ人ばかりであった。

次に、居住地についても尋ねた（図5）。回答の中で最も多かったのは、開催地の苫小牧市ではなく、札幌市だった。数は16件で、全体の約37.2%を占めた。次いで、苫小牧市の10件だった。そのほか、登別市や白老町、伊達市、洞爺湖町など胆振管内のほか、旭川市や稚内市、根室市からも来ていることが分かった。また、東京都からの参加もあった。ここから、とまコスの参加者は苫小牧市民よりも市外に住む人々が大半を占めており、とまコスのために苫小牧市を訪れる行動をとっていることが明らかになった。

10代の参加者（9件）に絞ってしてみると、居住地は苫小牧市、登別市、洞爺湖町、室蘭市、伊達市、札幌市となっており、胆振管内在住者が8件と、9割ほどの割合を占めていた。それ以外の年代については、特に大きな特徴は見られなかったが、開催場所と同じ道内勢が多い。これらから、参加者のうち若年層ほど開催場所から近い地域に住んでおり、20代以降の参加者は、居住地に関係なく訪れていることがいえる。

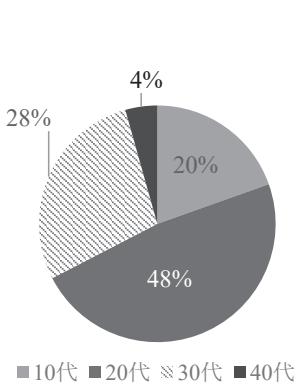


図4 参加者の年齢層

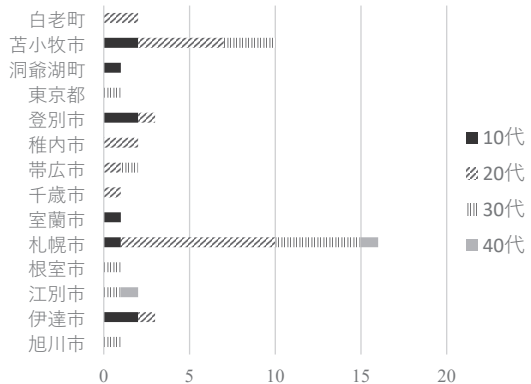


図5 参加者の居住地と年齢層

## 5.2. 参加理由とこれまでの参加回数

参加理由については、自由回答式で聞いた。得られた回答を筆者が主観的に分類したのが表2である。「去年」あるいは「何度」も参加して楽しかったことを理由に挙げた回答が最も多く、全体の3割近くを占めた。次いで、とまコスに興味があったとの答えが多かった。そのほか、ロケーションが良いことや友達との交流、近場などの回答があった。

2024年度で12回目となった、とまコスの参加回数を問う項目では、「3回目」との回答が12件と多く、次いで「初めて」と「2回目」がそれぞれ11件だった（図6）。4回以上という回答も計12件見られており、中には「12回目」と答える回答も2件あった。また、4回以上以降の参加者については、「毎年来ているから」との回答が多く、とまコスの定着度がうかがえる。一方で、今回が「初めて」と答える人は「楽しそうだったから」「気になっていたから」と答えており、以前からイベント自体については認知していたことがうかがえた。

表2 今回のとまコスの参加理由

参加理由	件数
「去年」あるいは「何度」も参加して楽しかったから	13
楽しそう・気になっていたから	6
ロケーションが良いため	4
友達と撮影・交流するため	4
知人に誘われたから	3
近場のため	3
コスプレをしたいから	3
イベント内容が良いため	1
その他	4
無回答	5

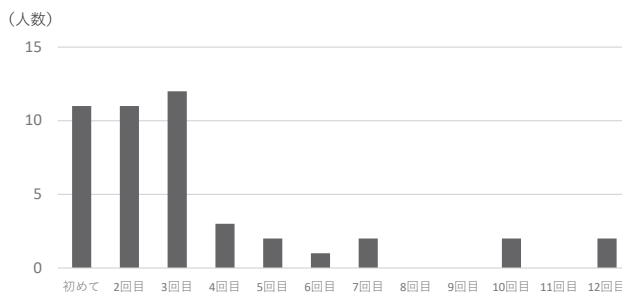


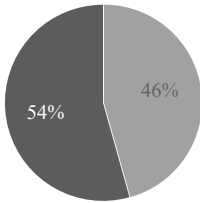
図6 とまコスへの参加回数

### 5.3. 今回のとまコスの参加日数と他のコスプレイベントへの参加の有無

今回のイベント開催中の参加日数を問う項目では、回答者の半分以上が2日間の参加を挙げていた(図7)が、図9でこれまでのとまコスへの参加回数との関連を調べると、「初めて」参加したという回答者は9割が1日のみの参加となり、参加回数が多いほど、2日間とも参加していることが分かった。「2回目」と答えた回答者については、11人中7人が2日間とも参加と回答しており、「4回目」より多い参加者は1人を除く11人が2日間の参加と答えた。以上から、1回以上参加した人の満足度が高いことがうかがえる。

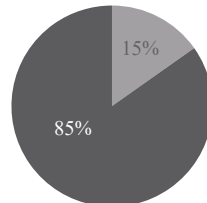
また、ほかのコスプレイベント参加の有無を問う項目では、図8から分かるように85%が有ると回答しており、「ある方は苦小牧以外のどこのイベントに参加したことがありますか」と聞いたところ、自由回答にはTMAF、サツコス、ウイコス、登別マリンパークコスプレイベント等と記述していた。このことから、多くが道内各地で開かれているコスプレイベントに参加していることが明らかとなった。一部、東京で開催されているイベントへ参加したことがあると回答した参加者もいて、レイヤーは道内を中心にさまざまな地域で

行われているコスプレイベントを循環的に訪問しており、各地域での撮影を楽しんでいるといえる。



■ 1日 ■ 2日

図7 今回のイベントの参加日数



■ 無 ■ 有

図8 他のコスプレイベントへの参加の有無

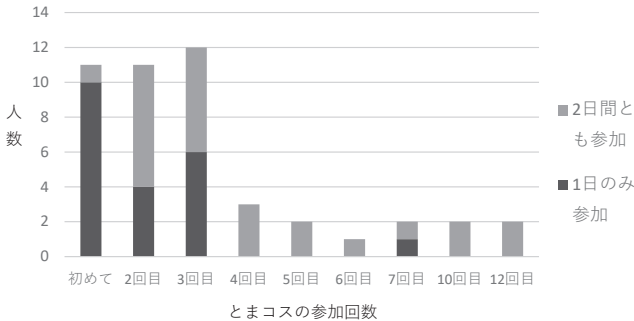


図9 とまコスの参加回数と今回のイベントの参加日数

## 5.4. 地域への直接的な経済効果

### 5.4.1 宿泊の有無と宿泊先、食事の有無

「とまコス参加に際し、宿泊を伴っていますか」との質問についての集計結果は図10である。5.3で2日間参加と答えた参加者が多くにもかかわらず、宿泊を有すると回答した人は、半数を下回っていた。「有」の回答の中には市内の宿泊施設が多くを占めたが、市外の宿泊施設やその他として「実家」や「友人宅」という回答もあった。

イベント開催中の食事についての項目では、とまコスの特徴であるコスプレのまま食事をしたとの回答は46件中21件で半数を下回った(図11)ほか、その内訳については2件が店名未記入で不明だったが、19件中11件が市内のファストフード店だった。しかも、いずれも撮影会場に指定されているMEGA ドン・キホーテの施設の中にあるファストフード店であり、地域に根差した飲食店や個人経営の店での利用率は少ないことが分かった。それ以外の8件についても同施設のファミリーレストラン(1件)や市内の大型ショッピング施設のフードコート(1件)で、それ以外の記載は「もんじゃ焼き」とその他の撮影会

場を示す回答だった。

自由回答欄では、大型商業施設での食事歓迎を求める声のほか、「参加者限定パッケージのガラナなど（飲食物）の配布があったらうれしい」「（飲食店の）通路が狭いのではないだろうか」「コスプレ入店可能な店がメイン会場から遠い」「（コスプレ衣装のまま）食べられるお店が増えたら利用も増えるかも」「もう少しコスプレのまま利用できる店舗が欲しいです」「キッチンカーがあればOKです」との記述がみられた。また、市内飲食店ではイベント特典を設けているにもかかわらず、「コスプレ割引」を求める参加者の記述もあり、距離的な問題やコスプレ可能な飲食店舗数の少なさからか、利用はほとんどみられなかった。

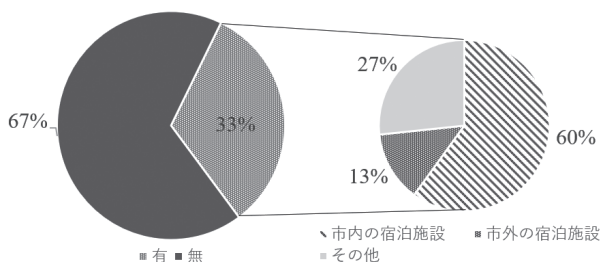


図 10 とまコス参加に伴う宿泊の有無と宿泊先

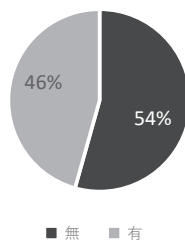


図 11 コスプレのままの食事の有無

## 5.4.2 市内で使った金額と内訳

自由記述式では「苫小牧市内でイベント（コスプレ・交通費）以外で、市内で使った金額とその中身について簡単に教えてください」という項目も設けた。すると、46 件中 27 件の回答があった。それ以外は「なし」もしくは未記入だったが、27 件の内訳については、15 件が飲食代と記入しており、金額については最少 600 円（ファーストフード店での飲食代）で、最も大きい金額は 2 万 3200 円（コンビニ、飲食代、宿泊代、土産代）だった。1 人あたりに平均すると、約 5647 円だった。若年層が多いからか、「プリクラ<sup>8</sup>」や「ガチャガチャ<sup>9</sup>」との記入も目立っていた。

## 5.5 撮影会場の訪問数と手段

### 5.5.1 撮影会場の訪問数

とまコス 1 日目では、全 12 か所の撮影会場があったが、当日訪れた撮影会場の数については、3 か所が最も多く、次いで、2 か所、1 か所という順番だった（図 12）。最も多い回答は 6 か所で、図 13 で参加回数との関連を分析したところ、とまコスへの参加回数を「初めて」と答えた 7 件については、1・2 か所がそれぞれ 1 件だったが、3・4・5 か所が 2 件で、6 か所が 3 件と、初めて参加する人は比較的多くの撮影会場を回る傾向が見られた。

また、どの撮影会場を回ったのかを知るために、各会場を示す地図を見せながら、回答



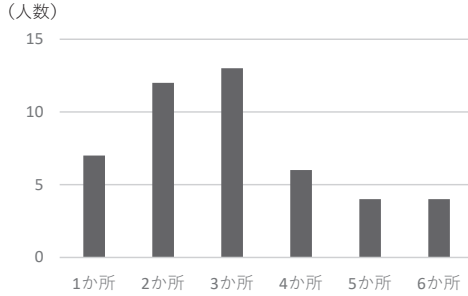


図 12 今回のイベントでの撮影会場の訪問数

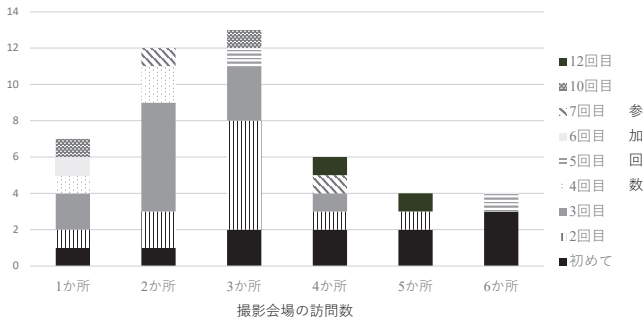


図 13 とまコスへの参加回数と今回のイベントでの撮影会場の訪問数

者に番号を記入してもらった。その回答結果をグラフにしたものが図 14 だ。主会場である「⑤グランドホテルニュー王子」が最も多く、次いで開会式も行われた「①樽前山神社」、「②MEGA ドン・キホーテ苫小牧店」「⑨キラキラ公園」「⑪タピオパークゴルフ場」「④王子製紙迎賓館」と続き、次に同率で「③万代苫小牧店」「⑧太平洋フェリーきそ」となり、「⑦苫小牧西港フェリーターミナル」「⑥苫花地方卸売市場」「⑫北海道大学苫小牧研究林」という結果だった。「⑩新苫小牧プリンスホテル和 展望レストラン」は夜間限定の撮影会場と指定されていたため、アンケート調査を行った時間帯はまだ空いていなかったため、0であったと考えられる。また、MEGA ドン・キホーテ苫小牧店については撮影会場に指定されているのは夜間の屋上であったため、必ずしも屋上での撮影を目的に訪れているわけではなく、施設内の空き場所でも撮影していたとも考えられる。さらに、調査を行った場所がグランドホテルニュー王子と MEGA ドン・キホーテ苫小牧店の 2 か所であったことも、それぞれの撮影会場の参加率が多かった要因の一つであるとも捉えられるだろう。

とはいえ、以上の結果から、イベントの核となる地点を訪れつつ、港内を一望できるキラキラ公園やゴルフ場など自然景色を求めて訪れているといえるだろう。

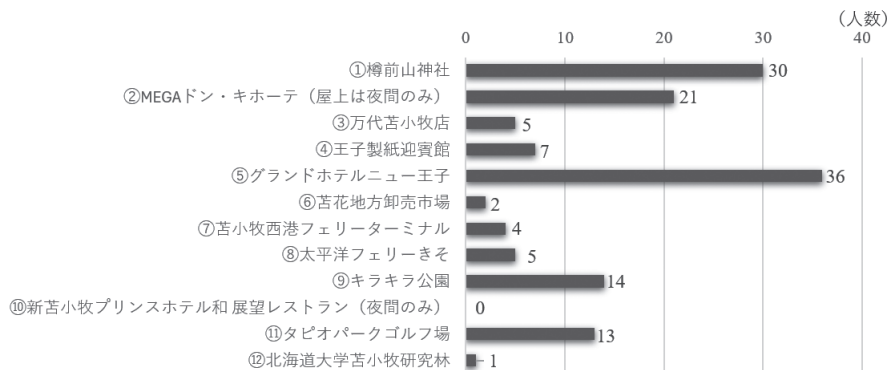


図 14 撮影会場ごとの訪問人数

### 5.5.2 撮影会場への交通手段

撮影会場の交通手段についても尋ねた。その結果、車と答えた回答者が圧倒的に多く、約 8 割を占めた (表 3)。交通手段と撮影会場の訪問数の関係性 (表 4) についてみると、車を使用したという回答者は、多くの撮影会場を回っていることが分かる。一方で、JR や徒歩、自転車を使用した人は多くて 4 か所となっており、大半が 1、2 か所にとどまっていた。ここから、5 か所以上の撮影会場を訪問しようとする、車を用いなければ訪問しづらいことが読み取れた。また、調査項目の中で、「交通手段、ロケーション (撮影) 会場について要望はありますか」と自由記述式で質問したところ、「バスやタクシーともっと連携して、1 日乗車券などあれば良いと思います」、市内の他の大型商業施設への出入りを要望する声があった。

表 3 交通手段

最も使用した交通機関	件数
車	36
JR	4
徒歩	3
バス	1
タクシー	1
自転車	1

グランドホテルニュー王子は JR 苫小牧駅から約 280m、MEGA ドン・キホーテ苫小牧店は駅直結となっているが、1 日目の撮影会場において、駅から最も遠い北海道大学苫小牧研究林は約 6.6km、次いで遠い万代苦小牧店は 4.6km ほど離れており、徒歩での移動は困

表4 交通手段と撮影会場の訪問数

		撮影会場の訪問数					
		1か所	2か所	3か所	4か所	5か所	6か所
交通手段	車	3	8	12	5	4	4
	JR	2	1	1			
	徒歩	1	2				
	バス	1					
	タクシー		1				
	自転車				1		

難で、車やバス等の交通手段がなければ気軽に訪問することが難しいことが推察できた。とはいえ、近い距離にある苫花地方卸売市場への訪問は2件にとどまっており、必ずしも距離だけが問題といえないことも明らかだ。同市場はチケットの必要性もない。以上から、レイヤーは自分のコスプレの世界観に合う撮影場所を求めて動き回っていると考えられる。

## 6. 考察

### 6.1. 集客効果

とまコス参加者は、10代、20代の若年層が大きな割合を占めていたことから、とまコスというコスプレイベントが若年層に浸透しており、高い人気を誇るイベントであることが分かった。また、市外からの参加者やリピーターも多く、とまコスの定着度合いの高さも読み取れた。特に「初めて」と答えた参加者も一定数いたうえ、その参加目的が「気になっていたから」と答える人が多く見受けられ、地域内におけるイベントの認知度も高いと推察できた。このほか、参加者の多くが他のコスプレイベントにも参加しており、とまコスの参加者は、各地域のコスプレイベントを循環的に訪問するという特徴を持っていることも分かった。ここから、とまコスは若年層や市外居住者、リピーターの集客効果が高く、同イベント開催が苫小牧を訪れる動機を与えているイベントであるといえる。

### 6.2. 経済効果

調査では、市内での宿泊の有無、市内での食事の有無についても聞いたが、2日間とも参加すると答えた参加者が半数以上を超えたにもかかわらず、市内での宿泊については「有」と回答する人は少なく、多くが日帰りだった。また、食事についても、コスプレのまま飲食店を利用する人は半分弱であった。ただし、「有」と答えた人の中で多かったのは撮影会場周辺のファストフード店を挙げていた。コスプレ可の飲食店があることを認知していなかった可能性もあるが、食事にはあまり手間暇をかけていないことも推察できそうだ。

レイヤーがとる行動については、①コスプレをしたいキャラクターを決める②撮影場所

や参加したいイベントを調べる③衣装を用意する④SNSに登録する⑤他のコスプレヤーと交流するための名刺を作る⑥撮影やイベントに行く⑦写真を撮る、他のコスプレヤーと名刺交換、交流⑧撮影した写真を加工してSNSにアップし、他者と交流（貝沼, 2016）といわれているように、コスプレ姿を写真に残すことこそが極めて大切なことであり、イベント開催時間中は食事時間には時間を割く人は少ないとも考えられ、同イベントの特徴であるコスプレのままの飲食店利用が参加者にうまく活用されていないことが浮き彫りになった。一部、参加者から「食事場所が遠い」との声もあり、市内飲食店が一同に集まる場所を提供して軽食を売り出すなどの工夫が必要となるかもしれない。また、食事風景がアニメやマンガ、ゲーム内の中に入り込むようなコスプレや、アニメ等とコラボレーションした軽食が提供されれば、より利用が促進されるのではなかろうか。

その一方で、市内で使った金額については、最も多くて2万円超の回答もあり、市内飲食店や宿泊施設の利用がより増えることで、今後さらなる経済効果を見込めると期待できるだろう。

### 6.3. 交通手段の工夫

今回の調査では、各撮影会場へ訪問するために利用した交通手段について、約8割が車を挙げていた。イベント開催中の2日間の撮影会場同士では最も遠くて約17km（トヨタ自動車北海道と万代苦小牧店）離れており、車を使用しなければ撮影会場を効率よく回することは難しい。特に、高校生などの若年層にとっては、車を持ち合わせていないため、それぞれへのアクセスが課題と考えられる。調査の中でも、バスやタクシーとの連携を求める声もあり、イベント開催中のみ臨時シャトルバスを走らせたり、徒歩圏内だけに絞ったりなど工夫が必要になりそうだ。

しかし、調査結果から近距離だからといって訪れている割合が高いともいえず、参加者へのより細かいニーズ調査が求められるだろう。2日目に1日目で回ることのできなかつた撮影会場を訪れたりしている可能性もあるだろうし、主会場でイベントが目白押しとなっていることからイベント参加か撮影かで選択肢を迫られていることもあるかもしれない。初めて参加した人は多くの撮影会場を回っている傾向がみられたが、リピーターは人それぞれであり、自分たちのコスプレの世界観に合ったところをあらかじめ厳選して訪問していると考察できる。

### 6.4. 地域資源の活用

菊地・志塚 (2017) は、アニメやマンガの舞台・モデルにもなっていない場所に対して、レイヤーは「自発的に物語性を付与し、自分たちが再現しようとするアニメ、マンガ、ゲームの世界の一部としてその場所を読み込んで」おり、「代替不可能な地域固有性ではなく、代替可能で普遍的な神社としての雰囲気・イメージである。その雰囲気・イメージに対し、コスプレヤーたちにコンテンツを媒介した物語性を付与してもらおうという構図」と述べ

ており、地域固有の雰囲気・イメージは存在しないと指摘している。また、「ラブコスミヤしろ 2016」において、開催場所が舞台地やモデルとなった作品のコスプレは1つも存在しなかったと述べている。小新井(2019)も TMAF を事例に、「見立てというプロセスによって、作品と土地に結びつきがなくても、フィクションとしての物語世界を再現することは可能」としており、これらから作品と地域においては、結びつきは必要ないことがわかる。

苫小牧についてはどうだろうか。苫小牧を舞台にしたアニメやマンガとして「機動警察パトレイバー」「ダイヤのA」「僕だけがいない街」、そして現在週刊ヤングジャンプで連載が続いているアイスホッケーを題材にしたマンガ「ドッグスレッド」などがあるが、今回、それらの舞台となった場所は撮影会場等に指定されていない。また、調査する限りでは、それらの登場人物のコスプレをしているレイヤーも見なかった。

苫小牧市は、ウトナイ湖や樽前山といった自然豊かな景観を有する一方で、数々の工場が立ち並ぶ産業都市であり、北海道随一の港湾都市である。今回の撮影会場は、苫小牧らしさを感じられる場所も多く、港内を一望できるキラキラ公園のほか、フェリーに乗ってコスプレ写真を撮ることも可能で、一般企業の敷地内や普段立ち入ることのできない王子製紙迎賓館などもあった。また、調査では撮影会場への訪問数について、最も多い人だと、1日で6か所を訪れていたことも分かった。その割合をみると、初めての参加者が多かったが、12回目の人でも4、5か所回っており、コスプレ撮影を通して自然と地域内を周遊していたことが明らかとなった。レイヤーにとって、写真撮影は目的の一つでもあり、自分のコスプレの世界観にあった背景を欲していると考えられる。そのため、さまざまな世界観に対応できる撮影会場が必要不可欠となる。また、先行研究からわかるように、そこに作品との結びつきは必要ない。このことから、レイヤーは自分の世界観に合うコスプレ写真を撮るためには地域内を周遊するといえ、地域に存在するあらゆるものが撮影会場となり得る可能性を持つといえるのではないだろうか。

今回のイベントでは撮影会場は18か所だったが、宿泊客増加を図って夜間の開催場所を増やしたり、産業都市である地域性をいかし工場夜景を生かしたり、あるいは、早朝を狙った撮影会場を作ることも可能だろう。今回の調査項目の最後に設けた自由記述式の要望や感想については、「もっと早く開放してほしい」との声もあり、苫小牧らしい霧がかかった朝方の早い時間も幻想的な空間の演出にはぴったりかもしれない。また、未だ撮影会場に含まれていない場所が、レイヤーの創造力から、よりよい世界観となる場合もあるとも考えられ、ありとあらゆる地域資源に可能性が潜んでいるといえる。

## 7. おわりに

本研究では、コスプレイベント参加者のアンケート調査をもとに、その実態を分析した上で今後の可能性について言及した。その中で、若年層への集客効果が高いことや、地域に存在するありとあらゆる地域資源がコスプレ写真撮影の会場となり、大いに活用できる可能性を持つことがいえた。また、コスプレ撮影ではレイヤーを地域内に回遊させる効果

もあり、地域を知ってもらうことや地域へのリピーター確保にもつながるだろう。今回の論文では、コスプレイベントの1日目の参加者のみの結果から導き出したため、2日目の参加者の行動は追うことができなかった。調査母数を増やすとともに調査項目も見直し、さらなる検討を重ねたい。

## 謝辞

苫小牧市産業経済部産業振興室観光振興課の安達様、是則様、一般社団法人苫小牧観光協会の永井様、インタビュー調査を快諾いただきありがとうございました。また、観光振興課の皆様には、とまこまいコスプレフェスタでのアンケート調査にも快諾いただきありがとうございました。ここに改めて皆様の助力に感謝いたします。

---

## 注

- 1 矢野経済研究所 (2023) 「『オタク』市場に関する調査を実施 (2023 年) プレスリリース No.3383 (2023 年 12 月 27 日)」(2024 年 11 月 10 日アクセス)
- 2 苫小牧民報 (2024 年 3 月 19 日)「参加者 9500 人にぎわい戻りつつ」より
- 3 2024 年 8 月 23 日に苫小牧市観光振興課と観光協会に行ったインタビュー調査より
- 4 痛車とは、車体にアニメやゲーム等のキャラクター、メーカーのロゴなどを描いたステッカーやシートを貼り付け、装飾した車のことである。
- 5 読売新聞オンライン (2024 年 11 月 8 日)「コスプレイヤー『交流の輪』拡大、フェスタに 9000 人、人気プレイヤー対談や衣装で出入りできる飲食店も」より
- 6 第 12 幕とまこまいコスプレフェスタ HP「第 12 幕とまこまいコスプレフェスタ | 苫小牧市協力の都市型コスプレイベント」より
- 7 読売新聞オンライン (2024 年 11 月 14 日)「自分を「見せる」コスプレ、SNS 普及で抵抗感なくなる…プレイヤーは全国に数十万人か」より
- 8 プリクラとは、プリントシール機のことをいう。
- 9 ガチャガチャとはカプセルトイのことをいう。

## 参考文献

- 貝沼明華 (2016) 「コスプレイヤーが求める非日常性 —— コスプレにおける場の意味 ——」, コンテンツツーリズム学会論文集 3, pp. 49-56
- 菊地映輝・志塚昌紀 (2017) 「コンテンツツーリズムとしての『街コス』: 『ラブコスみやしろ 2016』を事例として」, コンテンツツーリズム学会論文集 4 (0), pp. 24-34
- 菊地映輝 (2022) 「コスプレツーリズム—景観の持つ普遍性への着目」, 『コンテンツツーリズム研究』, 福村出版
- 小新井涼 (2019) 「コスプレイベントでの〈リアルでフィクションを再現するための見立て〉について: TOYAKO マンガ・アニメフェスタを事例に」, International Journal of Contents Tourism Vol. 4, pp. 45-59
- 村松陽野木 (2017) 「都市空間におけるコスプレイベントの実態と空間利用に関する研究: 地域イベン

トでの取り組みに着目して」, 大阪市立大学大学院 都市系専攻 修士論文概要集 (111G0000009-2016-050.pdf 2024年11月25日アクセス)

野村総合研究所 (2005), 『オタク市場の研究』, 東洋経済新報社

田中東子 (2009) 「コスプレという文化 — 消費でもあり生産でもあり」『コスプレする社会 — サブカルチャーの身体文化』, 成実弘至編, せりか書房

樋口 葵 (a\_higuchi@hokuyo.ac.jp)





## 中国語の類別詞重複語について

馮 一峰  
北洋大学

### An Analysis of Chinese Classifier Reduplications

FENG Yifeng  
Hokuyo University

#### 提要

本研究主要从生成语法的角度，针对汉语量词重叠式的句法位置、语义功能及其所表达的有定性进行了详细考察。本研究通过观察发现汉语量词重叠式并不会阻止主语位置上的领属表达C 统制宾语位置上的成分。另外，汉语量词重叠式在名词表达当中的句法位置相对灵活。以这两点观察结果为基础，本研究与以往研究不同，认为汉语的量词重叠式并不是生成在DP 的主要部位置上，而是生成在NP 的附加语位置上。针对汉语量词重叠式的语义功能及其所表达的有定性，本研究认为其主要发挥将从名词短语NP 所导出的特征复数化，并将复数化之后的特征投射到语境中提及的特定的复数个体上的功能，而其所表达的有定性则来源于汉语量词本身所表达的有定性。

## 1. はじめに

Huang et al.(2009)、Li and Thompson(1981)などでは、中国語の話題位置に不定を表す表現が現れることはできないと指摘されている。しかし、(1)に示すように、中国語の類別詞重複語は、話題位置に現れることができる。これを踏まえて、An and Zhao(2017)、Cheng(2009)、隋・胡(2017)、Yang(2005)は、中国語の類別詞重複語は定性素性(definite feature)を持つ決定詞(determiner)であり、DPの主辞位置に生成されると提案している。

(1) 个个 学生, 我 都 批评 了。

CL-CL 学生 私 すべて 叱る 完了を表す Asp<sup>1</sup>  
すべての学生を私が叱った<sup>2</sup>。

(隋・胡 2017: 35)

一方、Zheng and Kim(2022)は、統辞的な振る舞いの違いに基づき、中国語の類別詞重複語を二種類に分類した。Zheng and Kim(2022)は、“个个”、“只只”などのような類別詞重複語は決定詞であり、“朵朵”、“条条”などのような類別詞重複語は形容詞であると主張している。

Li(1999)、Wu and Bodomo(2009)は、中国語の指示詞は決定詞であると主張している。Zheng and Kim(2022)は、Li(1999)、Wu and Bodomo(2009)の主張を踏襲し、(2)のような類別詞重複語が指示詞と共に起しない例に基づき、“个个”のような類別詞重複語が現れる統辞位置と指示詞が現れる統辞位置とが同じであり、DPの主辞位置に生成されると主張している。

- (2) a. \* 这/那 个个 学生<sup>3</sup>  
こ/そ・あ CL-CL 学生  
これら/それら・あれらの学生
- b. \* 个个 这/那 学生  
CL-CL こ/そ・あ 学生  
これら/それら・あれらの学生

(Zheng and Kim 2022: 194)

本研究は、Bošković(2009, 2012)、Bošković and Hsieh(2013)、Despić(2011, 2013)の分析に基づき、中国語の類別詞重複語の統辞位置について考察する。先行研究と異なり、中国語の類別詞重複語はDPの主辞位置に生成されるのではなく、NPに付加する位置に生成されると考える。また、中国語の類別詞重複語の意味機能及びそれが表している定性について考察し、類別詞重複語は、NPから導かれる性質を複数化し、その性質を複数の個体に写像するという意味機能を果たしており、それが表している定性は、類別詞の直示的な機能

に由来していると主張する。

第2章では、Despić(2011, 2013)の提案を概観し、様々な代案を考慮しながらその妥当性について再検討する。第3章では、中国語の類別詞重複語の統辞位置について考察する。本研究は、中国語の類別詞重複語が主語位置にある所有者を意味する表現が目的語をC統御するのを阻止しないこと及び名詞表現における類別詞重複語の語順が比較的自由であることに基づき、中国語の類別詞重複語がNPの付加位置に生成されると主張する。第4章では、中国語の類別詞重複語の意味機能及びそれが表している定性について考察する。第5章では、本研究の結論をまとめる。

## 2. 束縛パラダイム

第2章では、Despić(2011, 2013)の提案を概観し、様々な代案を考慮しながらその妥当性について再検討を行う。Despić(2011, 2013)は、英語とセルビア・クロアチア語(Serbo-Croatian)の束縛に関する観察に基づき、当該言語におけるDPの有無をテストする方法を提示した。Despić(2011, 2013)は、(3)のような英語の例においては、代名詞と人名が同一指示を持つことはできるが、(4)のようなセルビア・クロアチア語の例においては、代名詞と人名が同一指示を持つことはできないと観察した。

- (3) a. His<sub>i</sub> father considers John<sub>i</sub> highly intelligent.  
 b. John<sub>i</sub>'s father considers him<sub>i</sub> highly intelligent.

(Despić 2013: 243)

- (4) a. \*Njegov<sub>i</sub> najnoviji film je zaista razočarao Kusturicu,  
 His latest film is really disappointed Kusturica  
 'His<sub>i</sub> latest film really disappointed Kusturica.'  
 b. \*Kusturicin<sub>i</sub> najnoviji film ga<sub>i</sub> je zaista razočarao.  
 Kusturica's latest film him is really disappointed  
 'Kusturica<sub>i</sub>'s latest film really disappointed him<sub>i</sub>.'

(Despić 2013: 245)

名詞表現の構造は、一般的に次のようものが假定されている。

- (5) 一般的な名詞句構造  
 [<sub>DP</sub> (Poss) [<sub>D'</sub> D NP]]

(5)のような所有者を意味する表現がDPの指定部にある構造を採用すれば、(3a)と(3b)の文法性を捉えることができる。(3a)と(3b)においては、DPの指定部にあるHisとJohnはそれぞれ目的語のJohnとhimを束縛しないため、束縛原理C、Bに違反することなく、

(3a)と(3b)は文法的となる<sup>4</sup>。しかし、この分析は(4a)と(4b)の非文法性を捉えることはできない。

(4a)と(4b)の非文法性を捉えるために、Despić(2011, 2013)は、Kayne(1994)が提案した理論で説明を試みた。Kayne(1994)が提案した理論では、指定部は付加位置であり、C 統御は(6)のように定義されている。

(6) Kayne(1994)のC 統御の定義

a. X c-commands Y iff X and Y are categories and X excludes Y and every category that dominates X dominates Y.

(Kayne 1994: 16)

b.  $\alpha$  excludes  $\beta$  if no segment of  $\alpha$  dominates  $\beta$ .

(Chomsky 1986: 9)

Kayne(1994)が提案した理論に従うと、(4a)と(4b)の構造は、(7a)と(7b)のようなものとなる。

(7) a.  ${}^*[_{TP} [_{DP} \text{Njegov}_i [_{DP} D [_{NP} \text{najnoviji film}]]] [_{TP} T [_{VP} \text{je zaista razočarao Kusturicu}_i]]]$ .

b.  ${}^*[_{TP} [_{DP} \text{Kusturicin}_i [_{DP} D [_{NP} \text{najnoviji film}]]] [_{TP} T [_{VP} \text{ga}_i \text{je zaista razočarao}]]]$ .

(7a)と(7b)に示すように、Njegov と Kusturicin は、主語DPの断片であり、DP 投射の内からそれぞれ目的語の Kusturicu と ga をC 統御しているため、束縛条件C、Bの違反となる。したがって、Kayne(1994)が提案した理論は、(4a)と(4b)の非文法性を捉えることができる。

しかし、Kayne(1994)が提案した理論は、英語の(3a)と(3b)の文法性を捉えることはできない。Kayne(1994)の理論では、(3a)と(3b)の構造は、(8a)と(8b)のようなものとなる。(8a)と(8b)では、His と John は主語DPの断片であり、DP 投射の内からそれぞれ目的語の John と him をC 統御する。これは束縛条件C、Bに違反しているため、(3a)と(3b)が非文法的であると間違えて予測してしまう。

(8) a.  $[_{TP} [_{DP} \text{His}_i [_{DP} D [_{NP} \text{father}]]] [_{TP} T [_{VP} \text{considers John}_i \text{highly intelligent}]]]$ .

b.  $[_{TP} [_{DP} \text{John}_i [_{DP} 's [_{NP} \text{father}]]] [_{TP} T [_{VP} \text{considers him}_i \text{highly intelligent}]]]$ .

(3)と(4)の対比を捉えるために、Despić(2011, 2013)は、Kayne(1994)で提案された名詞句構造を採用し、説明を試みた。Kayne(1994)は、Szabolcsi(1981, 1983, 1992)のハンガリー語の所有者を意味する表現についての分析を踏まえて、イタリア語の決定詞のDが所有者を意味する表現に先行すると仮定している。それを示すイタリア語の例は、(9)である。

- (9) il mio libro  
the my book

(Kayne 1994: 26)

Kayne(1994)は、英語はハンガリー語やイタリア語と同じく所有者を意味する表現が所有者句(PossP)の指定部に位置しており、所有者句は音形のないDを主辞とするDPによって支配されていると提案している。Kayne(1994)が提案した構造は、次のものである。

- (10) a. John's father  
b.  $[_{DP} \dots [_{DP} D [_{PossP} John [_{PossP} 's [_{NP} father]]]]]$ <sup>5</sup>

(Despić 2013: 244 一部改変)

Kayne(1994)の理論と(10)の名詞句構造を採用すれば、(3a)と(3b)の文法性を捉えることができる。(3a)と(3b)の構造は、(11a)と(11b)となる。

- (11) a.  $[_{TP} [_{DP} D [_{PossP} His_i [_{PossP} Poss [_{NP} father]]]]] [_{TP} T [_{vp} considers John_i highly intelligent]]]$ .  
b.  $[_{TP} [_{DP} D [_{PossP} John_i [_{PossP} 's [_{NP} father]]]]] [_{TP} T [_{vp} considers him_i highly intelligent]]]$ .

(11)では、所有者を意味する表現のHisとJohnがPossPの指定部に位置しており、音形のないDを主辞とするDPに支配されている。DPは目的語を支配しないため、所有者を意味する表現のHisとJohnは、それぞれ目的語のJohnとhimをC統御しない。したがって、束縛条件C、Bに違反せず、(3a)と(3b)の文法性を捉えることができる。つまり、この音形のないDPは、所有者を意味する表現が目的語をC統御するのを阻止する働きをしている。

Despić(2011, 2013)は、音形のないDを主辞とするDPがセルビア・クロアチア語において同じような役割を果たしているのであれば、(4)が容認されることを予測することができる。しかし、(4)は容認されない。つまり、この分析もこのままの形であれば、(3)と(4)の違いを捉えることはできない。

Despić(2011, 2013)は、普遍的DP仮説を採用すれば、(3)と(4)の英語とセルビア・クロアチア語の違いを説明するためにほかの仮説を立てなければならない<sup>6</sup>。また、Bošković(2008, 2012)が取り上げたNP言語とDP言語について的一般化を原理的に捉えにくいと指摘したうえで、Bošković(2008, 2012)の主張を踏襲し、英語とは違い、セルビア・クロアチア語はDPを欠いており、全ての名詞を修飾する要素(指示詞、所有者を意味する表現、形容詞など)がNPに付加する位置に生成されると仮定している<sup>7</sup>。

Despić(2011, 2013)の仮説は、(3)と(4)の英語とセルビア・クロアチア語の違いを説明することができる。Despić(2011, 2013)の仮説に従えば、(4a)と(4b)の構造は(12)となる。

- (12) a. [<sub>TP</sub> [<sub>NP</sub> Njegov<sub>i</sub> [<sub>NP</sub> najnoviji [<sub>NP</sub> film]]] [<sub>TP</sub> T [<sub>VP</sub> je zaista razočarao Kusturicu<sub>i</sub>]]].  
 b. [<sub>TP</sub> [<sub>NP</sub> Kusturicin<sub>i</sub> [<sub>NP</sub> najnoviji [<sub>NP</sub> film]]] [<sub>TP</sub> T [<sub>VP</sub> ga<sub>i</sub> je zaista razočarao]]].

(12)に示すように、セルビア・クロアチア語の所有者を意味する表現 Njegov と Kusturicin が NP の付加位置に現れている。Kayne (1994) の理論では、Njegov と Kusturicin はそれぞれ目的語の Kusturicu と ga を C 統御している。束縛条件 C、B に違反するため、(4a) と (4b) の非文法性を捉えることができる。つまり、Despić (2011, 2013) の仮説は、(3) と (4) の英語とセルビア・クロアチア語の違いを捉えることができる。

Despić (2013) は、(3) と (4) の英語とセルビア・クロアチア語の違いを説明するために、セルビア・クロアチア語において DP がいつも現れているのではなく、DP の指定部に要素が顕在的に現れている場合のみ DP が現れるというような弱い形の普遍的 DP 仮説を立てることができる指摘している。この弱い形の普遍的 DP 仮説を排除するために、Despić (2013) は、次のような例を取り上げた。

- (13) a. \*<sub>[NP</sub> Ovaj <sub>[NP</sub> Jovanov<sub>i</sub> <sub>[NP</sub> papagaj]]] ga<sub>i</sub> je juče ugrizao.  
 this John's parrot him is yesterday bitten  
 'This parrot of John<sub>i</sub>'s bit him<sub>i</sub> yesterday.'  
 b. \*<sub>[NP</sub> Ovaj <sub>[NP</sub> njegov<sub>i</sub> <sub>[NP</sub> papagaj]]] je juče ugrizao Jovana<sub>i</sub>.  
 this his parrot is yesterday bitten John  
 'This parrot of his<sub>i</sub> yesterday bit John<sub>i</sub>.'

(Despić 2013: 247)

Despić (2013) は、弱い形の普遍的 DP 仮説を採用すれば、指示詞の Ovaj が指定部に現れる DP が、所有者を意味する表現が目的語を C 統御するのを阻止することを予測することができる指摘している。しかし、(13)に示すように、セルビア・クロアチア語において指示詞は、所有者を意味する表現が目的語を C 統御するのを阻止することはできない。したがって、Despić (2013) は、弱い形の普遍的 DP 仮説を採用すべきではないと指摘し、セルビア・クロアチア語の指示詞は NP に付加する位置に生成されると主張している。

Despić (2013) は、セルビア・クロアチア語において形容詞も所有者を意味する表現に先行しても、所有者を意味する表現が目的語を C 統御するのを阻止しないと観察した。これに基づき、セルビア・クロアチア語の形容詞も NP の付加位置に生成されると主張している。

- (14) \*<sub>[NP</sub> Omiljeni <sub>[NP</sub> Jovanov<sub>i</sub> <sub>[NP</sub> papagaj]]] ga<sub>i</sub> je juče ugrizao.  
 favorite John's parrot him is yesterday bitten  
 'John<sub>i</sub>'s favorite parrot bit him, yesterday.'

(Despić 2013: 248)

Cheng(2013)は、Despić(2011, 2013)の議論を踏まえ、中国語においてセルビア・クロアチア語と同じ現象があると指摘し、中国語にはDPがないと主張している。(15a)と(15b)に示すように、所有者を意味する表現の“他”と“李安”は、それぞれ目的語の位置にある“李安”と“他”をC統御しており、束縛条件C、Bに違反している。中国語にはDPがなく、所有者を意味する表現がNPの付加位置に生成されると仮定すれば、(15a)と(15b)の非文法性を捉えることができる。

- (15)a. \*他<sub>i</sub> 的 电影 让 李安<sub>i</sub> 很 失望。  
 彼 の 映画 させる 李安 とても 失望する  
 \*彼<sub>i</sub>の映画は本当に李安<sub>i</sub>を失望させた。
- b. \*李安<sub>i</sub> 的 电影 吓到 了 他<sub>i</sub>。  
 李安 の 映画 びっくりさせる 完了を表す Asp 彼  
 \*李安<sub>i</sub>の映画は彼<sub>i</sub>をびっくりさせた。

(Cheng 2013: 46)

Cheng(2013)は、普遍的DP仮説と(5)の構造を採用し、英語の所有者を意味する表現がDP指定部に現れており、セルビア・クロアチア語や中国語の所有者を意味する表現がDPに付加していると仮定すれば、(3)と(4)の違いを説明することもできると指摘している。この代案について、Cheng(2013)は、それは場当たりの仮説であり、Dが音形を持って現れているかどうかという一点だけで所有者を意味する表現の統辞位置に影響を与える理由は明らかではないため、望ましくないと主張している。

Cheng(2013)、Despić(2011, 2013)が排除した二つの代案のほか、もう一つの代案が考えられる。本研究は、Despić(2011, 2013)が提案しているこのある言語にはDPがあるかどうかをテストする方法を利用するために、もう一つの代案を排除しなければならないと考える。第2章の残りの部分は、もう一つの代案の妥当性を検討していく。

本研究は、普遍的DP仮説とKayne(1994)の理論と名詞句構造を採用し、英語の所有者を意味する表現がPossPの指定部にとどまり、セルビア・クロアチア語や中国語の所有者を意味する表現がDP指定部に移動するという仮説を立てることもできると考える。しかし、本研究は、この仮説も望ましくないと考える。まず、セルビア・クロアチア語や中国語の所有者を意味する表現がDP指定部に移動する理由は明らかではない。また、Cheng(2013)は、中国語の「数詞+類別詞」が投射することを示すために、(16)の例を取り上げている。

- (16)a. 有 三 部 他<sub>i</sub> 的 电影 让 李安<sub>i</sub> 很 失望。  
 ある 三 CL 彼 の 映画 させる 李安 とても 失望する

ある三本の彼<sub>i</sub>の映画は李安<sub>i</sub>を失望させた。

- b. 有 三 张 李安<sub>i</sub> 的 照片 吓到 了 他<sub>io</sub>。  
 ある 三 CL 李安 の 写真 びっくりさせる 完了を表す Asp 彼  
 ある三枚の李安<sub>i</sub>の写真是他<sub>i</sub>をびっくりさせた。

(Cheng 2013: 48 一部改変)

(16)に示すように、主語位置に現れる所有者を意味する表現の“他”と“李安”は、目的語位置にある“李安”と“他”と同一指示を持つことができる。つまり、中国語において「数詞+類別詞」は、主語位置に現れる所有者を意味する表現が目的語をC統御するのを阻止する。これを踏まえて、Cheng(2013)は、中国語の「数詞+類別詞」がCLPを投射すると主張している。本研究が指摘した仮説を採用すれば、中国語においてCLがDPを補部として取ることになる。しかし、一般的にはCLPがDPの内部にあると仮定されているため、この代案は自然なものではなく、採用すべきではないと考えられる。また、Cheng(2013)が指摘した代案も同じ理由で排除することができる。

ここまで様々な代案を考察した結果、本研究は、Despić(2011, 2013)の提案が最も説得力があると考えており、ある言語にはDPがあるかどうかをテストする方法として採用することにする。

### 3. 中国語の類別詞重複語の統辞位置

第2章では、Despić(2011, 2013)の提案を概観し、様々な代案を考慮しながら、それがある言語にはDPがあるかどうかをテストする方法として妥当であること見てきた。第3章では、Despić(2011, 2013)の提案をもとに中国語の類別詞重複語の統辞位置について考察していく。本研究は、中国語の類別詞重複語が主語位置にある所有者を意味する表現が目的語をC統御することを阻止しないことに基づき、中国語の類別詞重複語がNPに付加する位置に生成されると主張する。

- (17)a. \* 部部 余華<sub>i</sub> 的 小说 都 刺激 了 他<sub>io</sub>。  
 CL-CL 余華 の 小説 すべて 刺激する 完了を表す Asp 彼  
 \*すべての余華<sub>i</sub>の小説は他<sub>i</sub>を刺激した。
- b. \* 部部 他<sub>i</sub> 的 小说 都 刺激 了 余華<sub>io</sub>。  
 CL-CL 他 の 小説 すべて 刺激する 完了を表す Asp 余華  
 \*すべての他<sub>i</sub>の小説は余華<sub>i</sub>を刺激した。
- c. 部部 余華<sub>i</sub> 的 小说 都 刺激 了 他自己<sub>io</sub>。  
 CL-CL 余華 の 小説 すべて 刺激する 完了を表す Asp 彼自身  
 すべての余華<sub>i</sub>の小説は彼自身<sub>i</sub>を刺激した。



(17a)と(17b)では、主語位置にある“余华”と“他”は、それぞれ目的語の“他”と“余华”と同一指示を持つことはできない。容認されない(17a)と(17b)は、主語位置にある“余华”と“他”が、それぞれ目的語の“他”と“余华”をC統御し、束縛条件C、Bに違反していることを示している。類別詞重複語の“部部”がNPの付加位置に生成されると仮定すれば、Despić(2011, 2013)の提案に従い、(17a)と(17b)の非文法性を説明することができる。なぜなら、類別詞重複語がNPの付加位置に生成されると、主語位置にある“余华”と“他”が目的語の“他”と“余华”をC統御するのを阻止しないからである。

一方、(17c)では、照応形の“他自己”が目的語の位置に現れている。照応形は最小のS内で先行詞に束縛されなければならないと一般的に仮定されている。(17c)に示すように、“他自己”は“余华”によって束縛されているため、類別詞重複語の“部部”は、その束縛関係を妨げないことがわかる。類別詞重複語の“部部”がNPの付加位置に生成されると仮定すれば、(17c)の文法性も捉えることができるため、本研究は、先行研究と異なり、中国語の類別詞重複語は、DPの主辞位置に生成されるのではなく、NPに付加する位置に生成されると考える。

Zheng and Kim(2022)は、統辞的な振る舞いの違いに基づき、中国語の類別詞重複語を二種類に分けている。Zheng and Kim(2022)は、“个个”、“只只”などのような類別詞重複語は決定詞であり、“朵朵”、“条条”などのような類別詞重複語は形容詞であると主張している。本研究は、“个个”、“只只”などのような類別詞だけではなく、“朵朵”、“条条”などのような類別詞重複語もNPに付加する位置に生成されると考える。

- (18)a. \*条条 王丽<sub>i</sub> 的 围巾 都 衬 她<sub>j</sub>。  
 CL-CL 王麗 の マフラー すべて 似合う 彼女  
 \*すべての王麗<sub>i</sub>のマフラーは彼女<sub>j</sub>に似合っている。
- b. \*条条 她<sub>i</sub> 的 围巾 都 衬 王丽<sub>j</sub>。  
 CL-CL 彼女 の マフラー すべて 似合う 王麗  
 \*すべての彼女<sub>i</sub>のマフラーは王麗<sub>j</sub>に似合っている。
- c. 条条 王丽<sub>i</sub> 的 围巾 都 衬 她自己<sub>j</sub>。  
 CL-CL 王麗 の マフラー すべて 似合う 彼女自身  
 すべての王麗<sub>i</sub>のマフラーは彼女自身<sub>j</sub>に似合っている。

(18a)と(18b)に示すように、主語位置にある“王丽”と“她”は、それぞれ目的語の“她”と“王丽”と同一指示を持つことはできない。これは、主語位置にある“王丽”と“她”が、それぞれ目的語の“她”と“王丽”をC統御し、束縛条件C、Bに違反していることを示している。類別詞重複語の“条条”がNPの付加位置に生成されると仮定すれば、Despić(2011, 2013)の提案に従い、(18a)と(18b)の非文法性を捉えることができる。なぜなら、類別詞重複語がNPの付加位置に生成されると、主語位置にある“王丽”と“她”が目的語の“她”と

“王丽”をC統御するのを阻止しないからである。

それに対し、照応形の“她自己”が含まれている(18c)は容認される。(18c)に示すように、“她自己”は“王丽”によって束縛されているため、類別詞重複語の“条条”は、その束縛関係を妨げないことがわかる。類別詞重複語の“条条”がNPの付加位置に生成されると仮定すれば、(18c)の文法性も捉えることができるため、本研究は、Zheng and Kim(2022)が分類した“个个”、“只只”などのような類別詞重複語だけではなく、“朵朵”、“条条”などのような類別詞重複語もNPに付加する位置に生成されると考える。

Zheng and Kim(2022)は、“个个”、“只只”などのような類別詞重複語は決定詞であると主張しているが、本研究は、中国語の類別詞重複語が主語位置にある所有者を意味する表現が目的語をC統御することを阻止しないことに基づき、中国語の類別詞重複語がNPの付加位置に生成され、決定詞ではないと主張する<sup>8</sup>。

本研究は、名詞表現における中国語の類別詞重複語の語順が比較的自由であることも中国語類別詞重複語がNPの付加位置に生成されるのを示す根拠となると考える。

Bošković(2009, 2012)は、DP言語よりNP言語の名詞表現の内部要素の語順のほうが比較的自由であるということを観察した。(19)に示すように、中国語の名詞表現において、形容詞、指示詞、所有者を意味する表現の語順は比較的自由である。一方、英語はそうではない。

- (19)a. 小李 的 黑色 的 帽子  
 李さん の 黒い の 帽子  
 李さんの黒い帽子
- b. 黑色 的 小李 的 帽子  
 黒い の 李さん の 帽子  
 黒い李さんの帽子
- c. 小李 的 那 顶 帽子  
 李さん の そ／あ CL 帽子  
 李さんのそ／あの帽子
- d. 那 顶 小李 的 帽子  
 そ／あ CL 李さん の 帽子  
 そ／あの李さんの帽子
- e. 那 顶 黑色 的 帽子  
 そ／あ CL 黒い の 帽子  
 そ／あの黒い帽子
- f. 黑色 的 那 顶 帽子  
 黒い の そ／あ CL 帽子  
 黒いそ／あの帽子

- (20) a. Bill's black hat  
 b. \*black Bill's hat  
 c. \*Bill's that hat  
 d. \*that Bill's hat  
 e. that black hat  
 f. \*black that hat

Bošković(2009, 2012)は、DP 言語の豊かな構造構成が NP 言語にはない構造的な制約を名詞表現に課すからであると指摘しており、英語には DP があり、中国語には DP がないと仮定すれば、(19)と(20)の対比を説明できると主張している。

(20a, b)と(20e, f)に示すように、英語において所有者を意味する表現、指示詞は必ず形容詞に先行する。所有者を意味する表現、指示詞は、一般的に DP に位置すると仮定されている。Bošković(2009, 2012)は、英語の所有者を意味する表現、指示詞が DP に位置するため、それらが形容詞の統辞位置(おそらく NP に付加する位置)より高い統辞位置にあることを説明できると主張している。したがって、(20b, f)の非文法性を説明することができる。

それに対し、Bošković(2009, 2012)は、中国語は DP を欠けており、所有者を意味する表現、指示詞、形容詞などが NP の付加位置に生成されると仮定すれば、これらの要素の語順が比較的自由であることを説明できると主張している。また、Bošković(2009, 2012)、Bošković and Hsieh(2013)は、中国語のような NP 言語の名詞表現の内部要素の語順は、構造的な制限を受けておらず、意味解釈に関する制限のみを受けていると主張している。

本研究は、中国語の類別詞重複語も、所有者を意味する表現、指示詞、形容詞と同じように名詞表現における語順が比較的自由であることを観察した。

- (21) a. 只只 肥美 的 鸡  
 CL-CL 肥えている の 鶏  
 すべての肥えている鶏  
 b. 肥美 的 只只 鸡  
 肥えている の CL-CL 鶏  
 肥えているすべての鶏  
 c. 只只 李老师 的 鸡  
 CL-CL 李先生 の 鶏  
 すべての李先生の鶏  
 d. 李老师 的 只只 鸡  
 李先生 の CL-CL 鶏  
 李先生のすべての鶏  
 e. 我 养 的 只只 鸡

- 私 飼う の CL-CL 鶏  
私が飼っているすべての鶏
- f. 只只 我 养的 鸡  
CL-CL 私 飼う の 鶏  
すべての私が飼っている鶏
- (22)a. 朵朵 鲜艳的 花  
CL-CL 鮮やかな の 花  
すべての鮮やかな花
- b. 鲜艳的 朵朵 花  
鮮やかな の CL-CL 花  
鮮やかなすべての花
- c. 朵朵 王丽的 花  
CL-CL 王麗 の 花  
すべての王麗の花
- d. 王丽的 朵朵 花  
王麗 の CL-CL 花  
王麗のすべての花
- e. 我 种的 朵朵 花  
私 植える の CL-CL 花  
私が植えたすべての花
- f. 朵朵 我 种的 花  
CL-CL 私 植える の 花  
すべての私が植えた花

(21)に示すように、名詞表現内部の類別詞重複語の語順は比較的自由であり、形容詞の前後、所有者を意味する表現の前後、関係節の前後に現れることができる。本研究は、中国語の“只只”などのような類別詞重複語が所有者を意味する表現、指示詞、形容詞と同じようにNPの付加位置に生成されると仮定すれば、この統辞的な振る舞いを捉えることができると考える。また、(22)に示すように、“只只”などのような類別詞重複語だけではなく、“朵朵”などのような類別詞重複語の語順も比較的自由であり、形容詞の前後、所有者を意味する表現の前後、関係節の前後に現れることができる。したがって、本研究は、中国語の“只只”などのような類別詞重複語も“朵朵”などのような類別詞重複語もNPの付加位置に生成されると考える。

ここまで、中国語の類別詞重複語が主語位置にある所有者を意味する表現が目的語をC統御することを阻止しない及び名詞表現における類別詞重複語の語順が比較的自由である

という中国語の類別詞重複語の二つの統辞的特徴を見てきた。中国語の類別詞重複語が NP の付加位置に生成されると仮定すれば、この二つの特徴を統一的に捉えることができるため、本研究は、中国語の類別詞重複語が NP の付加位置に生成されると主張する。

#### 4. 類別詞重複語の意味機能

Bošković and Hsieh (2013)は、中国語の“们”は普通名詞に付くと、名詞表現に複数の解釈を与えることができる一方、定の解釈も与えることができると指摘している。(23)では、“只只鸡”は、鶏が複数いることを表しているだけではなく、談話コンテキストにおける特定の鶏のグループも指している。したがって、類別詞重複語の意味機能は、“们”の意味機能に類似していることが窺える。

- (23) 只只 鸡 都 很 肥。  
 CL-CL 鶏 すべて とても 肥えている  
 いずれの鶏もとても肥えている。

Bošković and Hsieh (2013)は、“们”の統辞位置に関しては、Borer (2005)の提案を踏襲し、“们”が CLP の主辞位置に基底生成され、NP を補部として取ると主張しており、“们”の意味機能に関しては、タイプ  $\langle e, t \rangle$  の性質を談話コンテキストに示された特定の複数の個体に写像することであると主張している。具体的に言うと、“们”は、まず補部 NP から導かれる性質を複数化し、次に最大の複数の個体を選び出してから、その性質を複数の個体に写像する機能を有している。この過程において二つのタイプシフト操作 PL と U は、Chierchia (1998)で提案されているものと同じ方法で適用される。

Cheng and Sybesma (1999)は、中国語の類別詞は直示的な機能を果たしており、中国語の定性は CLP に由来していると主張している。Bošković and Hsieh (2013)は、“们”は CLP の主辞位置に基底生成されるため、“们”が表している定性も類別詞の投射に由来していると主張している。

本研究は、Bošković and Hsieh (2013)の分析は中国語類別詞重複語の分析に適用できると考える。そこで本研究は、Bošković and Hsieh (2013)の分析に倣い、“个个”のような中国語類別詞重複語の意味機能は、タイプ  $\langle e, t \rangle$  の性質を談話コンテキストに示された特定の複数の個体に写像することであると主張する。具体的に言うと、“个个”はまず修飾される NP から導かれる性質を複数化し、次に最大の複数の個体を選び出してから、その性質を複数の個体に写像する。この過程において PL と U という二つのタイプシフト操作が適用される。

本研究の提案は、(2)の中国語の類別詞重複語が指示詞と共に起しない例を説明することができる。

- (24) a. \* 这 / 那 个个 学生  
           こ / そ・あ CL-CL 学生  
           これら / それら・あれらの学生
- b. \* 个个 这 / 那 学生  
       CL-CL こ / そ・あ 学生  
       これら / それら・あれらの学生

(Zheng and Kim 2022: 194 (2) の再掲)

Kaplan (1977/1989) は、指示詞は直接指示 (direct reference) の標識であると主張している。Bošković and Hsieh (2013) は、指示詞がタイプ  $\langle e, t \rangle$  の性質を特定の個体タイプ  $e$  に写像すると指摘している。一方、本研究が主張するように“个个”のような中国語類別詞重複語の意味機能は、タイプ  $\langle e, t \rangle$  の性質を談話コンテキストに示された特定の複数の個体に写像することである。指示詞と類別詞重複語とが共起すると、タイプ  $\langle e, t \rangle$  の性質を特定の個体に写像するのか、それとも特定の複数の個体に写像するのかがわからなくなるため、意味解釈の不具合が生じる。したがって、(2) のような例が非文法的になっている。

“个个”のような中国語類別詞重複語が表している定性に関しては、Cheng and Sybesma (1999) と Bošković and Hsieh (2013) の主張を踏まえて、類別詞の直示的な機能に由来していると考えられる。中国語の指示詞“这个”、“那个”と数量詞の“每个”も定性を表している。これらの表現の共通点は、類別詞が付いていることであり、これはこれらの表現が表している定性が主に類別詞 CL に由来していることを示す一つの根拠になると考えられる。

第3章で議論したように、本研究は、類別詞重複語が NP に付加する位置に生成されると主張する。この点において“们”と異なっている。Bošković and Hsieh (2013) は、指示詞に含まれる類別詞は投射せず、単に“这”、“那”に付加していると主張している。本研究は、それを拡張し、数量詞の“每个”に用いられる類別詞、類別詞重複語の二番目の類別詞は投射せず、単に前の“每”と一番目の類別詞に付加していると主張し、また、これらの表現の間にほかの要素を入れることはできないため、この過程はレキシコンにおいて行われると考える。

## 5. おわりに

本研究は、中国語の類別詞重複語の統辞位置及び意味機能について詳しく考察した。中国語の類別詞重複語の統辞位置に関しては、本研究は、中国語の類別詞重複語が主語位置にある所有者を意味する表現が目的語を C 統御することを阻止しないこと及び名詞表現における類別詞重複語の語順が比較的自由であることに基づき、中国語の類別詞重複語は NP の付加位置に生成されると主張した。また、中国語の類別詞重複語の意味機能及びそれが表している定性に関しては、本研究は、Cheng and Sybesma (1999) と Bošković and Hsieh (2013) の主張を踏まえて、類別詞重複語は、NP から導かれる性質を複数化し、その性質を

複数の個体に写像するという意味機能を果たしていると主張した。また、類別詞重複語が表している定性に関しては、それが類別詞の直示的な機能に由来していると主張した。

先行研究において、類別詞重複語は、中国語に機能範疇Dの存在を示す根拠として取り上げられているが、本研究の研究結果から見れば、類別詞重複語は中国語に機能範疇Dの存在を示す根拠にはならず、中国語が機能範疇Dを欠いていることを示す根拠の一つとなっていると考えられる<sup>9</sup>。

## 注

- 1 CL-CL は、類別詞重複語を表しており、Asp は、アスペクト標識を表している。
- 2 本研究の日本語訳はすべて筆者による翻訳であり、日本語母語話者によって確認されている。
- 3 本研究では、「\*」は、非文法的であることを表す。
- 4 束縛原理Bは、代名詞は統率範疇内で自由でなければならないことを指しており、束縛原理Cは、R表現(referential expression)は自由でなければならないことを指している。
- 5 Kayne(1994)は、構造を詳しく示さなかったため、ここでは Despić(2013)で示された構造を引用することにした。
- 6 Abney(1987)、Brame(1982)は、名詞表現の最大投射は機能範疇Dを主辞とするDPであり、NPは主辞Dの補部であるというDP仮説を提案した。普遍的DP仮説は、いかなる言語でもDPを投射するという仮説である(Pereltsvaig(2007)、Progovac(1998)など)。
- 7 Bošković(2008, 2012)は、冠詞がある言語と冠詞のない言語の統辞的、意味的特徴の違いに基づき、言語をDP言語とNP言語に分けている。詳細は、Bošković(2008, 2012)を参照されたい。
- 8 本研究は、「个个」、「只只」などのような類別詞重複語の品詞についての再検討を割愛する。
- 9 本稿は、2023年度東アジア国際言語学会第11回大会における発表をもとに、大幅な加筆、修正を施したものである。参加者の方々及び査読者の方々には有益なコメントをいただいたため、この場を借りて感謝を申し上げたい。

## 参考文献

- Abney, Steven. 1987. *The English noun phrase in its sentential aspect*. Doctoral dissertation, MIT.
- An, Fengcun and Lei Zhao. 2017. "A study on the reduplication of Chinese classifiers." In Rong Tong, Yue Zhang, Yanfeng Lu, and Minghui Dong (eds.), *Proceedings of the International Conference on Asian Language Processing (IALP)*, 150–154. Singapore: National University of Singapore.
- Borer, Hagit. 2005. *Structuring sense*. Oxford: Oxford University Press.
- Bošković, Željko. 2008. "What will you have DP or NP?" In Emily Elfner and Martin Walkow (eds.), *Proceedings of the North East Linguistic Society* 37, 101–114. Amherst: UMASS.
- Bošković, Željko. 2009. "More on the no-DP analysis of article-less languages." *Studia Linguistica* 63, 187–203.
- Bošković, Željko. 2012. "On NPs and clauses." In Gunther Grewendorf and Thomas Ede Zimmermann (eds.), *Discourse and grammar: From sentence types to lexical categories*, 179–242. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Bošković, Željko and I-Ta Chris Hsieh. 2013. "On word order, binding relations, and plurality in Chinese noun phrases." *Studies in Polish Linguistics* 8, 173–204.

- Brame, Michael. 1982. The head-selector theory of lexical specifications and the nonexistence of coarse categories. *Linguistic Analysis* 10, 321–325.
- Cheng, Lisa. 2009. “On every type of quantificational expression in Chinese.” In Giannakidou Anastasia and Rathert Monika (eds.), *Quantification, Definiteness, and Nominalization*, 53–75. Oxford: Oxford University Press.
- Cheng, Lisa and Rint Sybesma. 1999. “Bare and not-so-bare nouns and the structure of NP.” *Linguistic Inquiry* 30(4), 509–542.
- Cheng, Hsu-Te. 2013. Argument ellipsis, classifier phrases, and the DP parameter. Doctoral dissertation, University of Connecticut.
- Chierchia, Gennaro. 1998. “Reference to kind across languages.” *Natural Language Semantics* 6 (4), 339–405.
- Chomsky, Noam. 1986. *Barriers*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Despić, Miloje. 2011. Syntax in the absence of determiner phrase. Doctoral dissertation, University of Connecticut.
- Despić, Miloje. 2013. “Binding and the structure of NP in Serbo-Croatian.” *Linguistic Inquiry* 44, 239–270.
- Huang, C.-T. James, Yen-hui Audrey Li, and Yafei Li. 2009. *The syntax of Chinese*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Kaplan, David. 1977/1989. “Demonstratives.” In Joseph Almog, John Perry and Howard Wettstein (eds.), *Themes from Kaplan*, 481–563. Oxford: Oxford University Press.
- Kayne, Richard. 1994. *The antisymmetry of syntax*. Cambridge: MIT Press.
- Li, Charles N. and Sandra A. Thompson. 1981. *Mandarin Chinese: A functional reference grammar*. Berkeley and Los Angeles, CA: University of California Press.
- Li, Yen-Hui Audrey. 1999. “Plurality in a classifier language.” *Journal of East Asian Linguistics* 8, 75–99.
- Pereltsvaig, Asya. 2007. The universality of DP: A view from Russian. *Studia Linguistica* 61, 59–94.
- Progovac, Ljiljana. 1998. Determiner phrase in a language without determiners (with apologies to Jim Huang 1982). *Journal of Linguistics* 34, 165–179.
- Szabolcsi, Anna. 1981. “The possessive construction in Hungarian: a configurational category in a nonconfigurational language. *Acta Linguistica Academiae Scientiarum Hungaricae* 31, 261–289.
- Szabolcsi, Anna. 1983. “The possessor that ran away from home.” *The Linguistic Review* 3, 89–102.
- Szabolcsi, Anna. 1992. “Subordination: articles and complementizers.” In István Kenesei and Csaba Pléh (eds.), *The structure of Hungarian*, 123–137. Approaches to Hungarian 4. Szeged: JATE.
- Wu, Yicheng and Adams Bodomo. 2009. “Classifiers ≠ determiners.” *Linguistic Inquiry* 40 (3), 487–503.
- Yang, Henrietta Shu-Fen. 2005. Plurality and modification in Mandarin nominal phrases. Doctoral dissertation, University of Texas at Austin.
- Zheng, Yanyang and Kyumin Kim. 2022. “Two types of classifier reduplications in Mandarin.” *Linguistic Research* 39(1), 185–211.
- 隋娜·胡建华(2017)〈量词重叠的句法〉《中国语文》(2017年第1期)商务印书馆:22–41。



## 現代における「神仏習合」言説

— 2000年以降の新聞記事を中心に —

広池 真一  
北洋大学

Contemporary “*Shinbutsu-shūgō*” discourse  
— Focusing on newspaper articles since 2000 —

HIROIKE Shinichi  
Hokuyo University

### Abstract

This article examines how the term “*Shinbutsu-shūgō*”, which means “fusion of Shinto and Buddhism,” is treated in major Japanese media in the 21st century. The fusion of Shinto and Buddhism, which was a common phenomenon in Japan until the early modern period, was banned by the Japanese government in the early Meiji period (in some cases, the ban was not thorough) and was often met with poor reviews. However, the “*Shinbutsu-shūgō*” has recently been reevaluated by the religious, intellectual, and tourist industries, etc. A review of newspaper articles on the “*Shinbutsu-shūgō*” since 2000 reveals that they include such comments as “It is wrong to associate Japanese involvement in both Shintoism and Buddhism with irreligion or inconstancy.” The articles also included phrases such as “*Shinbutsu-shūgō* is a source of religious tolerance among the Japanese and is contrasted with exclusive monotheism,” and “*Shinbutsu-shūgō* is a uniquely Japanese religious phenomenon that we should be proud of. These discourses are tied to Japanese nationalism.

## 1. はじめに

「神仏習合」をめぐる問題に関しては膨大な先行研究があるものの、近世までの思想史、明治期における神仏分離・廃仏毀釈、および伝統的習俗についての研究が多くを占めており、現代における「神仏習合」についての研究は少ない。

本稿は、現代における「神仏習合」についての語りの分析を通して、今日の日本人の宗教観に関して若干の考察を加えることを目的とする。

## 2. 「神仏習合」という語：語義・用法、その曖昧さについて

### 2.1. 辞書類<sup>1</sup>に見られる定義

『旺文社日本史事典（三訂版）』（以下、『日本史事典』）の「<sup>しんぶつしゅうごう</sup>神仏習合」の項は以下の通りである。

神と仏は同じものであるとして、神道と仏教を調和させようとする説。

神仏混淆（こんごう）ともいう。仏教は元来インドでおこったものであるが、日本に伝えられると神道と融合した。奈良時代に神社に神宮寺がつくられ、平安時代になると個々の神をそれぞれ仏と結びつける本地垂迹説が現れ、神社に仏像を置いたり、寺に鳥居をたてたりした。神仏習合は約 1000 年間行われてきたが、明治初期の神仏分離令によって否定された。（傍線部引用者、以下同じ）

『日本史事典』では、「神道と仏教を調和させようとする説」とされている「神仏習合」の定義に関して言えば、「仏教思想と神祇思想の融合のなかで提唱された宗教思想（『山川日本史小辞典 改訂新版』）、「日本の伝統的な神祇信仰と大陸伝来の仏教が接触混淆した結果、生み出された宗教現象（『改訂新版世界大百科事典』執筆者：村山修一）」等、他の辞書類を見ても大同小異である。

又、『日本史事典』では、「神仏習合」の具体的な事例として「神宮寺」が挙げられる。これは他の辞書類（『改訂新版世界大百科事典』『山川 日本史小辞典 改訂新版』等）でも同様である。神宮寺は神社に付設された仏寺であり、多くの場合、この神宮寺の管理者である仏教僧侶が、別当・社僧として神社や神職たちを管理していた（即ち、この体制では僧侶の方が神職よりも立場が上位だった）。

「神仏習合」の思想的根拠として「本地垂迹説」を挙げるのも多くの辞書（『改訂新版世界大百科事典』『山川 日本史小辞典 改訂新版』等）で共通している。衆生済度のため、仏教の仏菩薩が日本の神として、仮の姿を現す（化身・垂迹）という考えを「本地垂迹説」という。例えば、八幡神は阿弥陀如来（本地）の化身（垂迹）であるとか、天照大神は大日如来の化身とされた。

化身であるところの神祇に「菩薩」（例：八幡大菩薩）や「権現（仏菩薩が仮に現れたの意）」（例：白山権現、熊野権現）等の称号が与えられ、また、そのような神を祀る神社で神

体としてその本地仏の仏像が置かれ、僧侶による神前読経が行われた。

『日本史事典』に「明治初期の神仏分離令によって否定された」とあるように、「神仏習合」はある時代（ここでは奈良時代としているが研究者によって前後する）から近世までの説とされる。終期を明治初期とするのは（例外はあるが）おおむね他の辞書類も同様である。

何となれば、1868（慶応4＝明治元）年以降、新政府より「神仏判然令（あるいは「神仏分離令」）」と総称される複数の指令が渙発され、神宮寺・僧侶による神社管理・神社の中の仏教的要素（本地仏、鰐口、梵鐘等）・仏寺の中の神祇信仰的要素（三十番神等）が禁止され、神祇信仰と仏教を分離する政策が遂行されたからである。この神仏分離政策は、江戸時代に仏教に批判的で純粋な神祇信仰の実現を目指す国学の思想が発達し、その国学（特に平田派・津和野派）を奉ずる勢力が新政府の一翼を担ったことが背景にある。

神仏分離政策に伴い、各地で国学を信奉する神道家や民衆により、「はいぶつ きしやく 廃仏毀釈」と呼ばれる仏堂・仏具・経巻の破壊等を行う仏教排斥運動が起きた。この「廃仏毀釈」は、文化財に大打撃を与えたとしてその後一貫して批判されている。新政府はこの廃仏毀釈を禁止したものの、地方の行政当局がこれを主導することもあり、その場合は苛烈を極めた。神仏分離政策の影響に地方差があることの原因の一つである。

## 2.2. 「神仏習合」と「神仏混淆」

注意しなければならないのは、「神仏判然令」と総称される諸法令の中では、廃止されるべき既往の「仏教と神祇思想の融合・調和」を「神仏混淆」と呼んでおり（「太政官達 慶応四年閏四月四日」等）、「神仏習合」とは呼んでいないということだ<sup>2</sup>。

ここで、「神仏習合」と「神仏混淆」の二つの語について確認しておきたい。

先に見た辞書類では、しばしば「神仏習合」と「神仏混淆」は同義であると書かれているが、少なくとも以前は異なる語感を持っていた。

林淳によれば、「神仏混淆」は法令や建白書に使用された行政用語であり、穢れた不純なものというイメージを伴う語であった。近世以前の寺社の融合状態を表現するだけでなく、仏教界で影響力のあった真宗の島地黙雷が明治政府の国民教化機関である大教院が神職も僧侶も参加していることを批判する際も「神仏混淆」を使用している（林2018: 4-14）。ゆえに、「神仏混淆」の語はネガティブな響きがあった。法令に出ている違法状態を表す語で、仏教界からも批判されており、当時の知識人は「神仏混淆がいい」とは言いにくかったはずだ<sup>3</sup>。

それに対して「神仏習合」はポジティブな意味あいでも使える言葉であった。

林によれば、アカデミズムの領域では、辻善之助<sup>4</sup>の1907年の「本地垂迹の起源について」の論文以前には「神仏混淆」「神仏習合」「神仏調和」などが使われていた。辻の論文によって「神仏習合」に収斂、「神仏習合」は学術用語として定着した（*Ibid.*: 18-21）。

辻は『明治維新 神仏分離史料』所収の論文の中で、「この神仏習合といふことは、我国

史の上に於て殊に思想史の上に於て、国民的特色の現はれたるものとして、我国文化の世界における地位を考へる上にも最も重要な事項(辻 1926: 2)」と肯定的評価をしている。

現在では、(例外はあるものの)多くの用例において「神仏混淆」の語にネガティブな含意はなく、「神仏習合」と「神仏混淆」の二つの語にさほどの違いはない<sup>5</sup>。ただし、「神仏習合」の語の方がよく使われる。

## 2.3. 断絶と連続をめぐる解釈の多様性

### 2.3.1. 政策と実態

先述の通り、多くの辞書類の記述で「神仏習合」は明治初期に終焉を迎えたことになっている。

ただし、『新纂浄土宗大辞典』の「神仏習合」の項では、「慶応四年(一八六八)の神仏判然令により神仏習合は形のうえでは禁止されたが、庶民の生活・信仰のなかには、その風が今なお根強く定着している(今堀 2018)」とされ、「神仏習合」は「形のうえでは禁止」されたものの、今なお存在するものとしている。

確かに社僧という身分がなくなり<sup>6</sup>、寺院が神社を支配するという体制がなくなったのは明白な変化である(鈴木 2018: 135)。近世までの寺院・神社の複合的なあり方は改変され、石清水八幡宮などは付設の寺院が廃絶され、浅草寺・浅草神社などは寺院と神社に分けられた。

一方で、豊川稲荷のように、行政による再三の要求にも関わらず、仏教の尊格であると主張して神祇信仰とみなされた稲荷信仰を仏寺で持続した例もある(大寧護国禅寺 n.d.)。また、神社の中に仏像や梵鐘が残るなど、判然が不徹底に終わった例も少なくない(畑中 2021: 183-206)。

明治初期に国学者が政府内で影響力を失い、神仏分離政策の強制力も弱まっていく。1880(明治 13)年頃は政府の神仏分離に対する考えも落ち着いた(辻 1926: 12-17)。

仏教と神祇信仰双方の要素が強いとみなされた修験道は、1872年に一旦禁止されたにも関わらず、その後、(勢力を弱めたものの)仏教の教団の一部になったり、教派神道に属するなどして存続した(鈴木 2015: 85-268)。1887(明治 20)年の内務省訓令では、神社や仏堂で権現号を私称すること「権現号の私称」が許され、旧修験の活動も活発化した(宮城 2012: 76)。

真言宗の僧侶は毎朝の勤行で日本の神名を唱え続け(廣澤 2014: 106)、日蓮・法華系の教団で使用される曼荼羅には一貫して天照大御神、八幡神などの日本の神名が書かれた(安中 2014: 96)。民俗学者の桜井徳太郎は「神仏習合の波」が、民間信仰の領域では「明治初年における廃仏毀釈の神仏分離期をくぐり抜け」て続けられたと考えている(桜井 1987: 7)。

しかし、建前としての神仏分離政策は持続した。

修験道の伝統を持つ立山雄山神社の神職である佐伯幸長は、1941(昭和 16)年まで神職

である父親が名古屋方面で経帷子を配り曼荼羅の絵解きをしていたこと、そのために富山県庁から召喚されて訓告されたこと、それでも神社経営のためにはお札の配布を続けざるを得なかったことを述懐している（佐伯 2018: 190-195）。

福井県小浜市の若狭神宮寺は明治以後も本堂に神号掛軸、影向座を備え、神祇信仰を続けたが、太平洋戦争後しばらくするまで、それを隠し続けた（達 2007: 52-57）。

神仏判然令によって白山上から下ろされた仏像（白山下山仏）は、石川県白山市内で密かに祀られたが、その地区の区長で、真宗大谷派僧侶の林与枝男によると、仏像を安置したお堂への道中に鳥居を建て、「神様をまつている」として県の役人を欺いたと伝わっている（久保 2024）。

### 2.3.2. 断絶と連続のジレンマ

また、近代日本の宗教政策は、単なる断絶・分断という以上の宗教の再編成を促した。

末木文美士は、当初廃仏毀釈と神道中心政策によって危機的な状況にあった仏教が、イエ制度をしたたかに利用し、神道が一般庶民の葬祭に関われなくなると、仏教が葬送の役割を担うことになり、結果的に神道と仏教の役割分担がなされるようになったと述べ（末木 2024: 271）、この役割分担を「神仏補完」と呼んでいる（末木 2006: 184-186）。

この種の役割分担を「神仏補完」ではなく、「神仏習合」と呼んでいる例がある。

神仏習合とは、簡単にいうと神様と仏様の融合です。例えば、祭礼や七五三、初詣などは神社へお参りに行きますし、法事などはお寺へ行きます。また、家には神棚と仏壇があります（小浜市 2008: 7）。

多くの日本人は、子どもが生まれればお宮参りに行き、身内が亡くなればお寺さんに頼んでお葬式をします。初詣をし、お盆でご先祖さまを迎え、結婚式を教会で行う人もいます、、、これこそが日本人の宗教観であり、“日本教”というべきものだと思います、、、日本教を別の言葉でいえば”神仏習合”となります（神崎 2011）。

## 2.4. 学術用語として使えない

このような実態と建前の乖離、地方差、論者の見解の相違などにより、「神仏習合」は多義的、かつ曖昧な言葉となっている。

林淳は、「神仏習合」の語が「学術用語として熟すことなく、厳密な定義を与えられないままに使用されてきた」「仏教でも神道でもない（あるいは両方に属するような）『その他』の領域の事象をさすものとして便利に使われてきた（林 2018: 3）」としてこの語の学術用語としての有効性に疑問を呈する。

佐藤弘夫は、東北にある三つの霊場の死者供養を考察するに当たり、「神仏習合という視座がまったく無力」とし、「この列島の宗教世界を『神』の領域と『仏』の領域に二分して、

その中央に太い区分線を引き、両者の関係性において日本の宗教史を語ろうとする方法そのものが、近代的思考のバイアスのかかったもの（佐藤 2021: 7-19）」と批判する<sup>7</sup>。

ただし、「神仏習合」概念を批判する佐藤が、東北の死者供養（モリ供養）に関わる「光星寺みずからが、『神仏習合』の寺であることをうたっている（*Ibid*: 13）」と指摘している点に注目したい。光星寺が「神仏習合」の寺であることは、自治体や宗派のウェブサイトでも紹介されている（庄内町商工観光課 観光物産係 庄内町観光協会 n.d.、曹洞禅ナビ n.d.）。

これは、研究者の側が分析概念としての「神仏習合」の有効性に疑念を呈しても、当事者たち（の一部である寺院）やその関係者（自治体や宗派）の意識においては重要性を有していることを示している。「神仏混浴」を建前上隠さなければならなかった戦前までの状況と大きな懸隔がある。

次に、このような当事者および関係者における「神仏習合」概念の重要性の高まりについて見ていこう。

## 2.5. 現代における「神仏習合」

第二次世界大戦後の1945年12月、GHQが神道指令を発することによって神社が国家管理から離れるに従い、神社の中で仏教的とみなされる要素、仏寺の中で神道的とみなされる要素が、徐々に公然と強調されるようになった。

1951年、転法輪寺の住職・桑山聖観は、別の神社に所属していた狩場明神と丹生明神の鎮守社を再び境内に建立するが、それを「取り戻した」と表現している（沖 2005: 29）。

修験道の伝統を持つ天河辨財天社<sup>8</sup>では、1948年以降、民間宗教者や新宗教関係者などとの関わりを深めていき、1979年から聖護院門跡一行の山伏修験集団による採燈護摩嚴修が恒例化する（柿坂、鎌田 2018: 124-142）。

この種の神仏コラボ活動は、2000年代以降盛んになるが、その際大きな役割を果たしたのは2003年に発足した「古都の森・観光文化協会」とそれをもとに2008年に成立した「神仏霊場会」である。「古都の森・観光文化協会」は、神社と仏寺の合同企画を構想した知識人と宗教者の組織であり、「神仏霊場会」は関西の多数の大寺社の連合体である（古都の杜・観光文化協会編 2004、廣川 2008）。

「古都の森・観光文化協会」の発足に中心的な役割を果たした国文学者の廣川勝美（本人はプロテスタント）によれば、彼が同協会の発足を考えたきっかけは1995年の阪神淡路大震災だという。その時、彼は「日本の伝統的精神とりわけ自然への回帰、宗教への回帰を活性化できないか」と考え（古都の森・観光文化協会編 2004: 51）、社寺と研究者のグループがそのための構想を重ねていき、2003年の「南禅寺内の『綾戸大明神』の法要並びに大祭」を皮切りに、様々な神仏コラボ行事が進められた（廣川 2008: 31）。

この「古都の森・観光文化協会」、「神仏霊場会」は、山折哲雄<sup>9</sup>のような著名な宗教学者や、仏教宗派の管長級の高僧、神社本庁の幹部級の神職が関与しており、宗教界全体を巻き込む大きな動きとなっている<sup>10</sup>。

廣川は「神仏習合」という言葉を避け、「神仏和合」、「神仏合同」などの語を使用するが(廣川 2008)、この動きに賛同した宗教者や、それを報道したメディアでは「神仏習合」の語を積極的に使用している。

また、2000年代から、観光業や地域振興の分野で、「神仏習合」の語が目され始めている。

もともと大分県では宇佐神宮の世界遺産登録を目指されていたが、2002年に「神仏習合が栄えた国東半島を含めたほうがアピールしやすい」と判断され、「宇佐・国東半島」を世界遺産にする動きが始まっている(『読売新聞』2002.11.26朝刊大分版)。

2004年、ユネスコの世界文化遺産として「紀伊山地の霊場と参詣道」が登録された。登録の際の基準の一つが「東アジアの宗教文化の交流と発展に示す神道と仏教の比類なき融合の所産である」ということであり(文化遺産オンライン 2004)、これ以降、地元自治体や宗教者たちによってこの地の「神仏習合」が強調されるようになった(和歌山県教育庁生涯学習局文化遺産課 n.d. 等)。

これらの過程を経て、2000年代に徐々に観光業や地域振興の分野で「神仏習合」がキーワードとして定着していった<sup>11</sup>。

### 3. 対象と考察手法・枠組み

上記のように、21世紀は宗教者(神社関係者、仏教者)、地域振興や観光業、自治体等により、積極的に「神仏習合」が評価され、アピールされている。

本稿では、かかる「神仏習合」の語がどのようにに語られ、どのように意味づけられているのかを考察したい。

#### 3.1. 考察手法と枠組み

その考察の手法と枠組みは多くを東京大学の藤原聖子のチーム(以下「藤原チーム」とする)の『日本人無宗教説』に依る(藤原 2023)。

何となれば、藤原チームの研究が対象としている「日本人の大多数が無宗教である」という言説は、本稿で問題とする「神仏習合」に関する語りと強い関連を持つと考えられるからである。

藤原チームは明治から現代にかけて、新聞紙上に現れる「日本人が無宗教であること」をめぐる言説の変遷を調査している。もとより「日本人は無宗教だ」ということはよく言われることであり、またそれに対する反論も様々な形でなされてきた。

明治期から1970年代に入るまでは日本人が無宗教であることに対して批判的な論調が強かったが、1970年代から「日本人は実は無宗教ではない」「無宗教だと思っていたものは、日本教のことだった」「自然と共生する独自の宗教伝統があるのだ」等、日本人の宗教に対する態度をポジティブに語る言説が増加している。藤原チームはこれらポジティブな言説を〈独自宗教説〉と呼んでいる(藤原 2023: 10-11)。

現代の「神仏習合」言説は、この1970年代以降の〈独自宗教説〉の流れに位置づけることが可能である。

本稿でも、藤原チームと同様に「神仏習合」に関する新聞記事を考察の対象とし、その際〈独自宗教説〉という枠組みやその〈独自宗教説〉に対する「寛容」という評価や「一神教との比較」などの視角を用いることとしたい。

### 3.2. 考察対象

調査に当たり、主たる対象を「2000年代以降の新聞記事」とする。時代的に明確なメルクマールがあるわけではないものの、2003年の「古都の森・観光文化協会」発足、2004年の「紀伊山地の霊場と参詣道」世界遺産登録などが今日の「神仏習合」言説に比較的大きな影響力を持ったと推測されるためである。

具体的には、日本の五大紙とされる新聞に掲載された記事で「神仏習合」の記載のあるものを対象とする。その際新聞記事データベース（「朝日新聞クロスサーチ（朝日新聞記事）」「産経新聞データベース（産経新聞記事）」「日経テレコン（日経四紙記事）」「毎索（毎日新聞記事）」「ヨミダス（読売新聞記事）」）を用い、2000年以降の「神仏習合（神仏混淆）」という検索語でヒットした語を主として用いるが、比較の対象として適宜他の記事も参照する。

## 4. 現代の「神仏習合」言説に関する考察

### 4.1. 「無宗教／無節操と言われるがそうではない」

2000年代以降、「日本人は無宗教（あるいは宗教に対して無節操）と批判されるが、実際はそうではない」とし、それを「神仏習合」と関連付ける新聞記事が見られる。

例えば、参議院議員（肩書は当時のもの、以下同じ）の山谷えり子（本人はカトリック）は、『産経新聞』で日本人の宗教観を論じ、以下のように述べている。

宗教におおらかな日本人はクリスマスを祝い、大みそかには大祓をし除夜の鐘をきき、新年は初詣で気持ちを新たにする。いい加減だと揶揄する向きもあったが、昨今はむしろ祈りへの共感性の高さこそ日本民俗の特質との評価ともなっている。...、聖徳太子の時代より神仏習合、敬神崇祖の思いで暮らしてきた日本人（山谷 2011）

ある記事では、2011年3月の東日本大震災後に「神仏習合」を見直す動きが各地の社寺で進んだとされ、延暦寺僧侶の大岡永周、神仏霊場会事務局長の上司永照の言葉が紹介される。

（大岡）「お坊さんが神に祈り、自然の恵みに感謝する。神と仏が一体のこの国では不思議なことではなかった。もう一度、神仏習合を見つめなおしてほしい」



(上司)「東日本大震災が起き、何のために宗教があるのか立ち返り、自然発生的に神仏習合に目が向けられた。」「神も仏も拝む日本人は無宗教で無節操だと思っのではなく、日本人の心に根付いた宗教観であり、素晴らしい特性だと再評価すべきだ」(岡田 2013: 5)

僧侶で、京都国立博物館名誉館員の久保智康は、自坊が天台宗なのに真言宗開祖の弘法大師像が祀られていることについて、「宗派も頓着せずともおおらか」と評価した上で、

欧米人にとって、いろんな神や仏に手を合わせ拝む日本人は奇異に映るらしい。結婚式を教会で挙げて、葬式をお寺に頼むのはどうにも理解し難いようだ。日本人の宗教観をいいかげんだとか、逆に無宗教だといいつのる学者もいる。

しかし、日本人の信仰に対して、そんな無理解な言説はあったもんじゃない。神と仏を同体と考える神仏習合の思想はすでに奈良時代からある。幕末・明治初期に神仏分離、廃仏毀釈が起こるまで、神と仏の境界はゆるやかだった。仏の種類も宗派もこだわらない地西国は不思議でなく、それが今でも息づいているというのは貴重なことなのだ。(久保 2015: 26)

上に引用した三件の記事に共通するのは、①複数の宗教に関与するのが日本人の一般的な態度であること、②複数の宗教に関与することに対して従来批判的に見られていたが、それはむしろ評価すべきことであること、③複数の宗教に関与する日本人の宗教観は長い歴史を持つ「神仏習合」と関連していること、である。

これらは藤原チームの論じる所の〈独自宗教説〉になっている(藤原 2023: 10)。

より端的に、「神仏習合は批判されるが、むしろ評価されるべきだ」という言い回しも見られる。

作家の五木寛之が「自然崇拜も、神仏習合も、前近代だと批判する方が間違っているような気がします」と述べているのが紹介されているし(佐田 2000: 3)、仏教学者の末木文美士は「神仏習合というと何か不純なように考える近代の常識は反省されなければならない。」と述べている(末木 2012: 6)。

これらの記事は、「日本人が複数の宗教と関わるのが批判されること(されたこと)」を前提に、それに対して反駁している。このような批判はいつなされたのであろうか。

藤原チームの調査によれば、日本人が複数の宗教と関わることは、1960年代以降それを肯定視する論説も出るようになるものの、確かに批判的に見られていた(木村 2023: 120-124)。

1980年代には肯定的な見方が広がるものの<sup>12</sup>、1982年の記事に、「経済企画庁」にケインジアンとマネタリストが同居し、「神仏習合」のように相容れない経済学的立場が習合した(『日本経済新聞』1982.8.20夕刊)とあるのは、「神仏習合」に対する否定的評価が読み取れ

る。

1995年の記事で、選挙協力のため仏教の僧侶が神前に玉ぐしをささげた「神仏混淆」が「あれっ」とユーモラスに紹介された事例（『朝日新聞』1995.4.1）では、まだ「神仏混淆」に対する揶揄を見ることが可能である。

ただし、少なくとも五大紙の新聞記事データベースで「神仏習合OR 神仏混淆」を検索してヒットする2000年以降の記事に関する限り、「複数の宗教と関わることは無宗教（あるいは無節操）だからよくない」と主張する内容は見つけられなかった。

## 4.2. 寛容

先の山谷や久保の説において、日本人の宗教観が「おおらか」だという評価が出てきたのは、「無節操」の裏返しであろう。「おおらか」以外にも、「寛容」「共存」「平和」などの言葉で、「神仏習合」は積極的に評価される。

和歌山県の丹生都比売神社で神仏習合の伝統を伝えるために仏教の「柴灯大護摩供」が開催された際、宮司は、複数の宗教が協力して平和を祈願することの意義を強調している。

世界平和を願う機運が高まる中、宗教で争わない共存の精神が一層注目を集めている。だからこそこのような行事を今後も続けていきたい（大野 2023: 19）『朝日新聞』2023.6.8 朝刊和歌山版）。

「神仏習合」で地域振興をはかる国東町の弥生のムラ・国東町歴史体験学習館館長の金田信子は、神仏習合が平和に貢献することを強調する。

相手の存在を認め合う神仏習合文化。弥生から受け継ぐ共生の心を戦争のやまない世界に発信したい（『朝日新聞』2004.3.29 朝刊大分版）。

石清水八幡宮宮司の田中恆清は「神も仏も、それ以外のものも信じる日本人の宗教観が世界に広がれば、宗教を原因とする紛争や戦争はなくなる（『産経新聞』2012.10.17 大阪朝刊）」とし、春日大社宮司の花山院弘匡<sup>13</sup>は、「違いを認め合い、共存するのが神仏習合。宗教戦争もなく、平和で寛容性が高い（『朝日新聞』2015.10.4 朝刊）」と述べる。

世界遺産論を専門とする稲葉信子筑波大学教授は、「紀伊山地の霊場と参詣道」として2004年7月にユネスコの世界遺産に登録された熊野の文化に関して次のように述べる。

神仏習合の考えは、他人の文化を受け入れることの象徴であり、言い換えればそれは「平和」であり、世界平和に貢献できる世界遺産といってもよいのではないか。（『朝日新聞』2009.1.26）

「神仏習合」の寛容が語られる際には、しばしばその対比として「一神教の不寛容」に言及される<sup>14</sup>。

山折哲雄は「一神教はシステマチックで普遍的性格を備えています、それだけに土着の宗教を根絶やしにする傾向が強い。それに対して多神教的な宗教世界では、布教活動がそれほど攻撃的ではなく、宗教戦争も規模が小さかった」とし、神仏習合の江戸時代に平和が続いたことを強調する（『産経新聞』2004.1.8 夕刊大阪版）。多摩川大学学長の中谷巖は「一神教のように排他的にならず、どんな神も受け入れる許容力があれば、世界はもっと平和にな」と説く（中谷 2004）。『毎日新聞』は五木寛之の著書で「神仏習合とアニミズム」のような「融通無碍な宗教観から日本人の『寛容』の精神」が「欧米思想へのアンチテーゼ」であると述べられていることを紹介する（柏木 2004: 5）。

日本人が（クリスチャンでないにも関わらず）クリスマスを楽しむことも、この「神仏習合」の寛容性と結びつけて語られる。

宗教といえば、つい血なまぐさい争いが連想されがちです。でも、日本は「神仏習合」のように神様と仏様を両立させてきた。、、、日本人がクリスマスを受け入れたのも、そんな日本の知恵の表れ、、、（大村 2005: 5）

俳優の秋吉久美子は、東日本大震災で福島から東京に避難している子どもたちのクリスマス会を訪問して、「日本は神仏習合でどんな神様も仲良くしています。みなさんも仲良くしてください（『産経新聞』2011.12.18 朝刊）」と語っている。クリスチャンか否かに関わらず、日本でクリスマスが祝われることを「神仏習合」と直結させ、なおかつそれを宗教の平和共存と結びつけて称揚している例である。

『朝日新聞』夕刊のコラム「素粒子」は社会風刺で有名だが、「神仏混淆こんこうの我が国、宗教には寛容だが、それ以外は…（『朝日新聞』2010.9.11 夕刊）」という文が出た。

これは「『神仏混淆（神仏習合）』によって日本人が寛容である」というナショナリスティックな言明に対する皮肉な言い回しになっているものの、「神仏混淆（神仏習合）によって、日本は宗教的に寛容である」という前提が共有されていなければ成立しない。「神仏混淆（神仏習合）によって、日本は宗教的に寛容である」という考え方が如何に定着しているかを示す例にもなっている。

書評欄で『中世寺院と民衆』（井原今朝男著、臨川書店 2004 年）が紹介された際、「日本には神仏習合の文化があり、日本人は比較的宗教に寛容とされているが、中世に視点を移せば、寺院こそ宗教戦争の主体者であり、壮絶な殺人を繰り返していたことが分かる」とされているもの（『日経新聞』2004.4.11 朝刊）を除けば、2000 年以降の五大紙の「神仏習合 OR 神仏混淆」でヒットする記事で、「神仏習合」の「寛容」を否定する意見は見つけられなかった。

### 4.3. 「日本」との関係

#### 4.3.1. 日本本来

明治維新で神仏分離政策が実行されたのは、「神仏混淆」が本来あってはならない状態だとされたからであるが、今日では逆に「神仏習合」が如何に日本人にとって本来的であるかが語られる。

先述のように、「神仏習合」は、今日まで持続しているという立場と、明治維新の際に断絶したという立場とがあるが、いずれにせよ「本来的」という論理構成がなされる。

今日まで持続しているとすれば、その本来性を論じるのは比較的容易である。例えば、ある論者は、「神仏習合は理屈ではない。日本人の心の中に、当たり前のように根付いている信仰だろう（岩口 2006）」とする。

安土城考古博物館学芸員の大槻暢子は、「神仏習合」は「ふだん気づかない身の回りやもののお考えにも神仏習合が息づいている（『朝日新聞』2016.3.16 朝刊滋賀版）」という。

神仏分離政策に関わらず、そこで禁じられた信仰を守り通した人々がいるというのは、この本来性の論証に有利な事例であろう。歴史家で石川県内の神社宮司を務める東四柳史明は、白山下山仏が地元で守られてきたことを評し「神仏習合は日本人に意識に深く残っています。ないがしろにできなかった下山仏はその象徴（福田 2017: 24）」と述べる。

一方で、神仏分離政策によって、日本人がこの深く根付いていたメンタリティを手放してしまったという言い方も存在する。

神仏習合はかつて日本人の間に深く根付いていたが、明治政府の神仏分離によって、こうした考えは姿を消した。寂連の歌には、日本人が手放してしまったおおらかな宗教観が満ちている（マクミラン 2022: 25）。

ただし、「神仏習合」が神仏分離以降に衰えたという前提に立つ場合であっても、「神仏習合」は日本人にとって本来的なもので、それを取り戻さなければならないという言説も強力である。

哲学者の梅原猛は、「偏狭な国学者によって思想的に占領された明治政府は神仏分離・廃仏毀釈の政策をとり、仏ばかりか神々までも殺してしまった」と「神仏習合」の伝統が途絶えたことを述べながら、「日本人を真に道徳的人間にするには、神仏習合の日本の伝統を深く自覚することによってしか可能ではないと私は思う（梅原 2005: 23）」という。

この本来性に対して、疑義が呈されないわけではない。ある記事は「神仏習合が特徴とされる日本の宗教だが、中世を除けばむしろ神仏隔離が支配的で、神と仏は異なった役割を果たして社会を安定させてきた（『日本経済新聞』2001.1.22）」という人類学者の中牧弘允の言葉を紹介する。これは、「神仏習合は長期にわたって日本の伝統だった」という言説の反論になっている。

また、東洋哲学の研究者・大場一央による論説は、「神仏習合」に否定的な伊勢神道を評

価し、日本において本来的な思想を「神仏習合」ではなく「神道」とする（大場 2021）。ただし、今日このような意見がメジャーな媒体に掲載されることは珍しい。

#### 4.3.2. 日本独自

「神仏習合」は「日本独自」であるという記述も多い。

薬師寺管長の安田映胤は「日本特有の神仏習合は素晴らしい」と評し（『読売新聞』2008.7.10 朝刊大阪版）、学びエイド（映像学習サービス）講師の相澤理は「（神道と仏教の）「共生」が可能となった背景には日本独自の宗教的風土がある（相澤 2015: 32）」という。

「日本独特」という評価については、夙に反論がある。「神仏習合」を日本独自の美德とする説は辻善之助の時代からあるが、吉田一彦などの論者はこれを批判してきた。仏教と神信仰との融合は他の仏教圏にも存在するからである（吉田 2021: 1）。

新聞紙上でも、「神仏習合」のような仏教と神信仰との融合が日本以外に見られるとする意見は一定数見られる。

例えば、歴史学者の上田正昭は、『読売新聞』紙上の座談会で、日本文化のベースに「神仏習合」のような「『融合』の精神」があるとし、それは「韓国でも同じ」と論じた（『読売新聞』2000.11.19 朝刊、東京版）。ベトナム史の研究者である桃木史朗は、「神仏習合のような日本との意外な類似点」が分かれば、東南アジア史に対する関心はもっと広がると説き（桃木 2007: 7）、末木文美士は「神仏習合も念仏を唱えるのも日本だけではない」と述べる（『朝日新聞』2021.4.21 夕刊）。

ただし、「東アジアと日本は、、、一神教社会とはきわめて異なる多神多仏の共存を許容した。。。。加えて日本はここから神仏習合という類まれなしくみをつくりだした。（松岡 2011: 29）」のようにすれば、「日本以外でも仏教と神信仰の融合が見られる」という主張と日本の「神仏習合」の希少さを同時に述べる事が可能である。

また、「世界でも珍しい」といい、「アジア」を取って無視すれば、「日本の神仏習合」の希少性を表現できる。

式部透は『産経新聞』紙上で「ユネスコのホームページでその認定文（引用者註：紀伊山地の霊場と参詣道）を見ると、神道と仏教という異なる宗教の融合という世界的にも珍しい文化的伝統が強調されており、自然信仰を基盤とする神仏習合の伝統が今も生きる遺産として、国際的に高く評価されたものであることがうかがえる（式部 2007）」と述べている。

この認定の際評価されたのは、「東アジアの宗教文化の交流と発展に示す神道と仏教の比類なき融合（文化庁 2004）」であるが、式部は「伝統的な日本の宗教観」に言及するものの「東アジア」について述べていない。田中滋は本来ユネスコが評価したグローバルな価値が日本というナショナルな価値に「再回収」される現象を論じているが（田中 2021: 20-21）、これもその例の一つといえよう。

反例や反証に関わらず、「神仏習合」を「日本独特」に近づけようとするナショナリズムは働いている。

#### 4.4. 総括

事程左様に今日メジャーな媒体において「神仏習合」は高く評価されている。かつて見られた「神仏習合」や「神仏混淆」に対する否定的表現は、2000年以降はほぼ皆無といってよい。

これら「神仏習合」言説から看取されるのは、ナショナリズムの執拗さだ。

「無宗教／無節操と言われるがそうではない」という言明は、かつて欧米をモデルとした宗教観が是とされ、折衷的な信仰や複数の宗教への関与が低く見られたことに対する異議申し立てである。

むしろかつてモデルとされた宗教観が「不寛容」とされ、日本の折衷的な態度が平和に貢献すると称賛される。

このような日本人論を展開するには、「神仏習合」が日本人にとって本来的なものであることが前提となっていなければならない。そこでは真宗の「神祇不拝」も、日本人クリスチャンの一神教も無視される（論者本人が真宗僧侶やクリスチャンである場合でさえ）。多様性の称揚が多様性を殺している格好だ。

また「神仏習合」は日本独自、あるいはそれに近いものとされ、その際仏教と神信仰の融合がアジアの他の地域にもあることは無視されるか過小評価される。

このように、「寛容」を持ち上げる言説が「排除」を伴っているならば、「神仏習合＝寛容／一神教＝排外」という二項対立は大きな矛盾を孕んでいることになるだろう。

#### 5. 終わりに あるいはこれからの展望

以上、現代における「神仏習合」についての語りの分析を通して、今日の日本人の宗教観に関して若干の考察を加えた。

本来であれば、「神仏習合」が今日のように称揚されるに至った経緯を明らかにする必要があるが、それが不十分に終わった。今後は、言論界、宗教界（神道、仏教派）、文化財行政、観光業界などの「神仏習合」に対する評価の変化を追うことを課題としたい。

---

#### 注

- 1 複数の辞書の横断検索サービス・コトバンクの「神仏習合」の項目を参照した。特に断りのない限り、本稿で「辞書類」という場合は、ここで参照したコトバンク所収の辞書類を指す。<https://kotobank.jp/word/%E7%A5%9E%E4%BB%8F%E7%BF%92%E5%90%88-82502>（2024年11月2日閲覧）
- 2 同様に「神仏分離」「廃仏毀釈」も明治初年当時の用語ではないが、本稿では慣用に従い、「神仏分離」「廃仏毀釈」の語を使用する。
- 3 戦前の新聞記事の「神仏混淆」の用例には、明らかに否定的な響きがみられるものがある。『東京朝日新聞』（1899.4.6. p. 1）の記事はある政党が候補者として本願寺関係者と出雲大社関係者の双

方を立てようとすることを「神仏混淆か、本地垂迹か」と揶揄している。真宗僧侶の寺本慧達が稲荷神社の「お塚信仰」を罵倒する際に「神仏混淆」を用いたのも（寺本 1930: 6）、当時の知識人とりわけ真宗の知識人としての「神仏混淆」観に従ったものであろう。真宗関係者による「神仏混淆」の否定的用法は、戦後のある時期まで持続した（雲藤 1953: 159）。

- 4 歴史学者の辻善之助（1877-1955）が「神仏習合」とよばれる分野に関する研究で最も影響力が大きいという認識は、多くの研究者が共有している（林 2018、吉田 2021 等）。
- 5 例えば、金峯山修験本宗の指導者である田中利典は、修験道の立場から「神仏習合」を称揚しているが、その際に「神仏混淆」の語も併用している（田中 2004: 255）。
- 6 多くの社僧が還俗して神職になり、場合によっては子孫に引き継がれたことは（藤田 2012: 91）、今日の社家の出自の多様性をもたらすことになり、それが今日の「神仏習合」に対する再評価の一因になっている。
- 7 この他、「習合」が特定の思想的立場からの概念語であることや（吉田 2021: 11）、近代概念で、「不均等二分法」であることが批判され（鈴木 2018: 152）、異なる概念の使用が提唱されている。
- 8 役行者の従者・前鬼の子孫とされる社家の柿坂家では、神仏分離の際に天河社境内の仏塔が破壊された際の怒りが伝承されている（柿坂、鎌田 2018: 125）。
- 9 山折哲雄と釈徹宗の「神仏習合」に対する好意的態度は、かつて明らかに「神仏混淆」に批判的だった真宗系知識人の変化を象徴している。
- 10 神道人の葦津耕次郎（葦津珍彦の父）が 1934（昭和 9）年に仏教各宗派管長が明治神宮、靖国神社に正式参拝する企画を推進したが、神道界内で反発され、継続することができなかった（川辺乃 2021）。この際、葦津はこの企画が「神仏習合」でないことを強調しなければならなかったことから（藤田 2014: 36）、この時期の神社界は、少なくとも組織として「神仏習合」を提唱できなかったことが分かる。しかし、2000 年代以降は神道界も「神仏習合」に積極的な姿勢を示す。金峯山修験本宗の高僧であり、神仏のコラボ企画や紀伊山地の世界遺産登録に重要な役割を果たした田中利典は、神仏霊場会に参加する神道関係者たちを評して「このところ、神社側の神仏習合に対するスタンスが急速に変わってきている」と述懐した（植島、九鬼、田中 2009: 210-212）。
- 11 公益社団法人日本観光振興協会は、大分県の宇佐・国東半島の 8 市町村が参加して 2010 年に「豊の国千年ロマン観光圏協議会」が発足して「広域観光圏」の認定をうけたことに関し、「それまで国東半島地域には神仏習合の歴史や文化が観光資源になるという発想が」あまりなかったと書いている（日本観光振興協会 2018）。同様に、2000 年以降、福井県小浜市、鳥根県出雲市、長野県諏訪市などで、「神仏習合」を観光資源に活用する動きが見られる（小浜市 2008: 6-7 等）。
- 12 新聞記事ではないが、作家の曾野綾子（カトリック）が「よく言われることだけれど、日本人は「寛容」だということになっていて、どこの宗教もこだわりなく受け入れる。だから、七五三はお宮で、結婚式はキリスト教で、地鎮祭は神道で、葬式は仏教で、ということも平気だ、と（やや肯定的な意味を含めて）いわれるが、こういうことは、私はやはり恥だと考えている。（曾野 1990: 43、初出は 1987 年の『新潮 45』）と書いている。1980 年代後半時点で既に日本人が複数の宗教に関与することについて肯定的な語りが多かったことが分かる。
- 13 今日の神職が自らの家の歴史と関連付けて「神仏習合」を論じているのも、それまでの神道界に見られなかった特徴であろう。公家を祖先にもつ花山院や、社僧の後裔である田中恆清（石清水八幡宮宮司）は自著の中で、己の家系における「神仏習合」を語った上で、「神仏習合」の重要性を強調している（花山院 2016: 155-187、田中 2011: 186-221）。

- 14 藤原チームの調査では、一神教と対比し、「宗教戦争」にならない日本の宗教の「寛容」なあり方は1970年代以降称揚され続けている(木村 2023: 145-149等)。

### 参考文献

- 安中尚史 2014「仏教教団の近代化」智山伝法院編『近代仏教を問う』春秋社 pp. 87-103
- 文化遺産オンライン 2004「紀伊山地の霊場と参詣道」[https://bunka.nii.ac.jp/docs/special\\_content/detailed\\_explanation/10\\_kiisanchi.pdf](https://bunka.nii.ac.jp/docs/special_content/detailed_explanation/10_kiisanchi.pdf) (2024年11月22日閲覧)
- 大寧護国禪寺 n.d.「4. 活躍する豊川いなりチーム明治維新の秘話・大寧寺と豊川稲荷」『大寧護国禪寺』[https://www.taineiji.jp/episode/epi\\_c4.html](https://www.taineiji.jp/episode/epi_c4.html) (2024年11月23日閲覧)
- 藤原大誠 2012「神仏分離後の神社と神官・神職」『神道宗教』228 pp. 58-97
- 藤原大誠 2014「支那事変勃発前後における英霊公葬問題」『明治聖徳記念会紀要』[復刊第51号] pp. 35-52
- 藤原聖子 2023「日本人無宗教説の起源をめぐって」藤原聖子編著『日本人無宗教説——その歴史から見えるもの』筑摩書房 pp. 8-15
- 畑中章宏 2021『廃仏毀釈——寺院・仏像破壊の真実』ちくま新書
- 林淳 2018「「神仏混淆」から「神仏習合」へ」羽賀祥二編『近代日本の地域と文化』吉川弘文館 pp. 2-28
- 廣川勝美 2008『神と仏の風景「こころの道」-伊勢の神宮から比叡山延暦寺まで』集英社新書
- 廣澤隆之 2014「近代が生み出す仏教イメージ」智山伝法院編『近代仏教を問う』春秋社 pp. 103-109
- 今堀太逸 2018「神仏習合」『Web 版新纂浄土宗大辞典』<https://jodoshuzensho.jp/daijiten/index.php/%E7%A5%9E%E4%BB%8F%E7%BF%92%E5%90%88> (2024年11月3日閲覧)
- 柿坂神酒之祐、鎌田東二 2018『天河辨財天社の宇宙 神道の未来へ』春秋社
- 花山院弘匡 2016『神道千年のいのり』春秋社
- 川辺乃素子 2021「【連載2】葦津彦彦氏の父君の話。」[https://note.com/kawabeno\\_sugo/n/n51da19130edf](https://note.com/kawabeno_sugo/n/n51da19130edf) (2024年11月16日閲覧)
- 木村悠之介 2023「実は無宗教ではない? ——一九六〇～七〇年代」藤原聖子編著『日本人無宗教説——その歴史から見えるもの』筑摩書房 120-151
- 小浜市 2008「若狭の社寺建造物群と文化的景観」が世界遺産暫定リスト候補カテゴリⅡに」『広報おばま』2008.11 pp. 6-7
- 古都の杜・観光文化協会編 2004『神仏研究(第1輯)特集 神と仏と日本の心』翰林書房
- 宮城泰年 2012「靡き八丁斧入れず——修験のこころ」神仏霊場会・編『神仏霊場ものがたり 日本宗教の聖地とそのダイナミズム』戎光祥出版 pp. 64-85
- 村上专精、辻善之助、鷲尾順敬編 1926-1928『明治維新 神仏分離史料』上中下巻 株式会社東方書院
- 日本観光振興協会 2018「【第20回】DMO 先進事例に学ぶ ケース16: 一般社団法人豊の国千年ロマン観光圏」『観光地域づくりの新しい潮流に学ぶ DMO なび』2018.12.14 <https://www.nihon-kankou.or.jp/dmo/news/news23.html> (2024年11月23日閲覧)
- 佐伯史磨 2018『霊峰立山の老神主 渾身の曼荼羅絵解き: ——佐伯幸長 講演録——』立山静寂庵
- 櫻井徳太郎 1987『神仏交渉史の研究』櫻井徳太郎著作集第二巻 吉川弘文館
- 佐藤弘夫 2021『日本人と神』講談社現代新書
- 庄内町商工観光課 観光物産係 庄内町観光協会 n.d.「白狐山 光星寺」『庄内町 山形県庄内町観光情報サイト』<https://www.navishonai.jp/spot/22.html> (2024年11月9日閲覧)



- 曾野綾子 1990『夜明けの新聞の匂い』新潮文庫
- 曹洞禪ナビ n.d.「<sup>ひやっこさん</sup>白狐山光星寺」『曹洞禪ナビ』[https://sotozen-navi.com/detail/article\\_60622\\_1.html#art1](https://sotozen-navi.com/detail/article_60622_1.html#art1)  
(2024年11月9日閲覧)
- 末木文美士 2006『日本宗教史』岩波新書 1003
- 末木文美士編著 2024『日本仏教再入門』講談社
- 鈴木正崇 2015『山岳信仰 日本文化の根底を探る』中公新書
- 鈴木正崇 2018『明治維新と修験道』『宗教研究』92(8) pp. 131-151
- 田中滋 2021「聖地・熊野の世界遺産化を読み解く」田中滋、寺田憲弘編著 2021『聖地・熊野と世界遺産 - 宗教・観光・国土開発の社会学 -』晃洋書房 pp. 1-22
- 田中利典 正木晃 2004『はじめての修験道』春秋社
- 田中恆清 2011『神道のちから』学研プラス
- 寺本慧達 1930『神社の本質とその啓蒙』東林書房
- 辻善之助 1926『神佛分離の概観』村上專精、辻善之助、鷲尾順敬編『明治維新 神仏分離史料』上巻 株式会社東方書院 pp. 1-80
- 遠日出典 2007『八幡神と神仏習合』講談社現代新書
- 植島啓司、九鬼家隆、田中利典 2009『熊野 神と仏』原書房
- 雲藤義道 1953『明治維新における神仏分離の意義』『宗教研究』137 pp. 159-160
- 和歌山県教育庁生涯学習局文化遺産課 n.d.「世界遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」のすべて」『和歌山の文化財』[https://wakayama-bunkazai.jp/world\\_heritage/all\\_world\\_heritage/](https://wakayama-bunkazai.jp/world_heritage/all_world_heritage/) (2024年11月23日閲覧)
- 吉田一彦編『神仏融合の東アジア史』名古屋大学出版会
- 新聞記事 (新聞記事は、署名記事のみ参考文献表に掲載し、署名のない新聞記事に関しては、本文で出典を注記するのみとする)
- 朝日新聞
- 佐田智子 2000「五木寛之の世界 3月 自分の中に出発点探す(語る)」『朝日新聞』2000.3.1 夕刊 p. 3
- 梅原猛 2005「(反時代的密語) 日本の伝統とは何か」『朝日新聞』2005.5.17 朝刊 p. 23
- 沖真治 2005「(隠れ古社寺 気まま旅) 転法輪寺 神仏習合に独自伝承 / 奈良県」『朝日新聞』2005.8.2 朝刊 p. 29, 奈良版
- 大村治郎 2005「(にっぽんの知恵) クリスマス サンタは大黒さま似、気分が華やく日本人」『朝日新聞』2005.12.24 夕刊 p. 5 大阪版
- 桃木至朗 2007「歴史教育をどうするのか 大量の暗記求めず、学ぶ意味見える工夫を」『朝日新聞』2007.3.6 夕刊文化 p. 7
- 末木文美士 2012「(仏典に学ぶ 日本 1000年の知恵) 無住「沙石集」」『朝日新聞』2012.6.25 夕刊 p. 6, 大阪版
- 岡田匠 2013「(神仏習合) のススメ 石清水八幡宮と延暦寺、鶴岡八幡宮と東大寺…」『朝日新聞』2013.10.21 夕刊, p. 5, 大阪版
- 久保智康 2015「神と仏、寛容と優しさ」『朝日新聞』2015.4.17 朝刊, p. 26, 石川県版
- 相澤理 2015「(歴史学のススメ 日本史編) 仏教と日本在来の神々、なぜ共存 寛容な風土の中、仏教も変容」『朝日新聞』2015.11.05 朝刊 p. 32
- 福田和也 2017「(北陸見聞録) 白山下山仏 石川・白山市 神仏習合、物語る象徴」『朝日新聞』2017.6.6 朝刊 p. 24 石川版

マクミラン、ピーター・J 2022 「(星の林に ピーター・J・マクミランの詩歌翻遊) 仏の姿、和らげた  
出雲の神」『朝日新聞』2022.9.11 朝刊 p. 25

大野博 2023 「神仏共存の精神で平和祈願「柴灯大護摩供」丹生都比売神社／和歌山県」『朝日新聞』  
2023.6.8 朝刊 p. 19 和歌山版

久保智祥 2024 「霊峰・白山から仏像が下山し 150 年 守り伝える山村を訪ねて」

『朝日新聞』2024.8.11 朝日新聞デジタル <https://www.asahi.com/articles/ASS8B4SDVS8BPJLB00CM.html>  
(2024 年 11 月 20 日閲覧)

産経新聞

中谷巖 2004 「宗教知らずして世界は理解できず」『産経新聞』2004.8.13 夕刊, オピニオン, 大阪版

岩口利一 2006 「【春への祈り 東大寺修二会】大中臣祓 本行前、清めの儀式」2006.3.7 夕刊大阪版

式部透 2007 「【感・彩・人 コラム】世界遺産」『産経新聞』2007.4.9 夕刊・夕刊経済, 大阪版

山谷えり子 2011 「【解答乱麻】次世代に伝えたい宗教儀礼の意義」『産経新聞』2011.12.24 朝刊, オピニ  
オン, 東京版

大場一央 2021 「【日本の道統】「神道思想」を生んだ外宮神官家」『産経新聞』2021.8.3 夕刊大阪版  
毎日新聞

柏木辰興 2004 「【ほんの森】売れています 百の旅 千の旅 = 五木寛之・著」『毎日新聞』2004.1.19 夕刊 p.  
5 東京版

日本経済新聞

松岡正剛 2011 「「平城京モデル」に学べ」『日本経済新聞』2011.1.14 朝刊 p. 29

広池 真一 (s\_hiroike@hokuyo.ac.jp)

# 現代日本社会における敬語使用の規則・基準・注意点に 対する考察

— 1990年代の敬語に関する実用書の例を通して —

福本 達也  
北洋大学

Considerations on Rules, Standards, and Points to Note Regarding The Use  
of Honorific Language in Modern Japanese Society  
— Through Examples from Practical Books on Honorific Language from the 1990s —

FUKUMOTO Tatsuya  
Hokuyo University

## Abstract

In this paper, I have examined the rules, standards, and points to note for the use of honorific language other than honorific forms, using examples from practical books on honorific language published in the 1990s, the early Heisei period. As a result, I have found the following.

(1) If the honorific form does not match the time, place, and occasion, it can cause misunderstandings and discomfort for the other person. (2) Even if you use honorifics and the content of the conversation is poor, it will not only weaken the effect of the honorific language, but also have a negative effect. (3) Even if the words and content of the conversation are good and honorifics are used appropriately, the way of speaking is poor. And it can still weaken the effect of the honorifics and produce negative results. (4) Also, if the honorifics and language usage are good and your facial expression and behavior are poor, you will give the other person a bad impression. (5) Unless the honorifics feelings match, the other person will feel uncomfortable, and have a bad impression..

## 1. はじめに

現代日本社会において人間関係は複雑になっていて、社会的規範も複雑になっている。その中でも言葉使いの規則や規範が特にそうである。日々の生活において様々な人と会い会話をしているのだが、相手に対してどのように話せば良いのか悩んだり難しく思っている人はかなりいる。相手に対する言葉使いの中で大きな問題の一つが敬語使用についての問題である。相手によって時と場合によって敬語を使い分けなければならないし、また敬語そのものだけでなく話し方や態度や表情などにも気を使わなければならない。適切な敬語使用をする必要があるが、敬語使用にはどのような規則や基準があるのか、何に注意する必要があるのか、また敬語のゆれや誤用にはどのようなものがあるのか。これらの問題を知ることは、敬語の教育をする上でも重要になってくる。そのために、まず、実際の社会での敬語使用にはどのような規則や基準があるのか、何に注意する必要があるのか、ゆれや誤用がどのようなものなのかを具体的に調べる必要があると考える。また、敬語使用に関する時代別の考察を順次行う予定であるが、本稿ではまず第1番目に第二次大戦後初の年号が変わるといふ大きな時代的变化の後の平成時代の初期について考察し、今後他の時期の考察を行うことで時代的比較ができると考える。

本稿では平成時代初期の実際の社会における敬語使用の規則や基準や注意点などを考察する手段として、平成初期の1990年代に出版された敬語に関する実用書や専門書<sup>1</sup>をテキストとして使用し、実用書の中にある実際の敬語使用の例を調査し結果をまとめてみた。本稿では、敬語形式使用の規則そのものではなく、敬語使用時の話の内容や話し方、態度などの規則や基準や注意点について敬語の実用書の中ではどのように言っているのかを調べ例を挙げながら考察する。

## 2. 先行研究

敬語成立の条件として、辻村敏樹は「敬語を成立させる基本条件としての上位待遇意識を生み出す条件」<sup>2</sup>として、

- (一) 上下関係として、(1) 同一組織内の地位—職場では部下が上役に対して。(2) 社会階層—皇室や府県知事や国会議員、会社の重役、医者などに対して高く遇する傾向がある。(3) 年上に対して敬語を使う。(4) 経歴の長短—後輩が先輩に対して、能力よりも経験の長さを重要視する、年功序列の存在。
- (二) 恩恵・負い目の関係—恩恵を受ける者は与える者に対して敬語をもって接するのが普通。医者と患者、客と商人、教師と生徒の父兄などの関係で後者が前者に対して。
- (三) 力関係—権力、腕力のある者に対して。
- (四) 親疎関係—疎い者に対しては敬語を使い、親しい者には使わない。

と言うふうには考察している。

菊池康人は待遇表現の使い分けに関係する諸ファクターとして次のようなものを挙げている<sup>3</sup>。

- (1) 社会的ファクターとして、A. 場および話題—その場の構成者 話手 聞手 第三者：それぞれどういう人か、お互いの関係。場面の性質：どういう場面か、話題：どういう話題か。B. 人間関係—上下関係：社会的地位、先輩 後輩、年齢上下。立場関係：恩恵授受関係、強弱関係、優劣関係。親疎関係。内外関係。
- (2) 心理的ファクターとして、A. 待遇意図。ごく一般的な待遇意図：相手に丁寧な表現をするかしないか。恩恵の捉え方、親疎の距離の取り方、内外の捉え方。特別な待遇意図：皮肉、いじわる、ふざけ等。B. 背景的ファクター：人物や場面等に対して持つ心理。C. 表現技術：伝達効果の観点からの考察。

また菊池康人は敬語を考えるのに次の三つの面に分けて整理して捉えている<sup>4</sup>。

①語形(かたち)、②機能(はたらき)、③適用(あてはめ)

敬語使用ではこの三つに関して注意する必要があり、この三つを間違えると敬語使用の違いになったりおかしい敬語になるとしている。

次に奥山益郎は敬語の乱れを大別して次のような二つの乱れがあるとしている<sup>5</sup>。ひとつは敬語のパターンの乱れ、もうひとつは敬語のTPOの乱れである。TPOとはタイム(時)、プレイス(所)、オケーション(場合)の略である。敬語使用ではこの二つを注意する必要があり、これらが乱れたりはずれたりするとおかしい敬語になるとしている。

文化庁は「敬語の指針<sup>6</sup>」の中で敬語を使うときの基本的な考え方として次のような点を挙げている。

- 1 現代の敬語は、相互尊重を基本として使う
- 2 敬語は社会的な立場を尊重して使う
- 3 敬語は「自己表現」として使う
- 4 敬語は過剰でなく適度に使う
- 5 敬語は自分の気持ちにふさわしいものを選んで使う

先行研究のほとんどが敬語形式の使用の規則や基準や注意点についての研究である。また、実際の社会での具体的な敬語使用の規則や基準や注意点についての内容や例を取り上げてどうなっているのかを詳しく表していない。そこで本稿ではこれらの先行研究を踏まえながら、具体的に現代社会において実際の社会での敬語形式使用の規則や基準や注意点

以外の具体的な敬語使用の規則や基準や注意点についてどうなっているのかを調べて行く。

### 3. 研究方法

本稿では敬語使用の規則や基準や注意点などに関する研究の第一歩として、平成時代初期の1990年代の敬語使用に関して考察する。敬語使用の規則や基準や注意点などを調査する方法・手段として1990年代に出版された敬語に関する実用書をテキストとして使用し、実用書の中にある実際社会で使われている敬語使用の規則や基準や注意点に関する例を調査し分析する。今回は、敬語使用の規則や基準や注意点の中で、敬語形式以外の規則や基準や注意点などについて敬語の実用書の中ではどのように言っているのかを調べて例文を挙げながら考察して行く。

例文を挙げた実用書は次のとおりである。

1. 鈴木雪子 (1991) 「ことばづかいと敬語」生産性出版
2. 福田健 (1993) 「ビジネス敬語がスラスラ話せる本」かんき出版
3. 原加賀子 (1993) 「美しいオフィスレディの敬語の48章」大和出版
4. 原加賀子 (1993) 「いつでもどこでもすぐに使える敬語の本」大和出版
5. 野元菊雄 (1994) 「敬語の使い方」梧桐書院
6. 奥山益郎 (1994) 「正しいようで正しくない敬語」講談社
7. 奥秋義信 (1994) 「ビジネスマン敬語ハンドブック」リベラル社 (星雲社)
8. 金井良子 (1995) 「この相手・この場所これが正しい敬語です」中経出版
9. 永崎一則 (1997) 「正しい敬語の使い方」PHP 研究所
10. 頼陽子 (1997) 「丸覚えで使いこなす敬語の本」日本実業出版社
11. 金井良子 (1998) 「敬語とマナーが身につく本」大和出版
12. 清水省三・有村伊都子 (1999) 「敬語の使い方が3時間でマスターできる」明日香出版社
13. 浅田秀子 (1999) 「知らないと恥をかく『敬語』」講談社
14. 金井良子 (1999) 「簡単マスター敬語のマナー」PHP 研究所
15. 奥秋義信 (1999) 「ちょっと迷うとっさの敬語」講談社

これらの実用書の中に掲載されている文章の中から、実社会で使われている敬語使用の規則や基準や注意点など、そしてその誤用例を調査し分析する。

先行研究と筆者の考えを加えながら敬語使用の規則や基準や注意点を次のように分類した。

- (1) 適切な敬語形式の使用

- (2) TPO に応じた敬語使用、TPO に合う敬語使用
- (3) 敬語使用にふさわしい話の内容・言葉
- (4) 敬語使用にふさわしい話し方
- (5) 敬語使用にふさわしい表情・態度・行動
- (6) 敬語使用にふさわしい相手を敬う、大事に思う心・気持ちの有無

本稿では(2)～(6)の敬語使用の規則や基準や注意点について順番に考察していく。

各規則や基準や注意点についての例文を挙げ考察した後に、その誤用例がある場合その例を挙げその誤用に對する解決策や正しい言い方を述べ、それに関する規則や基準や注意点などを考察する。

## 4. 実用書の中にある敬語形式以外の敬語使用の規則や基準や注意点

### 4.1. TPO に応じた敬語使用、TPO に合う敬語使用について

これから敬語形式そのものの問題よりも敬語の使い方の問題を考察していく。まず最初にTPOと敬語使用について考えよう。一般的にTPOに応じた敬語を使うことが良いとされている。TPOとはT(TIME:時間)、P(PLACE:場所)、O(OCCASION:場合)のことである。TPOについて詳しい内容を調べると次のようである。

「TPO」は「時・場所・場面」を意味する略語であり、「時と場合に応じた格好や振る舞いをする」「場違いな服装や態度を慎む」という意味で用いられる言葉である。服装・言葉遣い・態度・作法などを、その時々状況に応じて適切に選び、その場にふさわしい振る舞いをする、ということ。主に「TPOに応じた服装」「TPOをわかまえる」のような言い方をする<sup>7)</sup>。

#### 4.1.1. TPO に応じた敬語使用の注意点

例1：相手との人間関係・場の雰囲気等によって敬語の使い分けが必要。(ビジネス敬語がスラスラ、P.25)

上の例のように相手や場合・雰囲気に応じて敬語や言葉使いを使い分けることが必要である。ではこういった相手や場合・雰囲気(いわゆるTPO)に合った敬語使用や言葉使いとはどういうものであるかについて具体的に見ていく。TPOと敬語使用の関係で問題となるのがどういう時に、どういう敬語を使うかということである。敬語を使う相手や場面に對して調べてみると次のようである。

例2：社会人としての敬語場面を次の五つに分けてみます。(1)初対面の人に対して、(2)親しくない人に対して、(3)目上・地位の高い人に対して、(4)立場の違う人

対して、(5)公の場で。その場面に応じた過不足のない敬語の使い方が聞く人に信頼感を与えるのです。(丸覚えで使いこなす敬語の本、P. 19、20、21)

上の例は社会人としての敬語場面について述べている例である。敬語を使う必要のある相手や場面・時についてであり、いずれも話者と相手との人間関係に距離や差がある場合や相手と距離や差を置く必要のある場合であり、敬語を使って相手やその場に配慮する必要があるということである。そういった相手や場面に合わない敬語使用や間違った敬語使用をすると相手に不快感を与えたり誤解が生じたり場の雰囲気が悪影響を及ぼす可能性がある。

#### 4.1.2. 身内に対する敬語使用の誤り

例 3：身内と身内外を区別しよう。(敬語とマナーが身につく本、P. 32)

日本では特に相手や話す内容が身内に関する事なのか、そうでないのかを区別する必要がある。

相手に身内のことを話す時には自分の身内に敬語を使ってはいけないと一般ではされている。

例 4：私のお兄ちゃんは◆◆商社にお勤めしているのよ。(簡単マスター、P. 86)

5：こちらが私どもの田代部長でございます。(簡単マスター、P. 97)

6：「田川さまですね。どなたにご用ですか。係長ですか」係長、電話ですよ。(簡単マスター、P. 99)

7：おばあちゃんが『○○』とおっしゃって、買ってくださったんです。(簡単マスター、P. 154)

上の例は身内である家族や同じ会社の人に敬語を間違っって使っている場合である。例 4 は謙譲語を身内に間違っって使っている場合であり、例 6、7 は間違っって尊敬語を身内に対して使っている場合である。例 5 は「田代部長」と言うよりは「部長の田代」の方が良いとされ、「田代部長」のように名前のすぐ後に部長をつけて言うと尊敬語になってしまい使い方が間違っになるとされる場合である。

#### 4.1.3. 場・相手と敬語表現の不一致

例 8：「はい、課長は昨日の午後いらっしやって、社長は当日の今日いらっしやる、ということでした。」(美しいオフィスレディの敬語 48 章、P. 104)

9：課長の企画書は○○君に見せていただきました。(ビジネスマン敬語、P. 98)

10：(来客を) お連れして参りました。(ビジネスマン敬語、P. 40)



- 11：(課長が) 課長から部長におっしゃって下さい。(ビジネスマン敬語、P. 55)  
 12：(受付で内部に向かい) 甲山さんが来てますよ。(ビジネスマン敬語、P. 69)  
 13：(社内の人同士で) はい、課長、部長はおります。(丸覚え、P. 24)  
 14：(年の近い主任、社内で) 一言お書きになっていただきたいのですが…。(簡単マスター、P. 182)

上の例のように、せっかく良い敬語を使ってもその場や相手とその敬語の使用方法が合っていないとかえって失礼になる場合がある。例8は話し手と課長や社長といった複数の上司と関係のバランスと言葉使いが合っていない場合であり、このような時は別々に分けて言うと良いとされる。例9から例14は敬語の形式そのものの問題と言うよりも相手や場と敬語形式が合っていないために問題となっている場合である。例9は〇〇君を尊敬することになってしまうため、「課長の企画書は〇〇君を通じて拝見しました」というように表現すれば良いとされる。例10は来客に対して「参る」を使うことになり間違いであるとされる場合である。例11は「部長にお伝え下さい」という表現にしたら良いとされる。例12は客の「甲山さん」に対して「来る」ではなく「お見えになる」などの尊敬語を使う必要がある場合である。例13は課長に対してと部長に対しての敬語使用が反対であり、部長に対して敬語を使用した方が良いとされる場合である。例14は「お書きになっていただきたい」という二重敬語的な敬語形式の問題もあるが、年の近い上司に対する敬語形式の程度が高すぎるとされ「書いていただきたい」とした方が良いとされる場合である。

#### 4.1.4. 敬語を使うべきではない対象への敬語使用

次は人間以外のものに敬語を使う例である。一般に人間以外に敬語を使うのは間違いだとされている。

- 例15：毛並みのよい犬でいらっしゃいますね。(これが正しい敬語です、P. 48)  
 16：可愛い猫でいらっしゃいますね。(簡単マスター、P. 107)  
 17：庭の菊が、見事にお咲きになっていますね。(これが正しい敬語です、P. 48)  
 18：低気圧が二つご一緒にやってきます。(簡単マスター、P. 36)  
 19：水族館のジンベイ鯨が亡くなりました。(簡単マスター、P. 38)

上の例は人ではなく動物や植物、そして自然現象などに敬語を使っている場合である。例15、16、17は相手のことを敬うために相手自身ではなく相手のペットや相手の家の庭の花という相手の所有物にまで敬語を使っている例である。このような敬語使用の例は間違いであるとされるが、実際には多くなされていることである。例18、19はテレビのニュースなどでの例であるが、一般的な天気に関することや水族館の鯨に対して敬語を間違っ使っている場合である。

例 20：(客に) 少々時間がお掛かりなさいませうけどいいですか。(簡単マスター、P. 177)

21：宝物はポケットに入っていられるのですか。(簡単マスター、P. 179)

22：(テレビで) 今、この曲が受けていられるようです。(簡単マスター、P. 180)

23：クーポン券の内容は間違っていられるいませんか。(簡単マスター、P. 44)

24：お電話でいられるいます。(簡単マスター、P. 106)

25：犯人ですか？ 普通にしゃべる方でしたよ。(簡単マスター、P. 38)

上の例の中で例 20 から 24 までは事物に敬語を使っている場合である。例 20 は客の時間に対してという考えで時間に対して敬語を使っている場合であり、例 21 は相手のものに対してという考えで敬語を使っている場合である。例 22 はテレビの視聴者に関する事と考えると、例 23 は相手が所有しているものに関してだからと考えると、例 24 は相手に関する電話や相手にかかってきた電話なのだと考えると、それぞれ敬語を使っているが、全て間違った敬語使用であるとされている。例 25 は敬語を人に使っているが、その人があまり敬語を使うのに相応しくない犯罪者などであるので、そのような人に敬語を使うのは良くないとされる場合である。

## 4.2. 敬語使用に相応しい話の内容・言葉について

次に敬語形式や TPO 等の条件が合っても、話の内容が良くないとせっかく敬語を使っても良くない結果が現われる可能性がある。そのことについて見てみよう。

### 4.2.1. タブーとされている話の内容について

例 26：一般的に上位者に対しては「お見事」のようなほめ言葉、「ご苦労」のようなねぎらい言葉、「できますか」のような能力を問う言葉、「よろしい」のような許可する言葉は失礼とされる。(ちょっと迷うとっさの敬語、P. 87)

上の例のように目上の人にはある一定のほめ言葉やねぎらいの言葉、能力を問う言葉、許可する言葉などは使ってはいけないとされている。これらの言葉を上位者に言うと相手の気分を害する結果となるであろう。

### 4.2.2. 内容の問題

例 27：「こんな素晴らしいインテリア、美味しい料理。このレストランが流行るのは火を見るよりも明らかです。」「まったく不吉なことを言ってくれるわよ。」「知らないで恥をかく「敬語」、P. 120)

上の例は「忌み言葉」や縁起の悪い話の内容と敬語は合わないという場合である。どんなに丁寧な気持ちを表そうと敬語を使っても話の内容が良くなければ敬語使用の効果はなくなるし、時にはかえって相手に皮肉に聞こえてしまい逆効果を与える場合もある。

例 28：(外国人に) うそ言いなさい。(ビジネスマン敬語、P. 130)

29：タレントの〇〇さんがオートバイでおぶつかりになりました。(簡単マスター、P. 36)

30：きのう頂戴したヤツ、拝見させていただきました。(いつでもどこでも、P. 28)

上の例は相手をバカにするような話、事故などの不幸、悪口等の悪い言葉や話等に敬語を使っていて、そのような悪い内容の話に敬語を使っても良くない結果となるという場合である。例 28 は外国人は日本語が出来ないという考えでなのか「なさい」という命令形を使い、それは違うのではないかと他の人に思わせたり相手を軽く扱うような言葉使いをしている。例 29 は事故についてで敬語を使うには相応しくない言葉に敬語を使っている場合であり、例 30 は何か不当な手段で手に入れたものについての話で敬語を使っているが、敬語を使っても相手に敬意を感じさせなかったり違和感を与えている場合である。また例 30 は文全体が敬語の内容でなければならないとされる場合である。

### 4.3. 敬語使用に相応しい話し方について

今度は言葉そのものよりも話す方法等について調べてみよう。せっかく正しい敬語や良い内容の話をしていても話し方が良くないと敬語の効果が半減したり逆効果を与える可能性がある。

#### 4.3.1. 話し方について

例 31：敬語を連発しすぎることによって、かえって敬意が伝わらなくなってしまう場合が往々にしてある。(敬語の使い方、P. 21)

32：終わりまで丁寧に。(丸覚えで使いこなす敬語の本、P. 22)

話し方では相手に分かりやすく話す方法が良いということである。例 31 のように敬語を使いすぎたりしても良くないし、例 32 のように最後まで丁寧に言うように心掛けることが大切であり、話が途中で終わったり途中までしか丁寧にできなかったり敬語が不足してはいけぬのである。

#### 4.3.2. 敬語や表現の不均衡による間違い

例 33：あいさつ申し上げます。(ビジネスマン敬語、P. 90)

34：〇〇さん、支社長によろしくって、お帰りになされました。(いつでもどこでも、

P. 64)

- 35：○○宮さまの実物を見ていかがですか。(簡単マスター、P. 33)
- 36：荷物はこちらにお置きくださいませ。(簡単マスター、P. 84)
- 37：「あの人がおっしゃった」(美しいオフィスレディの敬語 48 章、P. 115)

上の例は文章の丁寧さのバランスが取れていない場合である。敬語や表現のバランスが取れていないと相手に良くない印象を与えることになる。文章の中で一部は丁寧で一部はそうではないと不釣り合いな印象を与える。例 33 は「あいさつ」を「ごあいさつ」に、例 35 は「実物」を「ご実物」に、「見て」を「ご覧になって」に、例 36 は「荷物」を「お荷物」に、例 37 は「あの人」を「あの方」にそれぞれ変えればバランスが取れるであろう。例 34 は省略されている部分があるので良くない印象になる場合であり、「○○さんが支社長によりしくお伝えくださいとおっしゃってお帰りになりました。」のように完全な文に、そして二重敬語をなくせば良いであろう。

#### 4.3.3. 相手に違和感を与える言葉使い、敬語使用

- 例 38：係員の方以外はお手をふれないでください。(ビジネスマン敬語、P. 96)
- 39：お降りありませんか。(ビジネスマン敬語、P. 110)
- 40：誘い合わせて。(ビジネスマン敬語、P. 118)
- 41：あなたの名前を書いてください。(ビジネスマン敬語、P. 56)
- 42：自分がやります。(ビジネスマン敬語、P. 66)
- 43：こちらにお名前様を頂戴したいのですが。(いつでもどこでも、P. 58)
- 44：手前どもでいたします。(ビジネスマン敬語、P. 86)
- 45：お名前さまをちょうだいさせていただいてもよろしいでしょうか。(簡単マスター、P. 43)
- 46：ご注文のほうは？スープのほう、下げますけど…。(簡単マスター、P. 82)
- 47：ほかにもたくさんのお祝電が参っております。(簡単マスター、P. 44)
- 48：明日で結構です。(簡単マスター、P. 83)

上の例は言葉の使い方としてどこかおかしいと相手に思わせる内容・言葉使いであり、また言葉の使い方としておかしいと相手に変な印象を与えかねない場合である。それぞれ適切な表現・話し方が要求される。例 38 は「係員の方以外は」を「係員以外の方は」に、例 39 は「降りる方(お降りの方)はいらっしゃいませんか」に、例 40 は「お誘い合わせの上」に、例 41 は「あなたの名前」を「お名前」に、例 42 は「自分」を「私」に、例 43 は「お名前様」を「お名前」に、「頂戴したいのですが」を「お書きください」に、例 44 は「手前ども」を「当社(当店)で」に直せば良いであろう。また例 44 の「手前ども」は下品な表現なので良くないという意見もある。例 45 は「お名前を拝借してもよろしいでしょうか」「お名前をお借

りしてもよろしいでしょうか」が適切であり、例46は「お下げいたしますが」が適切であり、例47は「参って」を「来て」に変えると良く、例48は「明日でもかまいませんが。」が適切であるとされる。

#### 4.3.4. 間違った言葉使い・敬語表現

- 例49：私が無くなったときには、散骨してください。(簡単マスター、P.38)  
 50：お買い求めのチケットの変更には、応じ致しかねます。(簡単マスター、P.42)  
 51：ご面倒さまです。乗車券拝見。(簡単マスター、P.100)  
 52：すぐにご連絡いたされます。(簡単マスター、P.129)  
 53：これは本木綿で、やわらかな風合いを持たせていただいているのですよ。(簡単マスター、P.178)  
 54：大変混雑しておりましてご迷惑します。(簡単マスター、P.181)

上の例は言葉そのものが間違っているとかおかしいという場合である。相手と話す時は言葉も正確でなければ話が通じないので敬語を使っても効果がないとか誤解が生じる可能性があるのである。例49は自分に対して「なくなった」を使うのは間違いであり、「散骨して」も変な表現であり「骨を撒いて」が適切であろう。例50は「お買い求め」ではなく「お買い上げ」が適切であり、「応じ致しかねます」ではなく「応じかねます」が適切であろう。例51は「ご面倒さまです」は変で「ご面倒ですが」「恐れ入りますが」などと言うべきであろう。また「乗車券拝見」では偉そうに聞こえるので「乗車券を拝見(いた)します」のように言えば良いであろう。例52は誰に対しての言葉なのか、どういう意味なのかよく分からない、謙譲語に尊敬語をつけてしまった敬語の誤用例のような変な表現であるが、「ご連絡いたします」と言うべきところを間違っって言ったと思われる場合である。例53は「持たせていただいている」よりも「持たせている」の方が良いであろう。例54は「ご迷惑します」と言えば客が迷惑をかけているような、または客のために迷惑を被っているかのような誤解を与える可能性があるので、「ご迷惑(を)おかけします」と言った方が良いであろう。

#### 4.3.5. 間違いが許容されつつある敬語・言葉使い

- 例55：妹におもちゃを買ってあげました。(簡単マスター、P.37)  
 56：○○のことを忍んであげてください。(簡単マスター、P.37)  
 57：金魚の水は時々変えてあげて、えさはあげすぎないようにしてください。(簡単マスター、P.37)

上の例は問題になっている「あげる」の使い方の例である。実用書の多くは間違いだとしていて、「あげる」の代わりに「やる」を使うべきであるとしている。しかし最近では上の例のような場合にもかなり広く「あげる」が使われるようになっているので、「あげる」を

使ってもかまわないという人も増えている<sup>8</sup>。

また「一させていただく」の使い方が間違っているとか、または過剰使用が問題だとする説もある<sup>9</sup>が、文化庁は「敬語の指針」の中で、「ア）相手側又は第三者の許可を受けて行い、イ）そのことで恩恵を受けるという事実や気持ちのある場合に使われる。ア）、イ）の条件を実際には満たしていなくても、満たしているかのように見立てて使う用法があり、それが「…（さ）せていただく」の使用域を広げている。その見立てをどの程度自然なものとして受け入れるかということが、その個人にとっての『…（さ）せていただく』に対する『許容度』を決めているのだと考えられる。」と述べて<sup>10</sup>、個人によって「一させていただく」の使用について許容度が違ってきているということを示している。

#### 4.4. 敬語使用時の態度・表情・行動について

次に言葉や話に関したことから離れて、話す時の話し手の態度や表情・行動の問題について考えてみよう。実用書では話す時の態度や表情・行動に対して注意している例もかなり見られる。敬語使用の問題で、敬語表現以外の問題としては、態度・表情・行動等の問題がある。

##### 4.4.1. 表情について

例 58：笑顔も同様に声の調子によって相手に伝わります。(敬語とマナーの本、P. 88)

59：にこやかに「手元の資料を調べますので、少々お待ちくださいませ」と言うのと、無表情で機械的に言うのとでは、言葉は同じでも受ける印象がまるで違うのです。(敬語とマナーが身につく本、P. 88)

60：ふくれっ面やだらしない姿勢で話をしていると、言葉は丁寧でも声の調子にその気持ちが表れて、相手に伝わってしまいます。(敬語とマナーが身につく本、P. 88)

上の例のようにいくら敬語を使い丁寧な言葉使いをしていても、表情が良くないとそれが声の調子などに現われ相手に悪い印象与えたりかえって不快な思いをさせたりする可能性がある。またその表情だけを見て相手は不快感を覚える可能性もある。

敬語を使う時の表情はつくろった表情ではなく内から出てくる自然の表情や、さらに笑顔が良いとされる。

##### 4.4.2. 態度について

例 61：(攻撃的な態度・口調で) どっちを先にやればいいですかッ！ (いつでもどこでも、P. 44)

62：(あるホテルの結婚式場付の美容室で事務的な態度で) 遅うございましたねえ。すぐにいたしますから。(いつでもどこでも、P. 48)

63：順番にやっていますから、ちょっとお待ちください！（いつでもどこでも、P.52）

64：（権力的な態度で）業者の方は入らないでください。（いつでもどこでも、P.56）

上の例のように話す時の態度が良くなくてはいくら丁寧な言葉を使っても相手に逆の変な印象を与えてしまったり、かえって悪い印象を与えてしまうことがある。例61のようにいくら敬語を使っても攻撃的な態度や言葉使いをすると相手に不愉快な印象を与える場合がある。例62のように言葉は丁寧であるが、態度や言葉使いが事務的であったり否定的であったりすると相手に不快感や皮肉な感じを与えるのでだめだとされる場合である。例63は自分は悪くないという態度で自分の都合ばかり言って相手に不快感や無視されたような感じを与える場合である。この場合「お待たせして申し訳ございません」と言えばいいであろう。例64のように権力的な態度や高圧的な態度であったりするとやはり相手に不快感を与えるようになる場合がある。この場合「職員以外の方はお入りにならないでください」と言えばいいであろう。

#### 4.4.3. 行動・行為について

例65：「では、宜しくお願い致します。」「はい、こちらこそ、ありがとうございます。」と朋子さんが言った途端に『ガチャン』とすごい音で切られてしまいました。（敬語とマナーが身につく本、P.94）

上の例では電話の通話において最後の行為でせっかくの丁寧な言葉も台無しになってしまうという場合である。人との対話をする時には最後まで丁寧な表現だけでなく相手に対して気を配る態度や行動なども必要であることが分かる。

#### 4.5. 相手を敬う、大事に思う心・気持ちについて

言葉や態度など表面に出てくるものと違って人間の内面のものである心や気持ち・考えの問題について考えてみよう。言葉というものは話す人の気持ちや心を表わすためのものである。敬語もそうであるし、敬語が最も心情的な言葉だという見解もあるのである<sup>11</sup>。ここでは敬語を話す時の言葉と心の関係について調べてみよう。心・気持ちと態度や表情を切り離して考えることは難しいかもしれないが、一応切り離して考えてみよう。

例66：ことばそのものは丁寧であっても気持ちが伴わないととても冷たいことばとなり相手との心理的距離を逆に広げてしまう。（ことば使いと敬語、P.21）

67：ありがたいという気持ちから敬語が生まれる。（正しいようで正しくない敬語、P.38）

68：どんなにすばらしい言葉が並べられていても、心のこもっていない敬語はすぐに分かるという。（敬語の使い方、P.116）

- 69：心がそうでないのに、言葉だけ整えてなんとか体裁良く話そうとした時には、心がまるだしになってしまいます。「ちゃんと時間通りに来てくださいなっ。…」「なんだこの女、えらそうに…」(美しいオフィスレディ、P. 65)

上のことから日本の社会では言葉と気持ちが一致するのが望ましいと考えられているのがわかる。全ての言葉使いや行動の根幹に心と気持ちがあり、心と気持ちが言葉や態度や行動に現われ、相手にも伝わり相手も微妙にそれを感じ取ると見ているのである。言葉がいくら丁寧でも気持ちが伴っていないと相手を感じると相手に反感を持たれる可能性があるのである。敬語の使い方では心から相手を敬い相手を思う気持ち、他人や物事に対する感謝の気持ちをもっとも必要・重要であるとなっている。

また、日本人の伝統的な心情として次のようなものがある<sup>12</sup>。

- ①慎みの気持ち、②あいまいさを尊ぶ—自他の対立を避ける、③自分をなくす

①の慎みの気持ちから静かに相手の言うことを聞くという態度が現われ、②のあいまいさを尊ぶ気持ちから相手の言うことをはっきり否定しないとか自他の対立を避けるようになり、③の自分をなくすという気持ちから他の人と一体となって物事を運ぼうとするようになる。これらの気持ちや態度などが言葉使いや敬語の使用と関係しており、規範やマナーとなっていると思われる。

しかし1990年代当時の若い世代は積極的にはっきりものを言い、個人主義的な心情を持っており、心情的には異邦人と言えるのかもしれないという意見もある<sup>13</sup>。彼らは日本の伝統的な考え方や心情などとは違った考え方や心情を持つようになったのではないかと思われる。敬語の揺れや敬語の誤用の問題は、人々の心情の変化によって敬語使用の基準などに対する意識が変化したためであると言えるだろう。

## 5. おわりに

本稿では、現代日本社会において人々の対話時の基準や規則について、特に敬語使用に関する色々な規則や注意点・問題点について考察した。敬語形式使用の基準や規則や注意点以外の敬語使用の対話時の基準や規則について、(1) TPO に応じた敬語使用・TPO に合う敬語使用、(2) 敬語使用にふさわしい話の内容・言葉、(3) 敬語使用にふさわしい話し方、(4) 敬語使用にふさわしい表情・態度・行動、(5) 敬語使用にふさわしい相手を敬う、大事に思う心・気持ちの有無、というように分けて考察した。

(1) の TPO に応じた敬語使用に関しては、やはり対話時においては非常に重要な基準や規則であると言えるだろう。敬語形式と TPO とが合わなかったり敬語の使用方法が間違ったりすると相手に誤解を与えたり不快感を感じさせたりという様々な問題が発生することが分かる。TPO に合った敬語を使用しなければならないという基準や規則はとても重



要であると言えるだろう。(2)の敬語使用にふさわしい話の内容・言葉についても、敬語を使用する場においては話の内容についても注意しなければならないことが分かる。せっかく敬語を使っても話の内容が悪ければ敬語の効果を薄めるだけでなく逆の悪い効果を与える可能性がある。(3)の敬語使用にふさわしい話し方の問題も、敬語使用に密接に関係していることが分かる。言葉や話の内容そのものが良く敬語も適切に使用されていても話し方が悪ければ、やはり敬語の効果を薄めてしまったり、時には良くない結果を生み出すことがある。(4)の敬語使用にふさわしい表情・態度・行動についてであるが、敬語を使用する時の態度や表情、また行動についても注意しなければならないことの一つである。敬語や言葉使いが良くても態度や表情・行動が悪ければ相手に良くない印象を与える可能性がある。(5)の敬語を使う時の心や気持ちの問題であるが、敬語形式と敬語を使う時の心や気持ちが一致していないと相手はそのことに違和感を感じたり悪い印象を持ったりするとか、相手にかえって不快な思いをさせる可能性がある。それで敬語使用の時は相手を敬う、大事に思う心・気持ちが必要だということになる。

このように対話時の全ての基準や規則が重要であるが、特に(3)(4)(5)の基準や規則は日本の社会においては伝統的にとても重要視され気をつけなければならないことの一つであるとされてきたのである。しかし最近の若者を中心にこの基準や規則に対する意識が崩れかけたり変化して来ているようである。そのことに対する考察は今後の課題にしたいと思う。こういった敬語使用時の基準や規則の問題は現代日本の社会的な問題と密接に結びついていると言えるであろう。

---

## 注

- 1 2024年現在購入できるものだけに絞った。
- 2 南不二男他(1977)『岩波講座日本語4 敬語』PP. 49-58
- 3 菊地康人(1997)『敬語(講談社学術文庫)』講談社PP. 30-58
- 4 菊地康人(1996)『敬語再入門』丸善P. 14、15
- 5 奥山益郎『正しいようで正しくない敬語』講談社P. 80
- 6 文化庁(2007)『敬語の指針』文化審議会答申PP. 33-35
- 7 新語時事用語辞典 TPOの部分 <http://www.breaking-news-words.com/2020/04/tpo.html?m=1>
- 8 文化庁(2007)『敬語の指針』では、「『あげる』は、旧来の規範からすれば誤用とされるものであるが、この語の謙譲語から美化語に向かう意味的な変化は既に進行し、定着しつつあると言ってよい。」としている。文化庁(2007)『敬語の指針』文化審議会答申P. 9
- 9 菊池康人(1996)『敬語再入門』丸善株式会社P. 147、148
- 10 文化庁(2007)『敬語の指針』文化審議会答申P. 40、41
- 11 奥山益郎(1994)『正しいようで正しくない敬語』講談社P. 130
- 12 奥山益郎(1994)『正しいようで正しくない敬語』講談社PP. 67-72
- 13 奥山益郎(1994)『正しいようで正しくない敬語』講談社P. 73

### 参考文献

- 井上史雄 (1999) 『敬語はこわくない』 講談社  
奥山益郎 (1994) 『正しいようで正しくない敬語』 講談社  
菊池康人 (1996) 『敬語再入門』 丸善  
菊池康人 (1997) 『敬語 (講談社学術文庫)』 講談社  
国立国語研究所 (1990) 『日本語教育指導参考書 17 敬語教育の基本問題 (上)』  
国立国語研究所 (1992) 『日本語教育指導参考書 18 敬語教育の基本問題 (下)』  
文化庁 (2007) 『敬語の指針』 文化審議会答申  
南不二男・林四郎編 (1974) 『敬語講座第 1 巻敬語の体系』 明治書院  
南不二男・林四郎編 (1973) 『敬語講座第 6 巻現代の敬語』 明治書院  
南不二男他 (1977) 『岩波講座日本語 4 敬語』 岩波書店  
矢橋昇 (1997) 『この一冊で敬語がわかる』 三笠書房

福本 達也 (t\_fukumoto@hokuyo.ac.jp)

## スポーツ専攻の大学生における痩せ願望と自尊感情 および摂食行動との関連性

山中 慎・葶毛 鈴奈\*・杉山 喜一\*  
北洋大学・\*北海道教育大学

The Desire to Lose Weight and Its Association with Self-Esteem  
and Eating Behavior of College Students Majoring in Sports

YAMANAKA Shin・UKE Suzuna\*・SUGIYAMA Kiichi\*  
Hokuyo University・\*Hokkaido University of Education

### Abstract

The purpose of this study was to determine how the desire to lose weight is related to self-esteem and eating behaviors, with a focus on gender differences among sports majors. As a result of the correlation analysis of each factor, many correlations were found between “self-esteem” and “desire to lose weight”, and between “desire to lose weight” and “eating behavior”. It is suggested that low self-esteem strengthens the desire to be thin and influences eating behavior. Comparison of gender differences in each factor revealed that female students tended to be more concerned about what others thought of them, and be more pessimistic about their body shape. Particularly they had a stronger desire to lose weight than male students. In addition, the desire to lose weight of female students was stronger than that of male students. These results indicated that they have dieting and/or overeating habits to a lesser extent.

## 1. はじめに

日本の痩せすぎの女性の割合を鈴木ら（2008）は、所得の高い国の中では異例の高さにあり、特に若い女性の「痩せ願望」がはっきりと現れているという。身長と体重を基に算出する Body Mass Index (BMI) は成人では 22.0 が標準値とされているが、厚生労働省 (2022) による令和 4 年度の調査報告によれば、20 代の女性の中では BMI 値 18.5 未満である低体重の人の割合が 19.1% を占め、その割合は過去 10 年間で横ばい傾向である。また、Takimoto et al (2004) は 15 歳から 29 歳までの女性においては、BMI 値が 17.0 未満という極端な痩せ型の女性が 4.2% を占めていたという報告もある。大学生を対象とした調査でも、菅原ら (1998) は、男子学生に比べ女子学生は「ダイエット経験率」や「痩せたいという意識」が高く、ダイエットの目的として「体型の維持」よりも「よりスリムになること」を重視しており、痩せることへの顕著なこだわりが示されている。一般に、菅原ら (1999) は、スリムな体型は「美しさ」や「かわいらしさ」の印象と結びついており、他者に与える自己のイメージや社会的評価を操作するための重要な要因となりうると評価する。馬場ら (1991) は、現代女性の瘦身行動について、流行りに合った（スリムな）体型になることで望ましくない自己像を補償し、自尊感情を高めようとする旨を指摘している。

近年、青年期女性を中心に神経性食欲不振症や神経性大食症といった摂食障害の数が増加している。また、摂食障害とは言えないがダイエットの目的のために食事を抜くなどの不適切な食行動を行う摂食障害予備群の数も増加している。このような食の問題を引き起こす重大な要因として、痩せ願望があると言われ、Gerner et al. (2005) は、友人から受け入れられていないと感じているものほど体型不満足感や痩せ願望が強く、抑制的摂食を行う傾向にあることを明らかにしている。このように過去の研究から自尊感情と痩せ願望および摂食行動にはそれぞれ関連があると考えられた。しかしながら、自尊感情と痩せ願望および摂食行動の 3 つの直接的な関連を研究したものは少ない。また女性だけや一般の学生を対象としたものは多いが、スポーツを専攻する学生を対象としたものはほとんどみられない。そこで本研究では、スポーツ専攻の学生を対象に痩せ願望と自尊感情および摂食行動の関連について着目し、どのような関連性があるかを明らかにすることを目的とした。

## 2. 方法

### 2.1. 対象

2014～2018 年度の H 大学スポーツ文化専攻入学者で、測定と調査に協力の得られた学生 104 名 (男子 71 名、女子 33 名) を対象とした。なお、対象者に対して調査の目的と個人情報厳守することを説明し、同意の得られた者について実施した。

### 2.2. 調査期間

平成 30 年 7 月上旬～8 月上旬までのデータを基にした。

## 2.3. 調査内容

本研究では、質問紙における自記式無記名の調査を実施した。

### 1) 自尊感情

Rosenberg (1965) が作成し、松下 (1969) が翻訳した自尊的感情尺度を5項目、個人の体型に関する自己評価と対応するものとして、田崎 (2004) が作成した精神的自己評価尺度を5項目、菅原 (1983) が作成した自意識尺度 (self-consciousness scale) 日本語版を9項目用いた。

### 2) 痩せ願望に関する項目

田崎 (2004) が個人の体型に関する自己評価を測定する目的で作成した身体的自己評価尺度を11項目用いた。

### 3) 摂食行動に関する項目

新里ら (1986) の邦訳版EAT-20、ダイエット行動尺度および Binge Eating 尺度から21項目用いた。なお、(2)~(4)の質問項目の回答形式は“全く当てはまらない”(1点)“当てはまらない”(2点)“どちらでもない”(3点)“当てはまる”(4点)“とても当てはまる”(5点)までの5件法である。

## 2.4. 分析方法

### 1) 自尊感情・痩せ願望・摂食行動に関する因子構造

「自尊感情」に関する質問19項目、「痩せ願望」に関する質問11項目、「摂食行動」に関する質問21項目について因子を明らかにするため、それぞれ因子分析を行った。因子分析については、まず主因子法によって各項目間の相関行列に対して主因子解を求めた。また得られた固有値に基づいて因子を抽出した。さらにコバリミン法によって斜交解を求めて、因子の解釈を行った。なお各因子における内的整合性信頼性を求めるために $\alpha$ 係数を算出した。各分析項目ならびに分析方法については以下の通りである。

### 2) 各因子間の関係性

抽出された因子の質問項目より因子得点を求め、相関分析を用いて因子間の関係性を明らかにした。

なお、各統計処理における有意水準は5%、有意傾向を10%とした。

## 3. 結果

### 3.1. 「自尊感情」「痩せ願望」「摂食行動」の各因子構造

「自尊感情」「痩せ願望」「摂食行動」に関する質問について因子分析を行った結果を以下の表1-1、1-2、1-3に示した。また、内的整合性係数についても以下の表に記載した。

#### 1) 自尊感情の因子構造

「自尊感情」についての因子の解釈として、第1因子は「自分が他人にどう思われているのか気になる」「自分の発言を他人がどう受け取ったか気になる」など自己について他者は

どのように思っているのか、他者から受け入れられているのかといった客観的な評価を行う内容の項目に高い負荷量を示したことから「他者評価」とした。第2因子は「私は自分が価値のある人間だと思う」「私は自信をもって自己主張ができると思う」など他者からどのように思われているかに関係なく自己についてどのように評価しているかという内容であったことから「自己評価」とした。第3因子は「初対面の人に、自分の印象を悪くしないように気づかう」など自分をよりよく見せようとする内容であったことから「虚栄心」とした。また、第1、17項目については因子負荷量の値が低かったため除外した。

表 1-1 「自尊感情」に関する質問項目の因子分析結果

設問項目	因子負荷量			α 係数	固有値	寄与率
	因子 1	因子 2	因子 3			
4 もう少し自分を尊敬できたらと思う	0.54	-0.04	-0.13	0.82	4.89	25.73%
11 自分が他人にどう思われているのか気になる	0.84	0.03	0.01			
12 自分の発言を他人がどう受け取ったか気になる	0.74	0.00	0.11			
13 自分の容姿を気にするほうだ	0.53	-0.07	0.31			
14 自分についてのうわさに関心がある	0.45	-0.09	0.34			
15 人前で何かする時、自分のしぐさや姿が気になる	0.54	-0.15	0.23			
2 私には得意に思うことがない	0.34	-0.43	-0.18	0.83	3.30	17.39%
3 私は自分が価値のある人間だと思う	-0.04	0.69	-0.20			
5 私は自分に対して、前向きな態度をとっている	-0.36	0.46	0.07			
6 集団の中にも孤独だと感じる人が多い	0.26	-0.48	0.02			
7 私の意見はみんなから尊重されていると思う	0.19	0.60	-0.21			
8 私は自分自身を意志の強い人間だと思っている	0.01	0.64	-0.04			
9 私は自信をもって自己主張ができると思う	-0.13	0.75	0.08			
10 自分の個性を活かそうと努めている	-0.02	0.58	0.28			
16 どんな時にでも自分の考えをはっきりさせておきたい	0.04	0.58	0.13			
18 初対面の人に、自分の印象を悪くしないように気づかう	0.17	0.02	0.45			
19 人の目に映る自分の姿に目を配る	0.14	-0.10	0.84			
1 私は自分に満足している	-0.29	0.33	0.01			
17 他人を見るように自分を眺めてみることもある	-0.08	0.05	0.34			

## 2) 痩せ願望の因子構造

「痩せ願望」の因子の解釈として、第1因子は「自分の体重について考えると、不快な気分になる」「私の体型は私をイライラさせる」など自分の体型を悲観しているような項目であったことから「体型悲観」とした。第2因子は、「もっと細かったらいいのに」など痩せたいという項目に-の負荷量が出ていることなどから「非痩せ願望」とした。第28項目については因子負荷量の値が低かったため除外した。

## 3) 摂食行動の因子構造

「摂食行動」に関する因子の解釈として、第1因子は「食事を抜かす」「痩せるために、一定期間、特定の食品だけを食べ続ける」など食事の習慣やダイエット方法を示す内容で

表 1-2 「痩せ願望」に関する質問項目の因子分析結果

設問項目	因子負荷量		α 係数	固有値	寄与率
	因子 1	因子 2			
22 自分の体重について考えると、不快な気分になる	0.71	-0.42	0.83	4.72	42.88%
23 今の体型のせいで幸せになれないのだと思う	0.84	-0.14			
24 私の体型は私をイライラさせる	0.91	-0.17			
25 自分の外見について、できれば変えたいと思うところがある	0.46	-0.41			
27 ほかの人は私の体型について笑っていると思う	0.54	-0.01			
20 今日よりも痩せられたら自分に自信がもてると思う	0.45	-0.79	0.77	1.66	15.11%
21 自分ももっと細かったらいいのと思う	0.39	-0.80			
26 ほとんどの人は私より痩せていると思う	0.30	-0.49			
29 自分はずっと太ってればいいのと思う	0.02	0.55			
30 私と同じ年代の人達は、私の体型が好きだと思う	0.02	0.50			
28 私は鏡を見たときの自分の見え方が好きだ	-0.09	0.26			

表 1-3 「摂食行動」に関する質問項目の因子分析結果

設問項目	因子負荷量		α 係数	固有値	寄与率
	因子 1	因子 2			
34 他の人の前では普通に食べて、一人になると食べ過ぎてしまう	0.48	-0.48	0.90	7.62	36.29%
39 甘いものやカロリーの高いものを食べるのを避ける	0.40	0.21			
40 ゆっくり食べるようにする	0.32	0.08			
41 夕食後は何も食べない	0.35	0.05			
42 太るので、勧められた食べ物や飲み物を断る	0.63	-0.07			
43 食事のカロリーを制限する	0.85	-0.05			
44 何を食べるかを考えるとき、体重を考慮に入れる	0.74	-0.07			
45 夕食を減らす	0.80	-0.22			
46 「食べ過ぎてはいけない」と思い、食事や間食を少なめにする	0.75	-0.13			
47 短期間で体重を大幅に減らすために、特別なダイエット方法に従う	0.73	-0.32			
48 食事を抜かす	0.43	-0.48			
49 カロリー計算をした食事をする	0.74	-0.08	0.82	3.18	15.15%
50 痩せるために、一定期間、特定の食品だけを食べ続ける	0.75	-0.28			
51 低カロリー食品ばかり食べる	0.79	-0.25			
31 たくさん食べものを食べて、やめられないと感ずることがある	-0.09	-0.67			
32 私の食事のパターンは普通の人と違う	0.04	-0.50			
33 たくさん食べすぎることに悩む	0.26	-0.68			
35 食べた後は非常に後味の悪い思いがする	0.39	-0.56			
36 気分を害したときに食べてしまう	0.24	-0.75	-0.07	-0.73	
37 お腹がすいていない時でもたくさん食べる	-0.07	-0.73			
38 気持ち悪くなるまで食べたことがある	-0.14	-0.43			

あったことから「食習慣」とした。第2因子は「お腹がすいていない時でもたくさん食べる」「たくさん食べすぎることに悩む」など食べ物を食べすぎることについての内容で

あったことから「過食」とした。

### 3.2. 各因子間の相関関係

#### 3.2.1. 全体における各因子間の相関関係

##### 1) 「自尊感情」に関する因子

「自尊感情」の他者評価、自己評価、虚栄心の3つの因子について、「痩せ願望」の体型悲観因子、非痩せ願望因子および「摂食行動」の食習慣因子、過食因子それぞれに対して、各因子項目得点の合計をそれら因子得点とした。さらにこれら因子得点どうし相互の相関分析を実施した結果を以下の表 2-1 に示した分析の結果、「自尊感情」の他者評価因子は「痩せ願望」の体型悲観因子、非痩せ願望因子、ならびに「摂食行動」の過食因子と有意な相関関係にあることが明らかとなった。自己評価因子は「痩せ願望」の体型悲観因子および非痩せ願望因子との間で、さらに「摂食行動」の過食因子と有意な相関関係が認められた。また、虚栄心因子は「痩せ願望」の非痩せ願望因子とのみ有意な相関関係が認められた。

表 2-1 「自尊感情」相関分析

		痩せ願望		摂食行動	
		体型悲観	非痩せ願望	食習慣	過食
他者評価	相関係数	0.29	-0.30	0.14	-0.29
	判定	*	*	N.S.	*
自己評価	相関係数	-0.35	0.26	-0.12	0.30
	判定	*	*	N.S.	*
虚栄心	相関係数	0.06	-0.20	0.15	-0.10
	判定	N.S.	*	N.S.	N.S.

\* ( $p < 0.05$ ) N.S. (相関なし)

##### 2) 「痩せ願望」に関する因子

体型悲観、非痩せ願望2つについて、他の因子と相関分析をした結果を以下の表 2-2 に示した。分析の結果、体型悲観は「自尊感情」に関する2因子、「摂食行動」の2因子すべて

表 2-2 「痩せ願望」相関分析

		自尊感情			摂食行動	
		他者評価	自己評価	虚栄心	食習慣	過食
体型悲観	相関係数	0.29	-0.35	0.06	0.52	-0.47
	判定	*	*	N.S.	*	*
非痩せ願望	相関係数	-0.30	0.26	-0.20	-0.48	0.45
	判定	*	*	*	*	*

\* ( $p < 0.05$ ) N.S. (相関なし)



と有意な相関関係にあることが明らかとなった。また、非痩せ願望は「自尊感情」に関する3因子すべて、「摂食行動」の2因子すべてと有意な相関関係にあることが認められた。

3) 「摂食行動」に関する因子

「食習慣」「過食」の2つについて、他の因子と相関分析をした結果を以下の表 2-3 に示した。表 2-3 より「食習慣」は「痩せ願望」の2因子すべてと有意な相関関係にあることが明らかとなったが「自尊感情」で構成される3つの因子とは相関がみられなかった。また、「過食」は「自尊感情」2因子、「痩せ願望」2因子すべてと有意な相関関係が認められた。この結果より、「自尊感情」、「痩せ願望」「摂食行動」の各因子相互の相関関係を図1に示した。

表 2-3 「摂食行動」相関分析

		自尊感情			痩せ願望	
		他者評価	自己評価	虚栄心	体型悲観	非痩せ願望
食習慣	相関係数	0.14	-0.12	0.15	0.52	-0.48
	判定	N.S.	N.S.	N.S.	*	*
過食	相関係数	-0.29	0.30	-0.10	-0.47	0.45
	判定	*	*	N.S.	*	*

\* (p < 0.05) N.S. (相関なし)

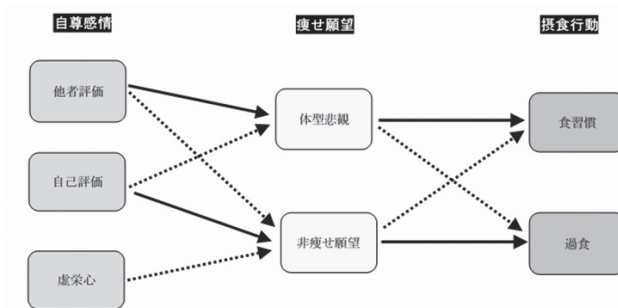


図1 各因子間の相関関係 (実線は有意な正の相関 破線は有意な負の相関)

4. 考察

「自尊感情」についての因子として、「他者評価」「自己評価」「虚栄心」とそれ以外の因子との相関関係について分析した結果、「他者評価」は「痩せ願望」の因子「体型悲観」「非痩せ願望」、「摂食行動」の因子「過食」と有意な相関関係にあることが明らかとなった。「自己評価」は「痩せ願望」の2因子、「摂食行動」の「過食」と有意な相関関係にあることが明らかとなった。さらに「虚栄心」は、「痩せ願望」の1因子と有意な相関関係にあることが示唆された。すべての因子に「非痩せ願望」が有意な相関関係にあることや内的整合性が低かつ

た「虚栄心」以外の「自尊感情」に関する因子すべてと「体型悲観」が有意な相関関係にあることから「他者評価」について、他人からの見られ方を意識している傾向がみられ、評価が高く、「自己評価」についての評価が低い学生ほど自分の体型に満足してなく、自分の体型を悲観的にとらえ、体型を変えたいという願望が強いことが考えられた。Gerner et al. (2005) は友人から受け入れられていないと感じているものほど体型不満足感や痩せ願望が強く、抑制的摂食を行うことが示されている。また、McCabe et al. (2001) や Lieberman et al. (2005) の研究においても Gerner et al. (2005) と同様の体型不満足感から抑制的摂食に至る結果が得られており、本研究もこれを支持する結果となった。

次に、「痩せ願望」に関する因子として、「体型悲観」「非痩せ願望」とそれ以外の因子との相関関係について分析した。「体型悲観」は、自分の体型に満足していない傾向が強く、「自尊感情」に関する因子「他者評価」「自己評価」「摂食行動」に関する因子「食習慣」「過食」と有意な相関関係にあることが示唆された。「非痩せ願望」は「自尊感情」「摂食行動」に関するすべての因子と有意な相関関係にあることが明らかとなった。2つの因子に共通して、「他者評価」「自己評価」「食習慣」「過食」が有意な相関関係にあることから、「体型悲観」の評価が高く、「非痩せ願望」の評価が低い学生ほど他者からの評価を気にする傾向にあり、自己評価が低く、抑制的な摂食行動であることが推察できる。次に、「摂食行動」に関する因子として、「食習慣」「過食」とそれぞれの因子との相関関係について分析した。「食習慣」は「自尊感情」の3因子すべてと相関関係はなく、「痩せ願望」に関する因子「体型悲観」と「非痩せ願望」と有意な相関関係があることが示唆された。「過食」は「自尊感情」に関する2因子、「痩せ願望」に関する2因子すべてと有意な相関関係にあることが明らかとなった。2つの因子に共通して有意な相関関係に認められたものは「痩せ願望」に関する2つの因子であったことから、「自尊感情」と「痩せ願望」、「痩せ願望」と「摂食行動」に相関関係があると考察した。本研究からは「自尊感情」と「摂食行動」の直接的な相関関係があるとは言えないが、低い「自尊感情」が「痩せ願望」を強め、「摂食行動」に影響を及ぼすという関係性があることが示唆された。浦上ら (2009) の研究から大学生の瘦身願望および摂食障害の影響を与えている要因として、他者からの承認欲求を取り上げ検討し、称賛獲得欲求あるいは拒否回避欲求などの承認欲求から瘦身欲求が生じていることが明らかになっている。また、O'Dea et al. (2000) は摂食障害の予防という観点から考えると、自尊感情を高めるような介入を行うことが体型不満足感や痩せ願望を低め、食の問題行動を抑制することにもつながると述べている。今回の研究においても、自尊感情をコントロールすることで、痩せ願望における摂食行動抑制との関連性に注目できた。今後は男女差にも注目して分析を進めたい。

## 5. まとめ

本研究では、スポーツ専攻の学生を対象に痩せ願望と自尊感情および摂食行動の関連性について着目し、どのような関連性があるかを明らかにすることを目的とした。本研究で得

られた結果は以下の通りである。

1. 質問項目「自尊感情」に関して、「他者評価」「自己評価」「虚栄心」の3因子が抽出された。だが、「虚栄心」に関しては内的整合性が低かったため検討する必要がある。「痩せ願望」について「体型悲観」「非痩せ願望」の2因子が抽出された。さらに「摂食行動」に関して「食習慣」「過食」の2因子が抽出された。2. 各因子の相関分析の結果、「自尊感情」と「痩せ願望」、「痩せ願望」と「摂食行動」に相関関係が多くみられたことから、スポーツ専攻の大学生を対象にした質問調査からは、低い自尊感情を抱えている学生は、痩せ願望を強め、摂食行動に影響を与えることが示唆された。

---

### 参考文献・引用文献

- 浦上涼子・小島弥生・沢宮裕子・坂野雄二 (2009) 「男子青年における瘦身願望についての研究」教育心理研究 57 pp. 263-273
- O'Dea, J.A.・Abraham, S (2000) 「Improving the body image, and behaviors of young male and female adolescents : A new educational approach that focus on self-esteem.」International Journal of Eating Disorders 28 pp. 43-57
- Gerner,B・Willson,P.H. (2005) 「The relationship between friendship factors and adolescent girl's body image concern, body dissatisfaction, and restrained eating.」Journal of Eating Disorders 37 pp. 313-320
- 菅原健介 (1983) 「自意識尺度 (self-consciousness scale) 日本語版作成の試み」心理学研究第 55 巻第 3 号 pp. 184-188
- 菅原健介・馬場安希 (1998) 「現代青年の瘦身願望についての研究—男性と女性の瘦身願望の違い—」日本心理学会第 62 回大会発表論文集
- Takimoto, H・Yosiike, N・Kaneda, F・Yoshita, K (2004) 「Thinness among young Japanese women.」American Journal of Public Health 94 pp. 1592-1595
- 田崎慎治・今田純雄 (2004) 「大学生男女における自尊感情と瘦身願望の関係」広島修大論集第 45 巻第 1 号 (人文) pp. 17-37
- 新里里春・玉井一 (1986) 「邦訳版食行動調査票および、その妥当性新体制の研究」
- 松下覚 (1969) 「self-image の研究 — self-esteem scale の作成 —」第 11 回総会発表論文集 pp. 280-281
- McCabe・Marita・Ricciardelli・Lina (2001) 「Parent, peer and media influence on body image and strategies to both increase and decrease body size among adolescent boys and girls」Adolescence, Vol. 36 No. 142 pp. 225-240
- 参考 URL
- [https://www.mhlw.go.jp/stf/newpage\\_42694.html](https://www.mhlw.go.jp/stf/newpage_42694.html) 厚生労働省 (2022) 「令和 4 年度国民健康・栄養調査報告」

山中 慎 (s\_yamanaka@hokuyo.ac.jp)



Design and Demographic Factors in Online Mindfulness Interventions  
— Exploring Cultural Adaptations in Japan —

LI Sheng  
Ritsumeikan University

オンラインマインドフルネス介入におけるデザイン  
およびデモグラフィック要因

— 日本における文化的適応の探求 —

李 晟  
立命館大学

### 要旨

本研究は、日本の大学生を対象に、オンラインマインドフルネス介入におけるマインドフルネス向上に影響を与えるデザインおよびデモグラフィック要因を明らかにすることを目的とする。回帰モデルを用いた分析を通じて、介入デザインに関連する要因や参加者の人口学的特性が介入効果にどのように作用するかを検討した。その結果、独身であること、介入中の身体的不快感、インストラクターとの相互作用、既存の瞑想経験が介入効果を抑制する可能性が示唆された。さらに、日本特有の文化的価値観や伝統的な瞑想文化が介入の適応性と効果に影響を及ぼすことが明らかになった。本研究は、オンラインマインドフルネス介入を設計する際に、文化的背景や参加者の多様性を考慮する必要性を強調している。今後の研究では、本研究で特定された要因を反映し、文化的適応性を備えた介入デザインの開発が期待される。

## **1. Background**

### **1.1. Mindfulness Interventions**

In psychology domain, mindfulness skills are cultivated and refined through consistent practice. Interventions designed around the application of these skills are referred to as Mindfulness Interventions (MIs). MIs have become a prominent tool in addressing psychological and physical challenges. In the past decade, Randomized Controlled Trials (RCTs) evaluating mindfulness interventions have been conducted in diverse contexts, extending beyond medical and clinical environments to include schools, workplaces, and other settings. These interventions now span a wide age range, from adolescents to older adults. However, the globalization of mindfulness practices and interventions has introduced a range of challenges.

### **1.2. Dialogue Between Science and Buddhism Through Mindfulness**

Mindfulness (*sati*), originating in Buddhism, is deeply embedded in its ethical and spiritual framework. Traditionally, mindfulness was a practice aimed at achieving liberation through awareness, compassion, and equanimity (Bodhi, 2011). As it transitioned into the scientific realm, popularized through interventions like Mindfulness-Based Stress Reduction (MBSR), it became a widely accessible tool for stress management and mental health. However, this secular adaptation often strips mindfulness of its ethical and cultural dimensions, sparking criticism from both scientific and Buddhist communities (Kabat-Zinn, 2003; Monteiro et al., 2015).

The ensuing dialogue between science and Buddhism has highlighted mindfulness's inherent diversity. Scientific approaches, such as Randomized Controlled Trials (RCTs) and neuroscience, focus on outcomes like cognitive improvement and emotional regulation, often neglecting its philosophical roots (Weber, 2017). In contrast, Buddhist perspectives emphasize its transformative purpose, grounded in ethical and cultural contexts (Thera, 1994; Sun, 2014).

This dialogue underscores the importance of acknowledging mindfulness's Buddhist origins, particularly when implementing mindfulness interventions in culturally Buddhist societies. Recognizing local understandings of Buddhism can enhance the depth and relevance of these interventions. As mindfulness continues to evolve, its successful application requires balancing universal accessibility with cultural sensitivity, ensuring that its roots and ethical foundations are not lost in translation.

### **1.3. Mindfulness in Japanese Context**

Mindfulness in Japan has evolved uniquely, deeply influenced by Zen Buddhism and its integration into daily practices and therapeutic models. Central to Japanese culture, Zen Buddhism emphasizes present-moment awareness and the interconnection between mindfulness and ethical living. This has given rise to indigenous therapeutic practices such as Morita Therapy

(Morita, 2004) and Naikan Therapy (Miki, Maeshiro, & Takemoto, 2007), which align with Buddhist principles of acceptance and reflection while adapting them to modern psychological needs.

Morita Therapy, developed by Shoma Morita in the early 20th century, emphasizes the acceptance of one's feelings and actions within the natural flow of life (*arugamama*). Some Japanese mindfulness research use *arugamama* to define mindfulness (Ito, 2019). This approach resonates with Zen ideals of mindfulness by promoting an understanding of emotional states without resistance or attachment, fostering a harmony between mind and environment (Kirmayer, 2015). Similarly, Naikan Therapy encourages individuals to reflect on their relationships and gratitude toward others, drawing from Pure Land Buddhist concepts of compassion and interdependence. These practices highlight the cultural specificity of mindfulness in Japan while demonstrating its universal applicability across diverse social and psychological contexts (Ozawa-de Silva, 2014).

In the Japanese context, mindfulness could be more effectively integrated into daily routines and interpersonal activities, aligning with cultural values of coexistence and collective well-being (Ito, 2019; Tani, 2020). Despite these opportunities, current research in Japan heavily relies on Western frameworks, often without re-evaluating their applicability to local cultural contexts. This underscores the need for culturally sensitive mindfulness interventions that incorporate traditional Japanese values while addressing the demands of contemporary society.

#### **1.4. Online Mindfulness Intervention and Challenges**

The rapid development of digital technologies has facilitated the rise of online mindfulness interventions, offering new opportunities for accessibility and scalability. These programs, often delivered via smartphones or internet platforms, provide cost-effective and flexible solutions, particularly for younger populations and those in remote areas (Boettcher et al., 2014; Wang et al., 2003). Online interventions also address logistical barriers, such as time constraints and geographic limitations, making them an attractive alternative to in-person sessions.

However, the online format introduces unique challenges, particularly the lack of interaction with trained mindfulness instructors. In traditional mindfulness interventions, real-time guidance and reflective dialogue with instructors are key components that help participants navigate their experiences and deepen their practice (Creswell, 2017). The absence of these elements in many self-directed online programs may limit their effectiveness, especially in collectivist cultures like Japan, where interpersonal connection is a central aspect of learning (Joskovich, 2023).

Another critical issue in online mindfulness interventions is variability in participant engagement. Factors such as daily practice time and the perceived relevance of mindfulness techniques significantly influence outcomes but are rarely investigated as mediating variables in

digital formats (Creswell, 2017). For example, participants who lack self-discipline or motivation may struggle to engage consistently with online interventions, resulting in limited benefits.

To address these challenges, research should focus on not only the outcomes of interventions, but also the feedback of interventions. Additionally, culturally sensitive designs that incorporate traditional Japanese practices and values could make online interventions more relevant and effective for Japanese populations.

## **2. Aims**

This study aims to elucidate the design of interventions and related factors that contribute to the enhancement and maintenance of mindfulness through online mindfulness interventions. Specifically, the study hypothesizes that demographic factors influence the improvement of mindfulness scores.

## **3. Methods**

### **3.1. Participants**

The participants consisted of 38 students (30 females, mean age = 35.29) enrolled in Japanese universities, including both undergraduate and graduate students (working professionals attending graduate programs were also included).

### **3.2. Study Design**

This study complements another randomized controlled trial with a waiting list design that examines the effects of an online mindfulness intervention. Although this is not the aim of this research, this paper shows the whole intervention design to avoid misunderstanding.

After the baseline measurement, the 38 participants were randomly assigned to two groups: the intervention group (Group A) and the control group (Group B), with 19 participants in each group. Both groups underwent pre-, post-, and follow-up measurements.

After recruitment and obtaining informed consent, all 38 participants completed the pre-test (also considered as the baseline measurement) at Time 0. Participants were then randomized into Group A (intervention group) and Group B (control group) with 19 participants each.

Group A underwent a 16-day intervention, and upon its completion (Time 1), they completed a post-test. On the same day (Time 1), Group B also completed the post-test. Subsequently, Group B underwent a 16-day intervention (identical in structure and content to the intervention experienced by Group A). Upon completion of Group B's intervention (Time 2), the group underwent a post-test, while Group A completed a follow-up test on the same day (Time 2). Finally, after a 16-day follow-up period (Time 3), Group B completed a follow-up test.



### 3.3. Randomization Procedure

One week before the pre-test (Time 0), participant schedules were collected using Google Forms® to adjust intervention dates. After completing the pre-test at Time 0, participants were randomly assigned to groups using Excel. Following randomization, participants were informed of their group assignment and intervention schedules via email. Participants in Groups A and B participated in their respective interventions according to their assigned schedules.

### 3.4. Dropouts

Participant attrition occurred over the course of the study. As shown in Figure 1. Seven participants (five from the intervention group and two from the control group) did not participate in any intervention sessions after pre-test due to scheduling conflicts. Thus, they were not classified as dropouts. Finally, 17 participants, with 9 participants of Group A and 8 participants of Group B completed the intervention and follow-up test.

### 3.5. Measurements

Measurements were conducted four times at Time 0, Time 1, Time 2, and Time 3. Group A participated in three measurements, while Group B participated in four. In addition to the Pre-test for all at Time 0, both Group A and Group B completed their respective Post-tests immediately after the conclusion of their interventions (A's Post-test and B's Post-test). Furthermore, follow-up measurements were conducted 16 days after the completion of each intervention (A's F.U. test and B's F.U. test).

### 3.6. Questionnaires

All measurements in this study were conducted using online questionnaires via Google Forms®. Participants received the Google Forms® link via email, were instructed to click on the link, and completed the questionnaire on the response page. The study's outline was communicated to participants, and permissions for all measurement scales were obtained from the original authors prior to implementation. The questionnaires used only for this study aims are listed as follows:

**Demographic Variables:** A face sheet for measuring independent variables, consisting of seven questions regarding basic information such as mindfulness experience, employment status, and marital status.

**Well-being Measurement:** The Japanese version of the Hedonic and Eudaimonic Motives for Activities Scale (J-HEMA) (Asano, Igarashi, & Tsukamoto, 2014) is an 11-item Likert scale that is sufficiently reliable ( $\alpha > .80$ ) for examining the characteristics of Eastern cultures and is considered appropriate for measuring wellbeing in current study due to its ability to capture both

subjective and psychological wellbeing.

**Mindfulness Measurement:** The Japanese version of the Mindful Attention Awareness Scale (J-MAAS) (Fujino, Kajimura, & Nomura, 2015) using a six-point scale. The MAAS was employed to measure participants' awareness and attention to ongoing experiences and assess their mindfulness levels. The MAAS consists of 15 Likert-type items and has demonstrated sufficient reliability ( $\alpha = .93$ ). As a scale focused on the degree of awareness and attention itself, rather than personality traits, attitudes, or effects arising from these qualities, it provides a balanced approach to capturing mindfulness compared to other mindfulness scales. Furthermore, its association with well-being has been confirmed, making it suitable for measuring the effects of the online mindfulness intervention in this study.

**Feedback Scale:** A 12-item scale measuring potential factors affecting mindfulness (e.g., satisfaction with the intervention course) along with four open-ended items.

### 3.7. Intervention Content

The intervention period lasted for 16 days, consisting of six live sessions and daily homework assignments. The instructor is a certified Vipassana meditation teacher who has been teaching meditation practice for 32 years and has completed advanced courses at Maharshi Meditation Center in Myanmar.

#### Live Sessions

The live sessions were conducted using the online video communication platform Zoom. The content of the sessions was based on the tradition of Mahasi Sayadaw, with a primary focus on Vipassana meditation. The techniques included in the six sessions were as follows:

Samatha meditation to enhance concentration, Vipassana meditation to enhance awareness, Body scan meditation, Self-compassion meditation, Mindfulness walking, Mindfulness eating.

Each session lasted 45 minutes, with a total of 14 sessions conducted. A 15-minute break was provided between sessions to reduce cognitive load. The schedule and distribution of the sessions were evenly spread over two weeks.

#### Homework

Participants were required to engage in daily mindfulness practice for at least 10 minutes, revisiting techniques learned during the live sessions. Progress was recorded in a mindfulness journal, which was submitted through Google Forms. Instructors monitored the journals to track participants' progress and adjust the session content as needed.

## 4. Results

### 4.1. Data Analysis

All analyses were conducted using R version 4.2.0 and G\*Power. 17 participants who completed all measurements, including the follow-up test, were included in the analysis. Since the effect of the intervention has been examined in a separate study, the current analysis is confined to addressing the specific research aims.

#### 4.1.1. Participant Characteristics

The characteristics of participants who completed the intervention are presented in Table 1. Excluding participants who dropped out during the intervention or follow-up period, 17 individuals were analyzed. The average age of participants was 30.76 years (range: 19–56 years), with more than 82.35% of participants in both the intervention and control groups being female.

Eight participants dropped out of the study, and half had prior meditation or contemplative experience.

Missing data were managed through listwise deletion for complete case analysis, participants who finished intervention and answered all the questionnaires at 4 test times are included for analysis data.

#### 4.1.2. Factors in Feedback Variables

Table 1. Feedback Variables (FU)

Variable	Levels	Value (%)
<b>Practice volume</b>	suitable	76.47
	too much	17.65
	too little	5.88
<b>Session volume</b>	suitable	70.59
	too much	23.53
	too little	5.88
<b>Discomfort during intervention</b>	Yes	23.53
<b>Predicted commitment to future practice</b>	Yes	88.24
<b>Feedback for instructor</b>	Yes	41.18
<b>Feedback for course</b>	Yes	41.18
<b>Shared most impactful experience during intervention</b>	Yes	64.71

*Note.* FU: Fllow Up

Feedback from participants who completed the intervention is summarized in Table 2.

Participants were asked two questions regarding their practice volume and session volume, each rated on a 3-level scale. Regarding the amount of practice assigned, 76.47% considered it suitable, 17.65% thought it was too high, and 5.88% felt it was too low. Similarly, 70.59% found the session amount appropriate, 23.53% considered it excessive, and 5.88% considered it insufficient. During the intervention, 23.53% of participants reported experiencing discomfort. A high percentage (88.24%) expressed a commitment to continuing mindfulness practice in their daily lives. Feedback was provided by 41.18% of the participants for both the teacher and the course, if participant provides feedback comments at the follow-up test, counted as “Yes”, otherwise “No”. Additionally, 64.71% of the participants shared the most impactful experiences during the intervention.

Table 2. Sample Characteristics

Variable	Levels	FU ( <i>n</i> = 17) Value (%)	Dropout ( <i>n</i> = 8) Value (%)
<b>Group</b>	Group A	52.94	0.22
<b>Sex</b>	Female	82.35	75.00
<b>Age</b>	Mean (Range)	30.76 (19–56)	27.50 (21–39)
<b>Country</b>	Japan	64.71	87.50
	China	29.41	12.50
	Thailand	5.88	0.00
<b>Marital status</b>	Singel	64.71	75.00
	Married, living with partner, or in intimate relationship	29.41	12.50
	Separated, divorced,	5.88	12.50
<b>Employment status</b>	Full-time	29.41	12.50
	Part-time	23.53	62.50
	Not employed	47.06	25.00
<b>Prior meditation or contemplative experience</b>	Yes	23.53	50.00

Note. FU: Fllow Up

#### 4.1.3. Predictive Effects on Mindfulness

To analyze the predictive effects of mindfulness, the difference in mindfulness scores before and after the intervention was used as the dependent variable. A total of 27 independent variables, including participants’ demographic variables captured by the scale and factors related to the intervention design that potentially influenced mindfulness (converted from qualitative variables into dummy variables): 2 intervention design varibales: Time and Group. 6 Demographic

Variables: Sex, Age, Nation, Job, Marital Status, and Meditation Experience (whether participants had prior experience related to mindfulness or meditation). 15 Non-Demographic Variables: Well-Being, Meditation Exercise (time spent with meditation practices during the course), Skill Improvement (perceived improvement in mindfulness-related skills compared to pre-course levels on a 10-point scale), Skill Retention (expected changes in mindfulness skills two weeks after follow up test on a 10-point scale), Interaction with the Instructor (degree of engagement that participants felt with the course instructor during live sessions on a 10-point scale), Actual Practice Time (cumulative meditation time during the course, in minutes), Longest Meditation Duration (participants with experience related to mindfulness or meditation, in minutes), Practice Volume Feedback (participants' opinions on the assigned practice amount: suitable, excessive, or insufficient), Session Volume Feedback (feedback on the number of live sessions: suitable, excessive, or insufficient), Discomfort During Intervention (report of experience of physical or mental discomfort during the course), Future Practice Plan (intentions for future mindfulness practice, including frequency and duration), Teacher Feedback (suggestions or feedback for the course instructor), Course Feedback (opinions on the course content and structure, including the online format), Key Experience (most memorable or impactful experience during the course), Future Activity Interest (interest in future mindfulness-related activities or events in schools or workplaces).

All the variables were entered into the model using a stepwise method. The best-fitting model was selected based on the model fit indices, specifically AIC and Adjusted  $R^2$ . As shown in Table 3, hierarchical multiple regression analysis revealed that the best-fitting model included seven factors: Longest Meditation Duration, Single (Level of Marital Status), Discomfort During Intervention, Meditation Experience, Interaction with the Instructor, actual meditation practice time, and comments provided on the course (Level of Course Feedback variable). This model demonstrated a significant fit (Adjusted  $R^2 = .88$ ,  $F(8, 8) = 15.80$ ,  $p < .01$ ).

Final Model showing participants those who are single are significantly ( $B = -14.24$ ,  $p < .01$ ) have a lower improvement on mindfulness compared to those who are married or partnered. Participants who had previous meditation experience, with the experience of discomfort during intervention and provided comments on the course, had a lower improvement in mindfulness ( $B = -0.42$ ,  $p < .01$ ;  $B = -8.14$ ,  $p < .01$ ;  $B = -4.35$ ,  $p < .01$ ). Those who felt more interactive with the instructor showed lower mindfulness improvement ( $B = -1.05$ ,  $p < .05$ ). On the other hand, the longer the participants' actual mindfulness practices, the more they would improve ( $B = 0.01$ ,  $p < .05$ ). The longest time of meditation also showed positive effects on mindfulness improvement, but not at a significant level.

Table 3. The results of the multiple regression analysis on mindfulness changes ( $n = 17$ )

Variables	Final Model			
	<i>S.E</i>	$\beta$	<i>t</i>	<i>B</i>
Intercept	3.69	.00	6.62	24.43 ***
Longest meditation duration	0.03	.03	0.25	0.01
Married or partnered				-2.08
Single				-14.24 **
Meditation experience				-0.42 **
Discomfort during intervention				-8.14 **
Actual practice time				0.01 *
Interaction with the instructor				-1.05 *
Provided comments on the course				-4.35 **
$R^2$				.88
<i>Adjusted R</i> <sup>2</sup>				.94
<i>F</i>				15.80 ***
AIC				80.05

Note. \* $p < .05$ , \*\* $p < .01$ , \*\*\* $p < .001$ .

Final Model based on the bidirectional stepwise method (using p-value criteria) are shown.

## 5. Discussion and Limitations

### 5.1. Lower Improvement in Single Participants

Single participants showed significantly lower mindfulness improvement compared to married or partnered individuals ( $B = -14.24, p < .01$ ). While this finding aligns with studies conducted in Western contexts, where the absence of emotional and relational support among single individuals has been shown to hinder mindfulness engagement (Michalak et al., 2019), cultural factors in Japan may contribute uniquely to this dynamic.

Japanese society places a strong emphasis on *wa* (harmony) and the value of interpersonal relationships, which are deeply embedded in personal and collective well-being (Uchida & Ogihara, 2012). In this collectivist cultural context, the relational support derived from close connections, such as marriage, not only aids in stress management but also reinforces psychological stability in ways that may differ from Western societies. This suggests that, although the general pattern of relational support fostering mindfulness improvement is consistent, the underlying mechanisms may be shaped by culturally specific factors in Japan.

Current research is limited to exploring factors and does not specifically address whether cultural factors influence this result. Further research should investigate the mechanisms behind the lower mindfulness improvements in non-single participants. One possible explanation is that relational support may reduce the perceived need for mindfulness practices as a coping strategy.

Additionally, Japanese cultural values, such as *wa* (harmony), may shape how relational dynamics influence engagement in mindfulness, potentially discouraging practices that emphasize introspection or emotional exploration.

### 5.2. Lower Improvement in Participants with Previous Meditation Experience

Participants with prior meditation experience showed smaller improvements in mindfulness ( $B = -0.42, p < .01$ ). This may be explained by a ‘ceiling effect,’ where individuals with pre-existing skills have less room for noticeable growth. This effect might be particularly relevant for mindfulness learning, as acquiring mindfulness as a skill can be influenced by how its definition is explained. It remains challenging to discern whether changes in mindfulness arise from a deeper understanding of the concept or from the development of mindfulness skills themselves. Furthermore, the ambiguity surrounding the definition of mindfulness and the diversity of mindfulness practices has been noted as a significant challenge in mindfulness research (Quaglia, Brown, Lindsay, Creswell, & Goodman, 2015). Additionally, the current research provided Vipassana meditation as an intervention course (as the parallel research aims to). Vipassana meditation involves skills with Buddhist backgrounds, which require adaptability. Furthermore, differences between Zen Buddhism, widely practiced in Japan, and Theravada Buddhism, which underpins Vipassana meditation, could influence mindfulness outcomes. *Zen* focuses on *zazen* (seated meditation) and emphasizes direct experiential insight (*satori*), often integrated into relational and ethical frameworks (Joskovich, 2023). In contrast, Vipassana originating in the Theravāda Buddhist tradition, primarily practiced in Southeast Asia (e.g., Myanmar, Sri Lanka, Thailand), which involves structured observation of bodily sensations to develop insight into impermanence and non-self.

This research does not confirm whether participants with prior exposure to Zen meditation specifically influenced the outcomes. Future studies incorporating open awareness meditation techniques (such as Vipassana in this study) should consider that methodical and introspective practices may present unique challenges. It is crucial to clarify the specific type of meditation practiced by participants with prior meditation experience. These challenges could stem from ingrained habits or differing expectations regarding meditation practices, potentially leading to disengagement and lower mindfulness improvements. Future research should investigate how familiarity with specific Buddhist traditions affects adaptability to other mindfulness practices and impacts intervention outcomes.

### 5.3. Discomfort During Intervention

The presence of discomfort during interventions was confirmed as a negative factor in predicting improvement in mindfulness ( $B = -8.14, p < .01$ ). However, discomfort might reflect

participants engaging deeply in practice, a phenomenon that aligns with the mindfulness literature suggests that growth often occurs through discomfort and the ability to remain present (Sass & Berenbaum, 2013; Lotan, Tanay, & Bernstein, 2013). Possible reasons for this difference is that current research considers discomfort as a factor affecting mindfulness directly, and current research received only physical discomfort as an increase in heartbeats and tiredness after practice. This differs from research suggesting that discomfort serves as a gateway for resilience (Sass & Berenbaum, 2013). Thus, further studies should assess whether individuals reporting higher discomfort allow emotional phenomena to arise or to avoid them during practice.

#### **5.4. Course Feedback and Interaction with the Instructor**

Participants who provided comments on the course ( $B = -4.35, p < .01$ ) and those who felt more interaction with the instructor ( $B = -1.05, p < .05$ ) also showed lower improvements. Interactions with the instructor have emerged as a critical factor. This may support research suggesting that adequate interactions with intervention instructors are positive for mindfulness intervention outcomes (Creswell 2017). Teaching mindfulness is inherently relational, where trust and connection between instructors and participants significantly impact learning and the transfer of mindfulness skills (Roeser, 2016). However, it should be noted that skilled mindfulness instructors employ specific pedagogical strategies such as the use of silence, reflective dialogue, and tailored feedback to facilitate participants' learning (Roeser, 2016). Thus, the use of these strategies may have made participants feel less interactive. These practices helped scaffold participants' experiences, making the abstract principles of mindfulness accessible and applicable to their daily lives. Thus, further research should explore what "adequate" interaction means in mindfulness interventions. While trust and connection are important, both excessive and minimal interactions may differently impact participants' autonomy and engagement. Studies that focus on how varying levels of interaction affect mindfulness outcomes are vital.

#### **5.5. Positive Impact of Actual Practice Time and Longest Meditation Time**

Actual meditation practice time positively influenced mindfulness improvement ( $B = 0.01, p < .05$ ). This aligns with the evidence that consistent practice enhances attention, awareness, and well-being. Longer practice provides repeated opportunities to internalize these skills, leading to sustained improvements over time; however, these two factors are self-reported, which may refer attitudes toward interventions. Thus, further research should adapt measures for meditation: MindfulWatch (Hao et al., 2017) and Fitbit (Anagnostouli et al., 2024) that work out during follow-up and participants' daily lives. Furthermore, for little sample size, practice time and meditation duration are limited into linear regression statistic models. Further developed model should be considered, to stress the impact of process outcomes factors of intervention.



## 6. Conclusion

This study examined the factors influencing mindfulness improvement through online mindfulness interventions in a Japanese context, providing insights into the roles of relational dynamics, cultural values, and individual characteristics. While the findings highlight some significant patterns, the results should be interpreted with caution due to the study's limitations, including sample size and the specificity of the intervention.

Participants with relational support, such as married individuals, showed higher mindfulness improvements, potentially reflecting the supportive role of close relationships. However, cultural factors like *wa* (harmony) may play a nuanced role in shaping this dynamic, underscoring the importance of further research into how collectivist cultural values interact with relational contexts to influence mindfulness engagement. Similarly, the limited improvement observed among experienced meditators suggests the challenge of integrating prior practices, such as Zen, into structured frameworks like Vipassana, raising questions about how existing meditation habits influence adaptability to new interventions.

The role of discomfort during interventions was identified as complex, potentially reflecting both a barrier to engagement and an opportunity for growth. These findings suggest that while discomfort can contribute to mindfulness improvement, its nature and interpretation may differ depending on individual and cultural contexts. Additionally, interactions with instructors appeared to influence outcomes, pointing to the need for further exploration of how varying levels and types of interaction impact participants' autonomy and mindfulness skills.

Consistent practice emerged as a key predictor of mindfulness improvement, aligning with prior research on the importance of regular engagement. However, the reliance on self-reported data and linear regression models highlights the need for more robust and objective measures, such as wearable devices, to better capture practice-related factors.

These findings suggest broader implications for mindfulness interventions, particularly in culturally diverse settings. While this study focused on the Japanese context, the results highlight the need for standardized approaches to evolve by incorporating cultural sensitivity and individual adaptability. Future research should explore how local traditions, community dynamics, and modern technologies can converge to create accessible and impactful mindfulness programs tailored to diverse sociocultural contexts. By integrating these elements, mindfulness can continue to evolve as a practice that balances universal relevance with cultural resonance, ensuring its adaptability and effectiveness across various populations.

---

## Reference

Anagnostouli, M., Iliakis, I., & Chrousos, G. (2024). Assessing the impact of the mindfulness-based body

- scan technique on sleep quality in multiple sclerosis using objective and subjective assessment tools. *JMIR Formative Research*.
- Asano, R., Igarashi, Y., & Tsukamoto, S. (2014). Development and examination of the Japanese version of the HEMA scale: What motivates happiness? *Japanese Journal of Psychology*, *85*(1), 69–79.
- Bodhi, B. (2011). What does mindfulness really mean? A canonical perspective. *Contemporary Buddhism*, *12*(1), 19–39.
- Boettcher, J., Aström, V., Pahlsson, D., Schenstrom, O., Andersson, G., & Carlbring, P. (2014). Internet-based mindfulness treatment for anxiety disorders: A randomized controlled trial. *Behavioral Therapy*, *45*(2), 241–253.
- Creswell, J. D. (2017). Mindfulness interventions. *Annual Review of Psychology*, *68*, 491–516.
- Fujino, M., Kajimura, S., & Nomura, R. (2015). Development of the Japanese version of the Mindful Attention Awareness Scale and an examination using item response theory. *Journal of Personality Research*, *24*(1), 61–76.
- Hao, T., Bi, C., Xing, G., Chan, R., & Tu, L. (2017). MindfulWatch: A smartwatch-based system for real-time respiration monitoring during meditation. *Proceedings of the ACM on Interactive, Mobile, Wearable and Ubiquitous Technologies*. <https://doi.org/10.1145/3130922>.
- Ito, Y. (2019). Is mindfulness without meditation possible? *Psychiatry*, *34*(2), 121–126.
- Joskovich, E. (2023). *Zen for Shakaijin—Lay Zen ideology*. In *Lay Zen in contemporary Japan: Tradition, interpretation, and invention* (pp. 73–105). Routledge. <https://doi.org/10.4324/9781003395492-5>
- Kirmayer, L. J. (2015). *Mindfulness in cultural context*. *Transcultural Psychiatry*, *52*(4), 447–469. <https://doi.org/10.1177/1363461515598949>.
- Lotan, G., Tanay, G., & Bernstein, A. (2013). Mindfulness and distress tolerance: Relations in a mindfulness preventive intervention. *International Journal of Cognitive Therapy*, *6*(4), 371–383. <https://doi.org/10.1521/ijct.2013.6.4.371>.
- Michalak, J., Crane, C., Germer, C. K., & Gold, E. (2019). Principles for a responsible integration of mindfulness in individual therapy. *Mindfulness*, *10*(5), 975–985. <https://doi.org/10.1007/s12671-019-01142-6>.
- Miki, Z., Maeshiro, T., & Takemoto, T. (2007). *Naikan Therapy*. Minerva Publishing.
- Monteiro, L. M., Musten, R. F., & Compson, J. (2015). Traditional and contemporary mindfulness: Finding the middle path in the tangle of concerns. *Mindfulness*, *6*(1), 1–13. <https://doi.org/10.1007/s12671-014-0301-7>.
- Morita, S. (2004). *The essence and therapy of neurosis: An essential classic for understanding Morita Therapy*. Hakuyosha.
- Ozawa-de Silva, Chikako. (2014). Mindfulness of the kindness of others: The contemplative practice of Naikan in cultural context. *Transcultural Psychiatry*, *52*, 394–415. <https://doi.org/10.1177/1363461514562922>.
- Quaglia, J. T., Brown, K. W., Lindsay, E. K., Creswell, J. D., & Goodman, R. J. (2015). From conceptualization to operationalization of mindfulness. In K. W. Brown, J. D. Creswell, & R. M. Ryan (Eds.), *Handbook of mindfulness: Theory, research, and practice*. The Guilford Press.
- Roeser, R. W. (2016). Processes of teaching, learning, and transfer in mindfulness-based interventions (MBIs) for teachers: A contemplative educational perspective. In K. A. Schonert-Reichl & R. W. Roeser (Eds.), *Handbook of mindfulness in education: Integrating theory and research into practice* (pp. 149–170).

- Springer. [https://doi.org/10.1007/978-1-4939-3506-2\\_10](https://doi.org/10.1007/978-1-4939-3506-2_10).
- Sass, L. A., & Berenbaum, H. (2013). Experience of shame and growth in mindfulness. *Behavioral Psychology*, *42*(3), 411–425.
- Sun, J. (2014). Mindfulness in context: A historical discourse analysis. *Contemporary Buddhism*, *15*(2), 394–415.
- Tani, S. (2020). Psychology of language and behavior: Learning behavior analysis. Kongou Publishing.
- Thera, N. (1994). The heart of Buddhist meditation: A handbook of mental training. *Buddhist Publication Society*.
- Uchida, Y., & Ogihara, Y. (2012). Personal or interpersonal construal of happiness: A cultural psychological perspective. *International Journal of Wellbeing*, *2*(4).
- Wang, P. S., Simon, G., & Kessler, R. C. (2003). The economic burden of depression and the cost-effectiveness of treatment. *Psychiatric Research*, *12*(1), 22–33.
- Weber, J. (2017). Mindfulness is not enough: Why equanimity holds the key to compassion. *Mindfulness & Compassion*, *2*. <https://doi.org/10.1016/j.mincom.2017.09.004>.

李 晟([gr0421rx@ed.ritsumei.ac.jp](mailto:gr0421rx@ed.ritsumei.ac.jp))



## 考古学からみた北日本地域の古代言語について

種石 悠  
北洋大学

### Ancient Languages of the Northern Japan Region from an Archaeological Perspective

TANEISHI Yu  
Hokuyo University

#### Abstract

Northern Japan in ancient times was a non-literate society, with the exception of the southern Tohoku region. Therefore, it is not possible to infer the language used at that time from written materials. However, the ancient languages of northern Japan have been studied from an archaeological standpoint, using Ainu place names and the mountain language of *Matagi*, which remains in the folklore record, as well as archaeological materials excavated from the area. This paper reviews the main points of these discussions and examines the ancient languages of northern Japan from an archaeological perspective.

Ancient linguistic theory in the northern Japan region differs in its view of *Emishi* as Ainu and *Emishi* as migrants from the south. The theory that *Emishi* were migrants has many problems and is not a valid theory at this time. According to the theory that considers *Emishi* to be Ainu, *Emishi* are descended from a group that formed Epi-Jomon Culture. In conclusion, *Emishi* are thought to have spoken an archaic language that is basically Ainu. Similarly, the language of Okhotsk Culture group, which is based on Epi-Jomon Culture group, is thought to have been a related language to the archaic Ainu language.

## 1. はじめに

北日本地域すなわち北海道域および本州東北地方に居住していた古代の集団は、どのような言語を使用していたのだろうか。

当時、当該地域は東北地方南部を除いて無文字社会であったため、文字資料から使用言語を推測することができない。しかし、北日本地域に残されたアイヌ語地名や民俗学的記録に残るマタギの山言葉を手がかりとし、また当該地域から出土する考古資料を参考にすることによって、ある程度、古代の使用言語について推測することが可能である。

このような手法を用いて、これまでも考古学の立場から北日本地域の古代言語について検討した論考がいくつか著されてきた。

小稿では、これら諸論考の要点を概観し、現段階における課題を明らかにするとともに、若干の展望を示したい。

## 2. 考古学研究者による北日本言語論の展開

### 2.1. 伊東信雄の論考（伊東 1971）

「東北考古学の父」と呼ばれる伊東の論考が、当該分野では嚆矢となっている。伊東の主張を次にまとめる。

東北地方において北海道域に淵源をもつ土器の出土する地域が、アイヌ語地名の残っている地域と一致している点に注意される。これは、少数のアイヌ系の人びとの一時的な移住によって残されたものではなく、長期間、多数のアイヌ語使用者が東北北部にいたことを示している。そのアイヌ語使用者は、古代東北の住民である蝦夷の前身にほかならない。

東北北部にアイヌ語地名が多く残り、また北海道と同じ遺物が出る以上、東北地方に北海道のアイヌと同じくアイヌ語を話す人間が居住していたことは否定できない。

縄文時代人の使用した言語はアイヌ語系のもので、それが東北南部では早く日本語化した。しかし北部では長く後までも残り、蝦夷もある時代まではアイヌ語を使用していたのではないかと推測される。

マタギが狩猟の際に山でのみ用いる山言葉のなかにアイヌ語がみられるのは、古い言葉が現代まで残ったものかもしれない。

蝦夷はアイヌ系の人びとであり、異民族視されていたが、文化的には日本化していた。

### 2.2. 工藤雅樹の論考（工藤 1998・2000）

工藤は、菅江真澄・橘南谿・松浦武二郎・チェンパレン・パチェラー・金田一京助・知里真志保・山田秀三による東北地方のアイヌ語地名研究をまとめ、次の通り展望を述べた（工藤 1998）。

考古学的にみて、縄文時代以降、アイヌ語地名が濃厚な秋田県北部・岩手県北部・青森県の地域に集団的な移民が導入されたことはなかった。

北海道に大陸方面の文化が伸びてきたのが顕著なのは、縄文早期の石刃鎌文化とオホー

ツク文化であった。ただし、前者は縄文早期に限られた期間であった。後者はオホーツク海沿岸に限定され、太平洋・日本海側にほとんど及ばず、オホーツク文化人の影響また遣伝子が北海道域の住民に伝えられることはあっても、主流になったとは考えにくい。

「かつて典型的な縄文文化が展開した東日本から北日本の地域が、その後の歴史の流れのなかで古代国家の影響、支配を受けるようになった地域は日本語の世界となり、直接の政治的な支配を受けなかった地域はアイヌ語の世界であり続けたのではないか」（工藤 1998：279頁）。

蝦夷との戦争の際、政府軍に通訳がいたこと、新田郡に蝦夷語に堪能な百姓夫妻がおり、蝦夷を先導する可能性があるとして日向国に流されたこと、そして、元慶の乱の際、小野春風が蝦夷語を駆使して事件の収拾にあたったことから、蝦夷の言語は日本語とは異なる言語であり、アイヌ語地名の分布からその言語はアイヌ語と同じ系統であったことが分かる（工藤 2000）。

蝦夷を辺境に住む大和民族であったとみる「蝦夷辺民説」では、アイヌ語地名の東北地方における分布を説明できない。

古くは菅江真澄や柳田國男が指摘してきたように、マタギの山言葉にアイヌ語と共通する言葉が少なくない。例えば、金田一京助は、セッタ（犬）、ハッケ（頭）、ワッカ（水）、ワシ（雪）、ツクリ・チクニ（木）、サンベ（心臓）、ホロ（犬）を、また知里真志保（1974）は、ワシホロ（雪が多い）、ツグリ（木（の箸））、ハッピーがホゲル（火がはねる）、トッピー（日・月）、カド（天気）、シナリ（荷負紐）、オビシナリ（帯）、ホロケ（爺）をマタギの山言葉から採集した。これらは、アイヌ語のウパシ（雪）、チクニ（木）、アベ（火）、トンビ（道北部方言の日・月）、シナ（結ぶ・縛る）、ホロケボ（樺太アイヌ語で若い男（ポ：若い）<sup>1</sup>）との関連が明らかである。

以上の事実から、東北地方の住民も以前はアイヌ語的な言語を話していたと解釈され、かつてアイヌが東北地方にも居住していた証拠とみることができる。

また、マタギの狩猟習俗について、密教の影響もあるが、アイヌの狩猟儀礼と類似する点があることにも注意される。

アイヌ語地名とマタギの山言葉は、ある時期までは東北地方の言語が現代アイヌ語と同系統の言語であった大きな根拠となりうる。これは、蝦夷アイヌ説の立場からみても有利である。

### 2.3. 瀬川拓郎の論考（瀬川 2011・2015）

2011年発行の『アイヌの世界』で、瀬川は次のように主張した。

東北北部の縄文集団は弥生文化を受け入れ、縄文語＝アイヌ語を話していた。しかし弥生後期になると、東北北部は過疎化あるいは無人化した。

4世紀代になると、北海道域から統縄文人が東北北部に進出したため、東北北部集団はアイヌ語を話していた。ところが、5世紀代に南から古墳集団が東北北部に進出したため、

続縄文人は6世紀代に北海道域に撤退した。結果、続縄文人が東北北部に展開することはなかった。したがって、東北北部のアイヌ語地名は、4・5世紀代に続縄文人と古墳集団が交流するなかで定着した。

7世紀代後葉に、青森県域太平洋側から北海道域石狩低地帯に農耕民移住の波があり、続縄文集団が日本化・農耕民化した。その結果、擦文文化が形成された。擦文文化成立にあたって、マキリ(小刀)・機織り技術・農具などに古代日本文化的要素の伝播をみることができると考えられる。

近世アイヌ語のなかに日本語からの借用語がみられる。この借用語に、例えばカムイ・ノミ・タマ・オンカミ・ヌサなどがある。これら借用語は信仰・儀礼関連の言葉が多く、奈良・平安期の日本語と考えられる。借用が起きたのは、7世紀代後葉から9世紀代にかけてとみられる。

借用が起こった際、アイヌ語研究者の中川裕が、英語-フランス語、および日本語-漢語の借用関係との比較によって述べるように、アイヌ民族と大和民族の影響関係は希薄だったと推測される。

以上の事柄から、マタギの用いるアイヌ語は、4世紀代における続縄文人の東北北部への南下によってもたらされ、アイヌ語のなかにみられる日本語は、7世紀代後葉に東北北部の農耕民が北海道域に渡海してきたなかで、続縄文人が農耕文化とともに取り入れたと考えられる。

続いて、2015年発行の『アイヌ学入門』では、考古学からみたアイヌ語と縄文語の関係について、次のように瀬川は言及した。

山田秀三のアイヌ語地名論によれば、「ナイ」のつく地名は、宮城県域・樺太、および北海道日本海側からオホーツク地域にかけて、また「ベツ」のつく地名は、秋田・岩手県域、および北海道太平洋側から千島列島にかけての地域に分布する。

「ナイ」地名は、4世紀代の続縄文人の北海道から東北への南下によって、「ベツ」地名は、5～6世紀代の続縄文人の南下によってもたらされた。この間、「川」を意味するナイがベツに変化した<sup>2</sup>。

ナイはアイヌ語だが、ベツは古墳集団とともに北上した日本語の可能性もある。

その後、東北へ南下していたグループであった、北海道太平洋側の続縄文人もベツを使いはじめ、他の地域では古語ナイを使い続けた。

北海道日本海側の擦文人はオホーツク文化人を排除・同化し、10世紀代にオホーツク海沿岸、11世紀前後にサハリン島へ進出し、これらの地域にナイ地名が広がった。

北海道太平洋側の擦文人が11世紀代末に北海道東部、15世紀代に北千島へ進出し、ベツ地名が広がった。

その後、道内では各地の交流のなかで、ナイ・ベツ地名が混在した。北千島・サハリン島ではそれぞれのナイ・ベツ地名が残った。

知里真志保は、樺太アイヌ語とマタギの山言葉のなかのアイヌ語に共通性があると指摘



しているが、この指摘は先の推定を間接的に証明する。

樺太アイヌ文化は、11世紀前後に北海道北部日本海側の擦文人がサハリン島南部西岸に渡海して成立した文化である。そのため、マタギ言葉同様、古相のアイヌ語が残っている可能性がある。

#### 2.4. 松本建速の論考(松本 2020a・2020b・2021・2023)

松本は、北海道南部から東北地方北部にかけての3～11世紀の集落・墓遺跡の消長を検討し、次のように主張した。

「東北北部の集落遺跡の分布状況の時期的変遷からわかるように、当該地域は7世紀になるまでの数世代間、集落が存在していなかったのだが、7世紀になると東側地域だけに集落が突然出現した。そして人々が持っていた文化要素は、雑穀栽培や馬飼をおこなっていたことを示し、それ以前にはこのあたりに存在していなかったものである。しかも、5世紀前半までのこの地域と同じ言語共同体<sup>3</sup>であった北海道南部の文化要素とはまったく違っている。これを東北北部の文化要素の通時的変化として見れば、6世紀と7世紀との間に異文化の要素の組み合わせが突然出現したのであるから、7世紀になって質の異なる大変化があったことになる」(松本 2020b: 37頁)。

「7世紀に東北北部の東側に突然出現した集落は、北海道南部の言語共同体には加わらない人々によって営まれていた。文化要素から見れば、その人々が属していた言語共同体は、東北中部よりも南にあった終末期古墳文化、すなわち7世紀半ばから8世紀半ばの歌が載る『万葉集』で代表される日本語古語(やまと言葉)を話す人々によって形成されていたものだったと読み取ることができる。一方、同時代の東北北部西側に集落は無く、どんな遺跡も見つかっていないのだが、8世紀になると農耕をおこなう人々が住む集落が徐々に出現した。ただ、それらのどの遺跡にも7世紀以前の土地利用の形跡はない。東北北部の西側には、8世紀になるまで農耕をおこなう人々がいなかったことになる。8世紀に突然新来の人々が訪れて集落を営んだのである。文化要素から考えるならば、人々は古代日本国領域の農耕文化地域から来たのであり、日本語古語を話す言語共同体を形成していたはずである」(松本 2020b: 37・38頁)。

「東北北部の東側の7世紀に突然出現した集落は移住者のものではなく、在来の人々が古墳文化を受容したという解釈がある。土師器の形態や製作技法、末期古墳の構造に在来の要素があるというのを根拠にしている。そしてその考えに立てば、居住者は続縄文文化期以来の在来の民の末裔であり、アイヌ語古語の言語共同体に属することになる。しかし(中略)、6世紀の東北北部には在来の民がおらず、文化を受容する人がいない。したがってそもそも在来の要素がなく、土師器や末期古墳を在来の民の技術をもとに作るができない」(松本 2020b: 38頁)。

「7世紀の東北北部でおこった移住は、馬の飼育で象徴される新来の異文化を運んだのであり、馬飼地域の言語共同体が拡散したことを意味する。この時期の日本列島上にあっ

た馬飼技術を持つ文化は終末期古墳文化である。日本語古語を話す人々の文化である。東北北部の東側に7世紀に定着したのは、日本語古語の言語共同体であった。7世紀の東北北部の人々は古代日本国域からの移住者であり、続縄文時代以来の在来のアイヌ語古語を話す人々をエミシと呼ぶのであれば、エミシではなかったことになる」(松本 2020b : 39頁)。

### 3. 考察

今回紹介した諸論考はいずれも、アイヌ語地名やマタギの山言葉から仮説を立て、考古資料と比較する方法によって立論している。そして、アイヌ語地名からのアプローチでは、蝦夷辺民説と蝦夷アイヌ説とで解釈に違いが生じている。

考古学界で蝦夷の言語についてはじめて触れたのは伊東であり、その仮説は基本的に工藤へ継承された。伊東と工藤の説は、蝦夷アイヌ説の立場に立つものであった。工藤が触れた、東北北部の住人の言語が日本語ではなかったことを示す古代史料中のいくつかの記述は、注目すべき情報である。

このような記述はほかにも知られ、文献史学の立場から熊谷公男も事例を挙げている。熊谷は、『日本後紀』と『藤原保則伝』に、蝦夷の話す言葉が「夷語」と呼ばれていたこと、また『続日本紀』と『日本三代実録』に、倭人と蝦夷との対話に「訳語」と呼ばれる通訳が介在したことを示す記述があることを根拠に、蝦夷の用いていた言語をアイヌ語系統のものとしている(熊谷 2004)。

一方、伊東・工藤の説とは逆に、蝦夷辺民説の立場をとる瀬川の説は、考古学的にみると疑問が残る。例えば瀬川は、東北北部では5世紀代に南から古墳集団が進出し、6世紀代に続縄文人が北海道域へ撤退したので、東北北部のアイヌ語地名は、4・5世紀代に続縄文人と古墳集団が交流するなかで定着したものであると述べた。

しかし、5~7世紀代に相当しうる北大式土器を使用していた後半期続縄文人の痕跡は東北地方で確認することが可能である(女鹿 2003、阿部編 2008、東北・関東前方後円墳研究会編 2014)。そしてその後12・13世紀代まで、東北北部には続縄文文化に後続する擦文文化がみられた。したがって6世紀代以降に、東北地方北部から、北海道域に淵源をもつ先史文化が撤退したとみることはできない。

さらに瀬川は、マタギの山言葉のなかのアイヌ語は続縄文人の使用言語由来であると述べた。けれども、最長で1700年間余りもひとつの言語が同じ地域で形を保ったまま保持されることは果たして起こりうるであろうか。マタギの山言葉は、蝦夷の時代以降の言語由来と考えるのが素直な解釈であろう。

北海道域内におけるナイ・ベツ地名の混在、日本古語由来のベツ地名の北上説そして北千島・サハリン島でのナイ・ベツ地名の残存の説明も考古学的にみると課題が多い。例えば、根拠とされた擦文人によるオホーツク文化人の排除・同化説が考古資料からみて成り立ちがたいことは、拙著ですでに述べたところである(種石 2023)。

次に、瀬川説と似た内容をもつ松本説についてであるが、松本説の一番の問題点は、言語共同体の概念の用い方にある。松本は、「物質文化の共通の組み合わせを持つ社会は、一つの言語共同体だ」(松本2020b:35頁)、そして「集落とは言語共同体としての側面を持ち、同一文化要素を持つ集落の拡散は言語共同体の拡散でもある」(松本2020b:39・40頁)とするが、特定の社会において、その文化あるいは言語のどちらかが異なるものと入れ替わることは歴史上、起きている。そのため、物質文化の組み合わせが共通するからといって、同じ言語共同体に属するとは限らないのである。

また、考古資料の認識にも再検討が必要である。「6世紀の東北北部には在来の民がおらず、文化を受容する人がいない」、そして「7世紀以降の居住者は南北どちらかから移住してきた」(松本2020b:38頁)としているが、先述した通り、東北北部には、6・7世紀代に相当する北大Ⅱ・Ⅲ式土器(図)が出土しており、無人であったとみることはできない。当時、東北北部は続縄文文化圏に属しており、したがって続縄文人が居住していたとみるべきである。

この問題については八木光則(2010)も言及しており、参考になる点が多い。八木による解釈の要点を次にまとめてみよう。

弥生時代後期に気候が寒冷化したため、東北地方の水田稲作が停滞し、東北北部の遊動的な生活基盤を東北南部と共有する動きが生じ、後期弥生土器の天王山式土器群の東北地方における広域化が進んだ。

同じ時期に北海道域でも、続縄文時代前半期終末の後北C1式期の遊動集団が北海道域内さらには岩手・新潟県域まで広がった。4世紀代の古墳時代前期・続縄文時代後半期になると、続縄文土器の広域化はさらに進み、後北C2・D式土器(図)は東北地方にまで分布がみられた。この土器を用いた集団も遊動生活を営んでいたと考えられる。ただし、北海道域から津軽海峡を越えての人の移動は認められない。東北北部には土師器が主体となる「プロト蝦夷文化」が形成され、北海道域の続縄文文化とは異なる文化内容だった。5・6世紀代に相当する続縄文時代の北大式期にも遊動生活は続いたが、北大Ⅰ・Ⅱ式土器の分

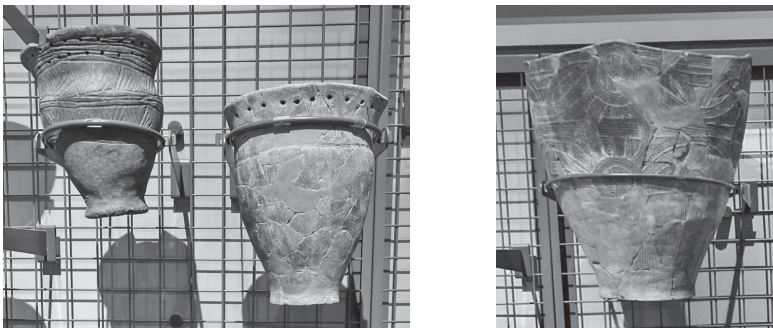


図 北大Ⅲ式土器：左、後北C2・D式土器：右(苫小牧市美術博物館所蔵)

布域は青森県域まで後退した。この時期の東北北部の文化も、北海道域とは異なる独自性を有していた。

東北北部では、4世紀代から6世紀代初頭にかけて、南から古墳文化集団が局地的に移住してきた。しかし移住は継続せず、東北北部社会を変革するものとはならなかった。ところが、6世紀代末から8世紀代初頭にかけての時期になると、関東的な文化要素をもつ集落が東北地方に広範囲に形成されるようになった。このような動きは、北海道域の石狩低地帯においても確認されている。これらの集落は在地集団を基盤とせず、また在地集団を上回らない規模の移住によって新たに形成された。流入したヒトやモノは在地社会と混在することになった。それまで遊動生活を行っていた在地集団は、東北中部・南部からの文化的影響を受け、堅穴住居を用いた定住生活に移行した。この時期こそ古代がはじまる画期であり、蝦夷概念が成立する時期とも重なっている。

このように八木は、6世紀代末頃以降の仙台・大崎平野およびそれら以北の地域の在地社会を蝦夷社会とみなしている。南からの移住者集団を蝦夷とみなす松本説とは、解釈の違いが明らかである。

これまで述べてきたように、東北地方特にその北部において、後期弥生文化から後半期続縄文文化に至るまで文化的な断絶はみられず、それらの文化を形成した在地の人びとも居住し続けていたと推測される。考古学的に検討すると、おおむね八木説が妥当と考えられる。

ところで、松本はその論理過程を示していないが、オホーツク文化集団が「ニヅフ語古語」を使用したとの見解を示している（松本 2020b：図7）。これは、オホーツク文化集団ニヅフ説（菊池 2009）に依拠したものと考えられる。しかし拙著（種石 2023）でも述べたように、ニヅフ集団とその文化の形成自体が未解明であるため、オホーツク文化人をニヅフに比定することは現段階ではできない。

#### 4. おわりに

北日本地域の古代言語論は、蝦夷アイヌ説と蝦夷辺民（移住者）説の立場によってそのとらえ方が異なる。小稿でみてきたように、蝦夷辺民説は問題点が多く、いまのところ妥当な説とはいえない。考古資料に照らし合わせて考える限り、蝦夷を在地縄文人の末裔とみる八木の説が最も妥当である。この蝦夷在地縄文人末裔説は、蝦夷アイヌ説とほぼ同じ内容である。

蝦夷アイヌ説によれば、蝦夷と呼ばれた人びとは続縄文文化集団の後裔集団なので、蝦夷は基本的にアイヌ語古語を話していたと考えられる。

オホーツク文化集団の言語については、オホーツク文化が続縄文文化に後続するプレアイヌ文化であること、また北海道域内に非アイヌ語かつオホーツク文化語由来の可能性がある地名やアイヌ語彙がないことからみて、オホーツク文化集団の言語はアイヌ語古語の近縁言語であったと筆者は考えている。もうひとつの続縄文文化集団の後裔集団である擦

文文化集団もプレアイヌ文化集団であり、アイヌ語古語を使用していたと推測される。

ところで、後北C2・D式期・北大I・II・III式期続縄文文化集団と鈴谷式期・十和田式期・刻文期オホーツク文化集団との間に交流があったことが窺われる（種石 2023）。これらの時期のオホーツク文化遺跡に続縄文土器が伴うからである。両文化とも前半期続縄文文化に後続しているため両者の言語が近縁関係にあり、両文化集団の交流が成り立たつ要因になっていた可能性もあるだろう。

またオホーツク文化集団が、北方そして東方に伸長してきた擦文文化と対峙した際、衝突や拒絶をみることなく、その文化を受容していったことは、両文化の土器の融合型式であり終末期のオホーツク式土器でもあるトビニタイ式土器および元地式土器、あるいはオホーツク文化人の模倣による擦文土器の存在が示唆している。オホーツク文化期社会における、このような円滑な擦文文化受容を可能にした要因のひとつとして、ともに続縄文人の後裔集団であるオホーツク文化人と擦文文化人の使用言語が近縁関係にあったことも挙げられるのではないかと。

続縄文人、オホーツク文化人そして擦文文化人の言語の近縁性に関しては、今後の検討課題としたい。

## 付記

脱稿後、アイヌ語地名を考古学的に分析した論考（八木光則 2017「アイヌ語系地名と蝦夷」『古代国家と北方世界』同成社）に触れた。小稿でも取り上げた松本説を批判的に検討している。ただし、アイヌ語地名からその形成時期や古代に蝦夷と呼ばれた集団の言語の変遷を論じることは難しいと筆者は考えている。地名だけでは、言語情報が乏しすぎるからである。

## 注

- 1 ただし、マタギ山言葉の「ホロケ」（爺）は樺太アイヌ語と意味が逆転している。
- 2 後述する松本も同意見である。ところが、知里・山田は逆にバツがナイに変化したと考える。
- 3 「物質文化の組み合わせによって把握する考古学的文化を考えるさいにも“言語”は重要である。どんな人間も“社会”の一員として存在しているからである。そして共通の文化を持つ社会は、言語の側面から見れば“言語共同体”ということになる。考古学資料、すなわち物質文化を用いて“文化”を説明するならば、物質文化の共通の組み合わせを持つ社会は、一つの言語共同体だということになる。」(35頁)

## 参考文献

- 阿部義平編（2008）『北部日本における文化交流 上』国立歴史民俗博物館  
伊東信雄（1971）「東北古代文化の研究」『文化』35-1・2（1976『東北考古学の諸問題』寧楽社 535-551頁再録）

- 菊池俊彦 (2009) 『オホーツクの古代史』 平凡社
- 工藤雅樹 (1998) 『東北考古学・古代史学史』 吉川弘文館
- 工藤雅樹 (2000) 『古代蝦夷』 吉川弘文館
- 熊谷公男 (2004) 『古代の蝦夷と城柵』 吉川弘文館
- 熊谷公男 (2022) 「古代東北の歴史環境」『シリーズ地域の古代日本 陸奥と渡島』 KADOKAWA 21-65 頁
- 瀬川拓郎 (2011) 『アイヌの世界』 講談社
- 瀬川拓郎 (2015) 『アイヌ学入門』 講談社
- 瀬川拓郎 (2016) 『アイヌと縄文』 筑摩書房
- 瀬川拓郎 (2017) 『縄文の思想』 講談社
- 東北・関東前方後円墳研究会編 (2014) 『古墳と続縄文文化』 高志書院
- 種石 悠 (2023) 『オホーツク文化の考古学：辺境から眺める古代日本』 銀河書籍
- 松本建速 (2020a) 「エミシの言葉と考古学 人口非増加社会から人口増加社会への変化」『世界と日本の考古学 オリブの林と赤い大地』 457-477 頁 六一書房
- 松本建速 (2020b) 「考古学資料から言語共同体を読む —— 古代東北北部の人々はアイヌ語を話したか ——」『東海大学文学部紀要』 111：25-42
- 松本建速 (2021) 「考古学から見たヒトの移住と言語置換」『東海大学文学部紀要』 112：1-30
- 松本建速 (2023) 「重訳された蝦夷の考古学」『東海史学』 57：17-42
- 女鹿潤哉 (2003) 『古代「えみし」社会の成立とその系統的位置付け』 岩手県文化振興事業団
- 八木光則 (2010) 『古代蝦夷社会の成立』 同成社

種石 悠 (y\_taneishi@hokuyo.ac.jp)

## 学習者が主体となる中国語教育の実践

— 少人数の初級・中級クラスの学習者を対象としたいくつかの活動 —

陳 曦  
早稲田大学

Proactive Learning in Chinese Language Education  
— Activities for Beginner and Intermediate Classes —

CHEN Xi  
Waseda University

### Abstract

This practical report describes several proactive learning activities conducted by the author in beginner and intermediate Chinese language classes at Hokuyo University in 2022–2023. The following activities were conducted: dictation assignments, presentations, dubbing recordings, research and teaching activities to peers, and exchanges between learners of different levels.

## 1. はじめに

日本の大学における中国語教育について、西香織 (2021) は「全体的には、いまだに文法訳読法 (文法と語彙学習)、オーディオ・リンガル教授法 (Audio-Lingual Method. 反復練習、構造中心の文型練習、機械的やりとり、暗唱) が席卷している。」「少なくとも日本の大学や高校の中国語教材はいまだに文法シラバスによるものが圧倒的多数を占めており、コミュニケーション能力を向上させたり、インタラクティブな活動をするための教材開発が非常に遅れている」と現在の問題点を指摘している。

インタラクティブな活動が不足している中国語授業における主体的な学び・アクティブラーニングの試みとして、李大年 (2018)、南雲大悟 (2019)、望月雄介 (2023) などがある。

なぜ外国語教育に主体的な学び・アクティブラーニングが必要なのかについて、横溝紳一郎・山田智久 (2019) は日本語教育の場合「(1) 日本語能力、(2) 学習意欲、(3) 自己調整学習能力、の三つの点で、アクティブ・ラーニングはプラスに働く」と述べている。中国語教育についても同じことが言えると考えられる。

本実践報告では、筆者が 2022～2023 年度に、北洋大学の中国語初級・中級クラスで実施した、学習者が主体となるいくつかの活動について報告する。実施した活動は①ディクテーション課題、②発表課題、③アフレコ課題、④調べて教え合う活動、⑤異なるレベルの学習者の交流であった。各活動は学習者のレベル・授業時間などを考慮して実施している。

なお、実践したクラスのレベルは、(目標が) HSK1・HSK2・HSK3 であった。これは CEFR (ヨーロッパ言語共通参照枠組み) の A1・A2・B1 に相当する。

## 2. 学習者が主体となるいくつかの活動

### 2.1. ディクテーション課題

初級中国語の総合授業では、学習者の学習効果を上げるために、教科書の課ごとに、筆者が練習シートを作成した。

ディクテーション課題を実践したクラスは以下の表 1 のとおりである。

表 1 ディクテーション課題を実施したクラス

科目名	中国語入門	中国語コミュニケーション I
時期	2022 年度春学期	2022 年度秋学期
目標レベル	HSK1 (CEFR A1)	HSK2 (CEFR A2)
授業回数	週 2 回 × 15 週	週 2 回 × 15 週
履修者数	8 名 (うち 4 名が中国語コース)	5 名 (うち 2 名が中国語コース)
実践の実施回数	11 回	15 回

練習シートにはその課で勉強した文法ポイントのまとめ、練習問題、関連語彙の拡充、ディクテーション課題などが含まれている。特にディクテーション課題については、その



課の文法ポイントが使われている質問文と回答文を書き取るだけにとどまらず、それを題材にして学習者同士の会話練習を実施した。会話練習では、一人が質問し、もう一人がそれに対して回答するとともに、その学習者の回答を他の学習者に書き取らせた。このように、筆者はファシリテーターとして参加し、話題についてさらに掘り下げる役割などを果たしたが、基本的には学習者が活動の主体となり、自分たちの状況について中国語で話すような協働学習の時間になっている。自己表現や学習者間の学び合いを通して学習効果の向上を目指した。

例えば、2022年度春学期「中国語入門」は、教科書として姜丽萍(2015)『スタンダードコース中国語—中国語の世界標準テキスト—1(HSK1級対応)』を使用している。第11回と第12回の授業では「第6課 我会说汉语(私は中国語が話せる)」を学習したが、第12回の授業でディクテーション課題を実施した。第6課の文法ポイントの1つは能願動詞「会(習得して～できる)」であった。図1は実際に使われたディクテーション課題の一部である。

☆まず、小丸子(xiǎo wán zǐ)の答えを聞いて、書いてください。  
そして、あなたの実際の状況に基づいて、答えてください。クラスメートの答えも書いてください。

Nǐ huì shuō hàn yǔ ma 1. 你会说汉语吗?(あなたは中国語が話せますか。)	
小丸子 xiǎo wán zǐ	
我 wǒ	
( )	
( )	
Nǐ huì xiě hàn zì ma 2. 你会写汉字吗?(あなたは漢字が書けますか。)	
小丸子 xiǎo wán zǐ	
我 wǒ	
( )	
( )	

図1 2022年度春学期「中国語入門」第12回のディクテーション課題(一部)<sup>1</sup>

## 2.2. 中国語による発表課題

定期試験は、筆記試験だけでなく、中国語で自分の趣味などについて発表する発表課題も取り入れている。自分のことについて中国語で話せるようになることで、学習者は達成感を得ることができる。これにより、中国語学習のモチベーションの向上・維持につながるという狙いがある。

中国語による発表課題の実践を行ったクラスは以下の表2と表3のとおりである。

表2 中国語による発表課題を実施したクラス：初級クラス

科目名	中国語入門	中国語コミュニケーションⅠ
時期	2022年度春学期	2022年度秋学期
目標レベル	HSK1 (CEFR A1)	HSK2 (CEFR A2)
授業回数	週2回×15週	週2回×15週
履修者数	8名(うち4名が中国語コース)	5名(うち2名が中国語コース)
実践の実施回数	1回	1回
テーマ	中国語で自分の興味のあること／ものについて紹介する。	中国語で自分の趣味について紹介する。

表3 中国語による発表課題を実施したクラス：中級クラス

科目名	中国語コミュニケーションⅡ	視聴覚中国語Ⅱ
時期	2022年度春学期	2022年度秋学期
目標レベル	HSK3-1 (CEFR B1-1)	HSK3-2 (CEFR B2-2)
授業回数	週1回×15週	週1回×15週
履修者数	4名(うち4名が中国語コース)	3名(うち3名が中国語コース)
実践の実施回数	1回(期末)	2回(中間&期末)
テーマ	これまでに気づいた、日本と中国(中国語圏)との相違点	中間：旅行(今まで/今後) 期末：故郷を紹介する。

しかし、外国語で文章を作成し発表するのは簡単なことではない。そのため、筆者は文章とスライドのサンプルやスピーチのアウトラインの作成・提示、発表までのスケジュールの提示、学習者の文章の添削、学習者の個別音読指導など工夫を凝らした。また、発表当日は、発表するだけでなく、他のクラスメートからの質問やコメントに答えるようにした。

そして、学びを深めるために、自己評価シートに記入させ、自分の発表を振り返り、改善点を考えてもらった。

### 2.3. ペアによるアフレコ課題

2023年度の中級の中国語総合授業では、既習の語彙・表現・文法事項などを実際の中国語音声を通して再確認し、自然な中国語の発音で気持ちを伝えられるようになることを目的に、ペアによる中国語アフレコの課題を取り入れた。

ペアによるアフレコ課題の実践を行ったクラスは以下の表4のとおりである。2023年度春学期の履修者は4名であり、ペアによるアフレコ課題の際には2つのペアになって取り組んだ。2023年度秋学期の履修者は2名であり、ペアによるアフレコ課題の際には1つのペアであった。

表4 ペアによるアフレコ課題を実施したクラス

科目名	視聴覚中国語Ⅱ & インテンシブ中国語Ⅱ (2科目の同時履修が必要)	中国語コミュニケーションⅠ & 中国語文法・作文 (2科目の同時履修が必要)
時期	2023年度春学期	2023年度秋学期
目標レベル	HSK3-1 (CEFR B1-1)	HSK3-2 (CEFR B2-2)
授業回数	週2回×15週	週2回×15週
履修者数	4名(うち2名が中国語コース)	2名(うち1名が中国語コース)
実践の実施回数	1回(期末)	1回(期末)
ペア数	2	1

内容については、学習者が興味を持てるように、ペアごとに自分たちで内容を選んでもらった。学習者が実際に選んだ内容は以下の(1)に示している。

## (1) 2023年度春学期：

- ・ペア1：原神 年夜饭(『原神』「年夜饭」)
- ・ペア2：小猪佩奇 新鞋子(『ペッパピッグ』「新しい靴」)

## 2023年度秋学期：

- ・ペア1：小猪佩奇 香水(『ペッパピッグ』「香水」)

そして、学習者が自主的に学習できるよう、アフレコの練習の具体的な手順も提示した。以下の図2と図3に学習者に提示した実際のスケジュールと練習の手順を示す。

## スケジュール：

- ① 7/11 (火)
  - 授業中：動画の例を見る。グループを決める。
  - 宿題：内容を決める。担当を決める。
- ② 7/14 (金)
  - 授業中：決めた内容を発表する。
  - 宿題：決めた内容のスクリプトを書く。さらに、日本語に訳す。
- ③ 7/18 (火)
  - 授業中：「動画の場面説明(中国語)」の例を見る。
  - 宿題：グループの「動画の場面説明(中国語)」を書く。グループごとにセリフの練習をする。
- ④ 7/21 (金)
  - 授業中：添削入りのスクリプトを読む。発表・会話の準備。
  - 宿題：グループごとにセリフの練習をする。
- ⑤ 7/25 (火)
  - 授業中：添削入りの「動画の場面説明(中国語)」を読む。発表・会話の準備。
  - 宿題：グループごとにセリフの練習をする。

図2 2023年度春学期に学習者に提示した実際のスケジュール

アフレコの練習の手順：

- ・動画の中国語音声聞いて、発音に注意しながら、セリフを実際に声を出して練習をします。
- ・上手くセリフが言えるようになったら、映像に合わせてアテレコをしていきます。
- ・少し慣れたら、動画の音はミュートにして練習しましょう。

発音と話し方に注意し、繰り返し練習してください。

図3 2023年度春学期に学習者に提示した実際のアフレコの練習手順

図2に示しているとおおり、この課題はセリフの発音練習だけではない。セリフの練習に先立ち、決めた発表内容のascript (中国語の漢字と読み方のピンイン) を書き、さらにそれを日本語に訳す必要がある。また、動画の場面説明 (中国語と日本語訳) を書く必要がある。

図4に2023年度春学期のペア2 (小豬佩奇 新鞋子 (『ベッパピッグ』「新しい靴」)) が実際に作成した中国語ascriptと日本語訳 (一部)、図5に2023年度春学期のペア1 (原神 年夜饭 (『原神』「年夜饭」)) が実際に作成した場面説明のslide (上：中国語、中：日本語訳、下：難しい単語と日本語訳) を示す。中国語ascriptと日本語訳、および場面説明については、筆者が一度添削・確認を行っている。

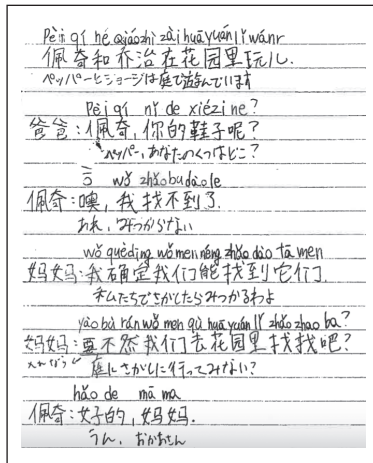


図4 2023年度春学期のペア2 (小豬佩奇 新鞋子 (『ベッパピッグ』「新しい靴」)) のascriptと日本語訳 (一部)<sup>2</sup>

**场景介绍**

空跟董,这对兄妹,和他们的伙伴派蒙会参加除夕夜举办的年夜饭,  
为了让年夜饭热闹起来,他们决定邀请认识的朋友。  
不过,也有一些朋友过来帮忙,他们还尝试了某个游戏,所以年夜饭气氛十分热闹。

兄妹の空と董、相棒のバイモンは大晦日に行われる年夜饭に参加することになり、  
年夜饭を盛り上げるために出会った仲間たちを呼ぶことになった。  
しかしある仲間は仕事の手伝いに回ったり、ある仲間はとある勝負に挑んだりなど、波瀾万丈な年夜饭になっていく。

举办行方 热闹にぎやかな 尝试 試す 邀请 招待する

図5 2023年度春学期のペア1  
(原神 年夜饭(『原神』「年夜饭」))の場面説明のスライド



図6 2023年度春学期のペア2の発表風景  
(小猪佩奇 新鞋子(『ベッパピッグ』「新しい靴」))

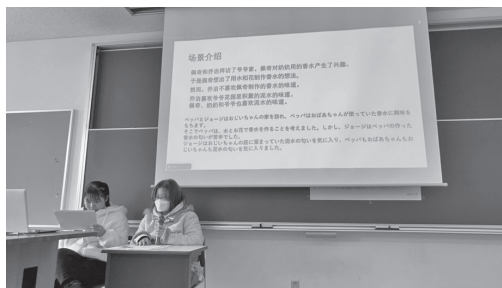


図7 2023年度秋学期のペア1の発表風景  
(小猪佩奇 香水(『ベッパピッグ』「香水」))

アフレコ発表当日、ペアによる最終確認・練習の時間を設け、その後、本番となる。また、発表者は他のクラスメートに2つ質問をし、聴衆は他のクラスメートの発表を聞いて質問

に答えるという質疑応答の時間も設けた。

さらに、学びを深めるために、自己評価シートを記入し、自分の発表を振り返り、改善点を考えてもらった。

自己評価シートは、自分の発表に対して内容・発音・話し方の計8項目について点数をつける部分と、記述式の部分からなる。(2)に示しているのは記述式の2つの問いである。

#### (2) 自己評価シートの記述式の部分

1. あなたたちのアフレコ発表はどうでしたか。この課題で何を学びましたか。
2. 次にアフレコをすることになったとき、どのように改善しますか。

2023年度春学期においては、記述式の間1の答えとして、以下の回答が見られた。「囁んだりスピードに間に合わなかったりしたのでもう少し声調の確認をしておくべきだった。」「ところどころゴリ押ししてしまって上手くいったかといえはいいはなかった。本当の中国語は本当に速いんだなと思った。」「本場の中国語はすごく速いんだなって感じた。」

また、記述式の間2の答えとして、以下のものが見られた。「内容を理解し、文中に使われている単語の確認をして流暢に話せるようにしておく。」「早く話せるようにする。」「口を速く回らせるように気をつける。つまづかないようにする。」

このように、足りない点に気づき、今後は具体的にどのように改善すべきか、といった内容であった。また、口頭ではあったが、学習者から二人で一緒に準備・発表することで、助け合うことができたり、やる気が出たりするなど、とても良かった、との声があった。ペア内で助け合い、学習者間の学び合いが生み出されたと考えられる。また、学習者の中国語学習のモチベーションの維持・向上にもつながったと思われる。

## 2.4. 他の取り組み

そのほか、2022年度春学期に、中級クラス「中国語コミュニケーションⅡ」(目標レベルがHSK3-1 (CEFR B1-1)、週1回、会話の授業、履修者数4名)では、「調べて教え合う」、つまり、学習者が教科書の文法について調べて発表することを試みた。具体的には、学習者が事前に2つのペアに分かれて調べ、授業で他の学習者にスライドを用いて解説するという流れだった。なお、教員は当該文法項目に役立つような参考書などを渡した。学習者から、調べることで理解が深まったという声があった。

また、2022年度春学期に、中級クラス(「中国語コミュニケーションⅡ」(目標レベルがHSK3-1 (CEFR B1-1))、履修者4名)の学習者4名を初級クラス(「中国語入門」(目標レベルがHSK1 (CEFR A1))、履修者8名)に招いて、その2名に可能を表す「会/能/可以」の区別などを解説してもらった。この実践は初級クラス(「中国語入門」)の第20回(30回中)に実施した。解説を担当する2名以外の中級クラスの学習者も、解説を担当する2名

による解説を聞いた。さらに、この「会／能／可」の文法解説以外の時間についても、中級クラスの4名が初級クラスの学習者と一緒にグループワークなどに参加した。また、先輩への質問の時間も設けた。これにより、異なるレベルの学習者間の学び合いが生まれたと思われる。初級学習者にとっては、成功した先輩の学習者を実際に見ることで、良い刺激を受けることができ、中級学習者にとっては、教えることで達成感を味わうことができるため、双方の中国語学習におけるモチベーションの維持・向上につながったのではないかと考えられる。

### 3. まとめ

本実践報告では、筆者が2022～2023年度に、北洋大学の中国語初級・中級クラスで実施した、学習者が主体となるいくつかの活動、具体的には①ディクテーション課題、②発表課題、③アフレコ課題、④調べて教え合う活動、⑤異なるレベルの学習者の交流、について報告した。これらの活動はいずれも、学習者間の学び合いや学習モチベーションの維持・向上に寄与したと考えられ、学習者の中国語能力、学習意欲、自己調整学習能力、の向上につながる効果的な活動であったと言える。

### 謝辞

本稿で報告している実践のうち、ディクテーション課題、発表課題、アフレコ課題については、早稲田大学日本語教育研究センターの木下直子先生から貴重なアイデアをいただきました。筆者が実践した内容は木下先生の日本語の授業を参考にし、中国語に応用したものです。記して感謝申し上げます。

---

### 注

- 1 木下・毛利・佐野(2022)の各課にある「Task1」をモデルに作成した。
- 2 本稿に掲載されている学習者の成果物・自己評価シート・写真は、掲載にあたり本人の承諾を得ている。

### 参考文献

- 木下直子・毛利貴美・佐野香織(2022)『Steps in Japanese for Beginners 1』早稲田大学日本語教育研究センター。
- 南雲大悟(2019)「アクティブな学びの実践：言語系科目・中国語〈中国語基礎1・中国語基礎2〉(授業探訪)」、『大学教育研究フォーラム』24, 58-64, 立教大学。
- 西香織(2021)「大学中国語教育の現状と実践、そして課題」『外国語教育研究ジャーナル = Journal of Foreign Language Education and Research』2, 224-229, 立教大学外国語教育研究センター。
- 溝上慎一(2014)『アクティブラーニングと教授学習パラダイムの転換』東信堂。
- 望月雄介(2023)「学生を主体とする初級中国語教育の実践—産出活動と相互行為活動を通じて—」。

陳 曦 学習者が主体となる中国語教育の実践

『立命館高等教育研究』23, 59-73, 立命館大学教育開発推進機構.

横溝紳一郎・山田智久 (2019) 『日本語教師のためのアクティブ・ラーニング』くろしお出版.

李大年 (2018) 「中国語授業におけるアクティブラーニング」, 『基幹教育紀要』4, 103-122, 九州大学基幹教育院.

陳 曦 (chenxi219@outlook.jp)



## 擬似分裂文の特性と出題意図

— TOEIC L&R Test における調査 —

福嶋 剛司  
北洋大学

### Pseudoclefts and their intention in the context

— An observational study based on TOEIC L&R Test corpus —

FUKUSHIMA Tsuyoshi  
Hokuyo University

#### Abstract

This study explores the relationship between pseudoclefts' properties and the languages used in TOEIC Listening & Reading Tests by adopting a corpus approach. Pseudoclefting is a procedure which divides a clause into two parts for information highlighting purposes. According to Prince's (1978) and the others' discussions, the presupposed part (*wh*-clause) of a pseudocleft represents information that the speaker can assume the hearer is thinking about. The focus position is occupied by units that provide foregrounded information: it highlights a constituent which merits special attention that contrasts, negates, or rectifies a pre-existing element. The study's results indicated a correlation between the property of this construction and the use in TOEIC L&R test.

## 1. はじめに

本稿は、基本となる元の文を2つの部分に分割することによって作られる文である「分裂文」の一種として知られる「擬似分裂文 (pseudoclefts)<sup>1)</sup>」がどのように英語資格試験 TOEIC® Listening & Reading Test (以下 TOEIC) で用いられているのかについて考察する。擬似分裂文は以下のように、非分裂の形となる基本形 (1a) から分割されて (1b) のように〈What ...+is [was] +X〉の形式で表される構文のことである。

(1) a. I bought a red wool sweater. [基本形]

(私は赤いウールのセーターを買いました)

b. What I bought was a red wool sweater. [擬似分裂文]

(Huddleston and Pullum 2002)

上記2文の論理的意味は同じであるが、実際には機能的に違いがあり、それに応じた形で TOEIC の出題においても問題作成者が意図して構成をしているのか調査していくことを目とする。

TOEIC の試験は非公開であり過去問が存在しないため、同試験作成団体の ETS (日本国内では一般財団法人 国際ビジネスコミュニケーション協会 IIBC) が作成した公式問題集を用い調査を行い、構文上の機能的意味と問題作成者の文脈での使用意図が一致するのかについて考察する。

本稿の構成は以下の通りである。2節では、まず擬似分裂文についての特性および分布について詳述する。3節では、調査に使用した「TOEIC コーパス」について概説する。その後、4節で実際の使用例から擬似分裂文の機能的意味と TOEIC における出題が一致するのかについて考察を行い、5節でまとめとする。

## 2. 擬似分裂文の特性

### 2.1. 分裂できる要素の範疇

擬似分裂文〈What ...+is [was] +X〉において be 動詞の後続要素 X に生起可能な統語範疇は以下の通りである。

(2) a. Kim really wanted to buy a ticket to the Opening Day game in Seoul. [基本形]

(キムさんはソウルでの開幕戦のチケットを本当に買ったかった)

---

1 「分裂文」という用語はしばしば「it-分裂文 (*it*-clefts)」のみを指しており、その場合、擬似分裂文は「wh-分裂文 (*wh*-clefts)」と呼ばれることがあるが、本稿では、Huddleston and Pullum (2002) の分類に従い擬似分裂文も分裂文の一種として扱うこととする。

[名詞句]

b. **What** Kim really wanted to buy **was** a ticket to the Opening Day game in Seoul.

[動詞句]

c. **What** Kim really wanted to do **was** buy a ticket to the Opening Day game in Seoul.

(福嶋 2024a 一部改変)

(3) [V-ing]

a. They are painting the house. [基本形]

(彼らはその家にペンキを塗っている)

b. **What** they are doing **is** painting the house.

(Emonds 1976)

(4) [形容詞句]

a. Max is silly. [基本形]

(ボブは愚かだ)

b. **What** Max **is** silly.

(5) [that 節]

a. I know that Shohei got married recently. [基本形]

(私は彼が最近結婚したことを知っている)

b. **What** I do know **is** that Shohei got married recently.

(*ibid.*)

(6) [不定詞節]<sup>2</sup>

a. John asked Sam to take part in the meeting.

(ジョンはサムにミーティングに参加するよう頼んだ)

b. **What** John asked **was** for Sam to take part in the meeting.

(Rudanko 1988)

(7) [小節]

a. I heard John coughing.

(ジョンが咳をしているのが聞こえた)

b. **What** I heard **was** John coughing.

(Declerck 1981)

---

2 不定詞節において本来存在しないはずの補文標識 *for* が必要となっている点や別の動詞では、そもそも *for* が *be* 動詞の前部と後部で2箇所存在する必要があるなど、基本形とは異なる要素が必要になる点がこの構文を「擬似」分裂文と命名する1つの理由である。

(i) a. \***What** John is hoping **is for** Sam to make the opening speech

b. \***What** John is hoping **for is** Sam to make the opening speech.

c. **What** John is hoping **for is for** Sam to make the opening speech.

(Rudanko 1988)

このように擬似分裂文において分割し後続に来ることのできる範疇は広く、統語範疇上は比較的制約の緩い言語現象と言える。

また、what の部分を all で用いた「all 擬似分裂文」もある。

(8) a. Naoyuki wanted to earn a Major League contract with the Rays. [基本形]

(直之はレイズとのメジャー契約を勝ち取りたかった)

[動詞句]

b. **All** Naoyuki wanted to do **was** earn a Major League contract with the Rays.

[名詞句]

c. **All** Naoyuki wanted to earn **was** a Major League contract with the Rays.

(福嶋 2024b)

## 2.2. 擬似分裂文の機能的意味

擬似分裂文は、基本形から前部と後部に要素を分割して作られる構文であるが、以下のような談話的機能が存在すると知られている。

(9) 主語節が旧情報を担っており、be の直後の要素に核強勢が置かれ、そこが新情報の焦点となる。  
(安藤 2005)

そのため、(10a) の擬似分裂文を例にとると、what によって導かれた主語節 (10b) は前提 (presupposition) とされ、be 動詞の後続要素 (10c) が焦点 (focus) の位置であり新情報 (少なくとも話し手が聞き手にとってそうであり、聞き手が知りたがっていると思っっている情報) を担う関係となる。

(10) a. **What** John was thinking of **was** that desk.

b. 前提: John was thinking of something

c. 焦点: that desk

また擬似分裂文で表されている (10a) は、"What was John thinking of?" "(He was thinking of) that desk." という質問・応答の対に、機能的にはよく似た関係をしていることになる。

上記のような機能、および普通会話のはじめにくることはできないという事実 (11) などから、Prince (1978) は擬似分裂文の what で導かれる非焦点節が「聞き手が発話の時点で想起していると話し手が見ないうる」情報を伝えるものと説明している。

(11) a. ##\*Hi! **What** my name is is Ellen.

b. ##\*Hi! **What** I've heard about is your work.

(Prince 1978)

他にも論文の書き出しとして擬似分裂文が用いられている場合にも、Prince は同様の条件で説明が可能としている。

- (12) **What** we have set as our goal **is** the grammatical capacity of children—a part of their linguistic competence. (Prince 1978)

一見すると、論文の書き出しで用いられているため先行文脈が存在せず、what によって導かれた主語節が未知の情報となっていると思われる。しかし実際には論文の読者は、論文の読み始める段階で、その著者が何かしらの目標を設定し論文を書いていると想定している。したがって、擬似分裂文(12)の非焦点節 what we have set as our goal は書き出しの文であっても、それが表す情報は読者(聞き手)が想起している情報であると、著者(話し手)は見なすことができ、上記で挙げた条件と矛盾しない。<sup>3</sup>

また、倉田(編)(2022)によると、焦点部分は既出要素に対して対比・否定・訂正などを行う新情報であると説明している。例えば(13)のように前出の提案を全て否定した上で I need you to marry me を伝えている。そのため焦点の marry me が X に現れ「あなたに何かをしてもらう必要がある」が、それは他でもない marry me だと伝えている。

- (13) Prince: You could throw sticks. I will retrieve them! You can rub my tummy!  
Queen: All off-topic. **What** I need you to do **is** marry me.

Mirror Mirror『白雪姫と鏡の女王』(2012)〈01:02:10〉

アルコット王子：棒を投げてよ。取って戻ってくるよ。お腹を撫でてくれてもいいし。

女王：全部的外れ。あなたにしてもらわないといけないのは、私と結婚することよ。

- 3 このような擬似分裂文で想定される条件は、「it-分裂文」では従わないことが知られている。次の it-分裂文(ii)を参照されたい。

- (ii) I've been bit once already by a German shepherd. It was really scary. IT WAS AN OUTSIDE METER THE WOMAN HAD. I read the gas meter and was walking back out...

(Prince 1978)

この it-分裂文の非焦点節 the woman had が表す情報(この世の中には女性というものが存在し、そして、その女性が何かを所有していた)をこの文を耳にする時点で聞き手が想起していたとは極めて考えにくい。Prince によると it-分裂文の非焦点節は、恐らく聞き手は発話時に想起している内容ではないであろうけれども、聞き手が一般的な(知られた)知識と見なしうる情報を表していると考えられ、擬似分裂文の指す「聞き手が発話の時点で想起していると話し手が見なしうる」情報とは異なる。

他にも(14)では、「知らない」ことに対して「知っている」ことを強調して know の目的語表現にあたる that が省略された節を焦点化している。「知っている」ことを強調するために、真偽焦点 (Verum focus) の do を使っている。

- (14) That's what we're here to find out. **What I do know is** he's our only possible link to the Syndicate.

Mission: Impossible – Rogue Nation 『ミッション：インポッシブル ローグ・ネーション』(2015) (00:26:33)

それを俺たちが見つけるのさ。俺にわかるのは、奴がその組織への我々の唯一の手がかりだということだよ。

このようなことから、TOEIC の文脈においても擬似分裂文は、what で導かれる非焦点節が「聞き手が発話の時点で想起していると話し手が見なしうる」旧情報を表し、焦点部分は既出要素に対して対比・否定・訂正などを行う新情報であり、基本的に会話および文章で対比・否定・訂正などが可能となるタイミングに現れることが想定される。

### 3. TOEIC コーパスについて

TOEIC の試験は非公開であり過去問が存在しないため、同試験作成団体の ETS (日本国内では一般財団法人国際ビジネスコミュニケーション協会 IIBC) が日本で発行した『公式 TOEIC Listening & Reading 問題集 1~10』(以下、引用時 NT1~10 で表記)、『TOEIC<sup>®</sup> テスト公式問題集 新形式問題対応編』(以下、引用時 NT0 で表記)、『TOEIC テスト新公式問題集 1~6』(以下、引用時 OT1~6 で表記) の問題文および選択肢をすべてデータ化しコーパスデータとして調査を行った。

表1 TOEIC コーパスの内訳

書名	語数
TOEIC テスト新公式問題集 1	24,452
TOEIC テスト新公式問題集 2	21,508
TOEIC テスト新公式問題集 3	21,411
TOEIC テスト新公式問題集 4	22,924
TOEIC テスト新公式問題集 5	22,654
TOEIC テスト新公式問題集 6	21,803
TOEIC テスト公式問題集 新形式問題対応編	25,242
公式TOEIC Listening & Reading 問題集 1	23,656
公式TOEIC Listening & Reading 問題集 2	24,646
公式TOEIC Listening & Reading 問題集 3	25,288
公式TOEIC Listening & Reading 問題集 4	24,475
公式TOEIC Listening & Reading 問題集 5	25,284
公式TOEIC Listening & Reading 問題集 6	24,429
公式TOEIC Listening & Reading 問題集 7	24,622
公式TOEIC Listening & Reading 問題集 8	23,987
公式TOEIC Listening & Reading 問題集 9	24,432
公式TOEIC Listening & Reading 問題集 10	24,414
合計	405,227

今回調査に使用した TOEIC<sup>®</sup> Listening & Reading Test はその名の通り、Listening パート (Part 1~4) と Reading パート (Part 5~7) から成る。Part 1 は写真描写問題、Part 2 は応答問題、Part 3 は会話問題、Part 4 は説明文問題となっており、今回取り上げている擬似分裂文の性質上、文脈が必要なため Listening 問題としては Part 3 または Part 4 での生起が予想される。また Part 5 は短文穴埋め問題、Part 6 は長文穴埋め問題、Part 7 は読解問題となっており、同じ理由から基本的に Part 7 での出題が予想される。

また全体で約 40 万語と少数のコーパスであるため頻度としては決して多くないことが予想されるが、この擬似分裂文の構文の特性「焦点部分は既出要素に対して対比・否定・訂正などを行う新情報」から、基本的に会話および文章で対比・否定・訂正などが可能となるタイミングに現れ情報の提示価値が高いことから TOEIC の問題として出題における解答の根拠となる箇所になりやすいことが予想される。

## 4. 分析

### 4.1. 頻度

まず、実際の TOEIC コーパスにおける (all) 擬似分裂文の生起頻度は以下の通りである。

表2 (all) 擬似分裂文の生起頻度<sup>4</sup>

種類	頻度(回)
擬似分裂文	11
all 擬似分裂文	7
合計	18

特徴的な点は、what から導かれる擬似分裂文はその生起環境にバリエーションがあるが、all 擬似分裂文は All you have to do is ~ が 5 例、その他も All we had to do was ~ (NT1 T2 P7 #186-190)<sup>5</sup>、All you need to do is ~ (NT7 T2 P4 #86-88) であり基本的に定形化した表現でしか使用例がない。

それに対し、上述したように擬似分裂文はバリエーションがあり、以下のように焦点要素の統語範疇にもある程度種類が確認された。

表3 擬似分裂文の統語範疇の生起頻度

焦点要素の範疇	頻度(回)
that 節	5
名詞句	3
動詞句	2
疑問詞節	1

また、Part 別の (all) 擬似分裂文の生起頻度は以下の通りで、Part 3, 4 での生起および Part 7 での使用頻度が最も高いという予想であったが、比較的 Part 4 に偏っており、Part 5, 6 にも 1 例ずつではあるが使用例が見られた。ただし、Part 5, 6 に関しては文脈を前提とした根拠を聞く出題が行われない Part であるため、今回の調査においては重要度は低い。

4 今回の調査においては、擬似分裂文と特徴が異なる点があるため、焦点要素と what で導かれる非焦点要素が逆転して表される反転擬似分裂文 (reversed pseudoclefts) は取り上げていない。

(iii) A red wool sweater **was what** I bought.

ただし、これに関しても TOEIC コーパスでは 7 回、使用例があり擬似分裂文と出題意図がどのように異なるか今後、比較検討したい。

5 TOEIC コーパスでの引用の略記号の意味は以下の通りである。

OT=2016 年以前の旧形式問題集、NT=2016 年以降の新形式問題集、T○=Test セット番号、P○=Part 番号、#○=問題番号

例として NT1 T2 P7 #186-190 と記述されている場合、『公式 TOEIC Listening & Reading 問題集 1』の Test 2、Part 7 の 186-190 番の問題を指す。



表4 Part別の生起頻度

パート	擬似分裂文の頻度	all 擬似分裂文の頻度
Part 3	3	1
Part 4	5	4
Part 5	1	0
Part 6	0	1
Part 7	2	1

#### 4.2. 使用される環境

では、実際の出題事例を見てみよう。まずは擬似分裂文の最も使用頻度が高い Part 4 の例から見てみることにする。(15) の例では前提となる what で導かれる非焦点要素が前提となっている魅力（バンクーバーの中心部かつ広く素晴らしい設備）と対比し、さらに魅力的な部分があると焦点を当てて説明している。

- (15) Do you want to live close to where you work? Then Bora Park Tower is the place for you! This ultramodern apartment building is in the center of Vancouver with spacious rental units and excellent facilities. But **what** you'll appreciate the most **is** the fact that we're just a short walk away from a train station, a hospital, and a shopping district.

(NT7 T1 P4 #71-73)

しかし、皆さまに最も高く評価いただけるであろう点は、鉄道駅、病院、商店街から歩いてすぐの距離にあるという事実です。

結果、焦点が当たっている価値の高い情報であるため、このセットの問題の1つでは以下のように問われており、擬似分裂文の焦点要素が適格に答えの根拠となっていることが分かる。

- (16) What will the listeners appreciate the most about Bora Park Tower?

(A) The convenient location

(NT7 T1 P4 #72)

では、次に Part 7 の問題を見てみよう。( ) で示している箇所は文挿入問題の正解箇所であり、直前の擬似分裂文の内容（重要な決断をせず楽な状態であることで成長するのを妨げていたということ）を根拠に、当該箇所に当該文（さらに悪いことに何もしないことで競合会社が市場で優位を占めるよう譲ってもいた）を挿入すると判断できる。

- (17) Taking risks was not something I learned to do overnight. In fact, I spent the early years of my career firmly in my comfort zone, avoiding any major decisions that did not have

a predictable outcome. **What** I eventually realized **is** that by doing this, I was effectively preventing my business from growing to its true potential. (Even worse, my inaction was also making way for more aggressive competitors to dominate the market.)

(NT3 T2 P7 #168-171)

結局私が気付いたのは、こうすることで、自分の会社が本来持っている可能性まで成長するのを、私が実質的に妨げていたということだ。(さらに悪いことに、私が何もしないことは、もっと積極的な競合会社が市場で優位を占めるように、道を譲ることにもなっていた。)

最後に all 擬似分裂文での生起例も見てみよう。直前の文脈で番組の話題が変更され、商品券をリスナーに配るくじ引きコンテストがあるとのことのお知らせをしており、そこから前提としてくじ引きコンテストへの参加のために必要なことがあることが予想される。実際には、することがほとんどないことを対比的に表すために all 擬似分裂文の焦点部分を用いて表している。

- (18) However, before we begin, I'd like to remind you about our upcoming raffle contest where we'll be giving away gift cards to several lucky listeners. **All** you have to do to enter **is** post a review of this episode to our podcast's social media site.

(NT5 T2 P4 #89-91)

…参加に必要なのは、当番組のポッドキャストのソーシャルメディアサイトに、この放送回のレビューを投稿することだけです。

このように、今回の調査において、Part 5を除くすべての文脈のある文章において前提となる文脈があり、擬似分裂文は会話・文章の中盤以降にて使用されていた。また基本的に焦点要素は文脈において重要度の高い情報が多く、焦点要素が解答根拠として使用されている頻度が高い (15/18 回) ことが分かった。

## 5. まとめ

本稿では、「分裂文」の一種として知られる「擬似分裂文」が TOEIC Listening & Reading Test において問題文中に登場した場合に用いられているのかについて考察した。擬似分裂文の持つ「焦点部分は既出要素に対して対比・否定・訂正などを行う新情報」という、基本的に会話および文章において対比・否定・訂正などが可能となるタイミングに現れ価値が高い情報を提示する特性と、実際の TOEIC の問題として出題における解答の根拠となりやすいことが一致していると判明した。現段階では、TOEIC コーパスの語数が少ないため今後も同じ傾向が続くかはまだ不明な点はあるが、構文の特性から見て今回の傾向はある程度保たれると考えられる。

## 参考文献

- Declerck, Renaat. 1981. On the Role of Progressive Aspect in Nonfinite Perception Verb Complements. *Glossa* 15: 83–114.
- Emonds, Joseph E. 1976. *A Transformational Approach to English Syntax: Root, Structure-Preserving, and Local Transformations*. New York: Academic Press.
- Huddleston, Rodney D., and Geoffrey K. Pullum. 2002. *The Cambridge Grammar of the English Language*. Cambridge; New York: Cambridge University Press.
- Prince, Ellen F. 1978. A Comparison of Wh-Clefts and it-Clefts in Discourse. *Language* 54: 883.
- Rudanko, Juhani. 1988. On the grammar of *for* clauses in English. *English Studies* 69: 433–453.
- 倉田誠 (編). 2022. 『映画でひもとく英語学』. 東京: くろしお出版.
- 安藤貞雄. 2005. 『現代英文法講義』. 東京: 開拓社.
- 福嶋剛司. 2024a. 「擬似分裂文: 分裂によって対比・否定・訂正をする表現 (2)」. *Asashi Weekly*, March 17.
- 福嶋剛司. 2024b. 「All 擬似分裂文: 焦点の要素に限定の意味を与える表現 (3)」. *Asashi Weekly*, March 31.

## 参考資料

- Educational Testing Service. 2005. 『TOEIC テスト新公式問題集 Vol. 1』東京: 国際ビジネスコミュニケーション協会.
- Educational Testing Service. 2007. 『TOEIC テスト新公式問題集 Vol. 2』東京: 国際ビジネスコミュニケーション協会.
- Educational Testing Service. 2008. 『TOEIC テスト新公式問題集 Vol. 3』東京: 国際ビジネスコミュニケーション協会.
- Educational Testing Service. 2009. 『TOEIC テスト新公式問題集 Vol. 4』東京: 国際ビジネスコミュニケーション協会.
- Educational Testing Service. 2012. 『TOEIC テスト新公式問題集 Vol. 5』東京: 国際ビジネスコミュニケーション協会.
- Educational Testing Service. 2014. 『TOEIC テスト新公式問題集 Vol. 6』東京: 国際ビジネスコミュニケーション協会.
- Educational Testing Service. 2016a. 『TOEIC テスト公式問題集 新形式問題対応編』東京: 国際ビジネスコミュニケーション協会.
- Educational Testing Service. 2016b. 『公式TOEIC Listening & Reading 問題集 1』東京: 国際ビジネスコミュニケーション協会.
- Educational Testing Service. 2017a. 『公式TOEIC Listening & Reading 問題集 2』東京: 国際ビジネスコミュニケーション協会.
- Educational Testing Service. 2017b. 『公式TOEIC Listening & Reading 問題集 3』東京: 国際ビジネスコミュニケーション協会.
- Educational Testing Service. 2018. 『公式TOEIC Listening & Reading 問題集 4』東京: 国際ビジネスコミュニケーション協会.
- Educational Testing Service. 2019. 『公式TOEIC Listening & Reading 問題集 5』東京: 国際ビジネスコミュニケーション協会.

ニケーション協会.

Educational Testing Service. 2020a. 『公式TOEIC Listening & Reading 問題集 6』 東京：国際ビジネスコミュニケーション協会.

Educational Testing Service. 2020b. 『公式TOEIC Listening & Reading 問題集 7』 東京：国際ビジネスコミュニケーション協会.

Educational Testing Service. 2021. 『公式TOEIC Listening & Reading 問題集 8』 東京：国際ビジネスコミュニケーション協会.

Educational Testing Service. 2022. 『公式TOEIC Listening & Reading 問題集 9』 東京：国際ビジネスコミュニケーション協会.

Educational Testing Service. 2023. 『公式TOEIC Listening & Reading 問題集 10』 東京：国際ビジネスコミュニケーション協会.

福嶋 剛司 (t\_fukushima@hokuyo.ac.jp)

## 第2部：北洋大学のこの一年

## 新聞記事に見る「北洋大学」のこの一年

### 苫小牧民報

日付	見出し
1月13日	「北洋大会場は442人出願 全国一斉 大学入学共通テスト」
1月27日	「土曜の窓 恐竜のまちから 香山リカ 衣食が足りなくても」
2月2日	「北洋大 カフェテリアに作品 藍禅さんと大宮正乃ちゃん」
2月13日	「次期総合戦略 新年度に策定作業 市、人口減対策の議論深める」
2月20日	「市多文化共生指針案 10月までに策定」
2月24日	「土曜の窓 恐竜のまちから 香山リカ ひそかなこだわり」
2月24日	「『人生大転換』つづる香山リカさんが書籍出版」
3月15日	「卒業生と留学生キャンパスに別れ 北洋大で学位記授与式」
3月27日	「土曜の窓 恐竜のまちから 香山リカ 東京の不便さ」
3月28日	「決意に満ちた表情で学位記授与式に挑む卒業生 = 15日、北洋大学」
4月2日	「大学生生活スタート 北洋大で入学式」
4月8日	「わたしの時間 日本の美を教えたい 苫小牧市宮前町 譚 賢洲さん(22)」
4月16日	「北洋大、地元から講師 前期日程計15回 実習科目で」
4月17日	「期待を胸に新たな一歩 苫小牧市内で入学式 真剣な表情で式に挑む留学生ら = 2日、北洋大」
4月24日	「技能実習生と町民ら交流 ベトナムをテーマに会食楽しむ 白老」
4月27日	「土曜の窓 恐竜のまちから 香山リカ 誇りと輝き」
4月29日	「第1節 北洋大は1勝1敗 道学生野球1部春季リーグ」
5月6日	「北洋大 室工大と1勝1敗 道学生野球1部春季リーグ」
5月13日	「北洋大は東農大に連敗 道学生野球1部春季リーグ」
5月20日	「北洋大は旭教大に1勝1分 道学生野球1部春季リーグ」
5月20日	「ラジオ番組収録に挑戦 北洋大生 地域創生学ぶ」
5月25日	「土曜の窓 恐竜のまちから 香山リカ すぐ行動に」
5月27日	「北洋大は4位に 第5節、函館大に連敗喫す 道学生野球1部春季リーグに向けチーム立て直し」
6月20日	「留学別科学内へ移転 北洋大 本科との交流活発に」
6月22日	「土曜の窓 恐竜のまちから 香山リカ 挑戦は何歳からでも」
7月27日	「土曜の窓 恐竜のまちから 香山リカ 「助けて」と言おう」
8月9日	「ネットを巡る問題考えよう23日から香山氏が集中講座 北洋大」
8月21日	「24日オープンキャンパス 北洋大 参加呼び掛け」

- 8月24日 「土曜の窓 恐竜のまちから どちらも必死」
- 8月26日 「北洋大、釧公立大に連勝発進 道学生1部秋季リーグ」
- 8月26日 「さまざまな情報に触れて だまされないために 香山リカさんが集中講義」
- 8月27日 「キャンパス移転 初授業 北洋大外国人留学生別科」
- 8月29日 「施設見学や体験授業も 北洋大オープンキャンパス実施」
- 9月3日 「北洋大、函館に連敗 道1部秋季リーグ 大学野球」
- 9月12日 「日本語スピーチに挑戦 北洋大で14日 留学生がコンテスト」
- 9月14日 「道栄高 北洋大内に移転へ 早ければ来年9月にも 17日保護者向け説明会」
- 9月16日 「北洋大4勝4敗東京農大に連敗 道学生野球1部 秋季リーグ第4節」
- 9月18日 「「老朽化と高大連携」道栄高、苫小牧移転で保護者説明会」
- 9月19日 「留学生 新生活に期待膨らませ 北洋大で秋の入学式」
- 9月19日 「松尾理事長が市に説明 道栄高、北洋大内に移転へ」
- 9月21日 「自国の魅力日本語で 苫小牧東RC留学生のスピーチコンテスト」
- 9月23日 「わたしの時間 日本語の勉強を頑張りたい 苫小牧錦西町 胡琳さん(20)」
- 9月23日 「北洋大は3位で終える 道学生1部秋季リーグ 大学野球」
- 9月28日 「土曜の窓 恐竜のまちから 香山リカ 季節を味わう」
- 10月1日 「北洋大留学生招き授業 白老東高の地域共生グループ」
- 10月2日 「5日に北洋大でことわざ文化学会 講座と研究発表」
- 10月11日 「道栄高の移転中止求める 京都市英館に要望書提出へ 教育長「改築へ検討進めていた」早期に説明を 保護者、生徒に不安広がる」
- 10月14日 「恐竜姿で全力疾走！ 着ぐるみレースに歓声」
- 10月14日 「50種類のビュッフェ開催 北洋大のカフェテリア 学生や市民でにぎわう」
- 10月18日 「田中映画監督招き交流 白老日中友好協会がフォーラム 高校生や留学生ら参加」
- 10月23日 「アートと音楽楽しむ26、27日 北洋大でイベント開催 Office MATATABI」
- 10月26日 「土曜の窓 恐竜のまちから 香山リカ ファイターズの役割」
- 11月5日 「留学生から海外事情など聞く ウトナイ中学校で茶話会 国際ソロプチミスト苫小牧」
- 11月5日 「北洋大でアートと音楽のイベント 「演奏絵」初開催」
- 11月18日 「わたしの時間 東アジアについて学びたい 毛添鱗さん(25)」
- 11月23日 「土曜の窓 恐竜のまちから 香山リカ 大横綱の人生」
- 11月27日 「中国秦皇島の訪問団来苫 両港の発展願い合意書締結5年ぶり 交流深

める」

11月28日 「北洋大派遣の市職員引き揚げ 市議会総務委」

12月16日 「留学生ら囲碁を体験 北洋大」

## 北海道新聞

日付	見出し
1月7日	「香山リカ ふわっとライフ 明るくやりすごす」
1月14日	「夢へ一歩 450人挑む 共通テスト 東胆振・日高でも開始」
1月21日	「香山リカ ふわっとライフ 明日はわが身」
2月4日	「香山リカ ふわっとライフ 被災地応援 もっと素直に」
2月18日	「香山リカ ふわっとライフ 東京の大雪に思う」
3月3日	「香山リカ ふわっとライフ 誰にでも、話したいことはある」
3月16日	「コロナ禍 貴重な教訓得た 北洋大 門出の春 学びやに別れ」
3月17日	「香山リカ ふわっとライフ やりすごすのも大事」
3月31日	「香山リカ ふわっとライフ みんな「すごい人」」
4月14日	「香山リカ ふわっとライフ 愁いの春 いつか思い出に」
4月28日	「香山リカ ふわっとライフ 楽しい思い出 つらさ癒やす」
5月12日	「香山リカ ふわっとライフ 感謝の言葉 メモして栄養に」
5月26日	「香山リカ ふわっとライフ つらい時 自らを励まして」
6月8日	「香山リカ ふわっとライフ 良い顔している」
6月19日	「異業種団体苦小牧を西から盛り上げ「にし活」北洋大で講座」
7月20日	「香山リカ ふわっとライフ お金より大切なものがある」
7月31日	「留学生 焼き鳥調理を体験 北洋大4人 苦小牧の祭り参加」
8月21日	「香山さん北洋大で公開講座」
8月22日	「ひと 日ハムと対戦する選抜チームの北洋大生 小山力也さん(22) = 苦小牧市」
8月25日	「道六大学野球 北洋大コールド発進」
8月26日	「六大学野球 旭市大競い勝つ」
9月2日	「六大学野球 東農大網走開幕3連勝」
9月7日	「香山リカ ふわっとライフ 災害時の助け合い あたりまえ」
9月8日	「六大学野球 東農大網走5連勝」
9月14日	「道栄高 苦小牧移転方針 白老から 両市町と17日にも協議」
9月15日	「道六大学野球秋季リーグ 東農大網走7連勝」
9月16日	「道六大学野球秋季リーグ 釧公大が零封初勝利」
9月18日	「道栄高移転 来年9月にも 法人説明 白老町長「同意できない」」



9月19日	「留学生 成長誓い入学式 北洋大 中国、ミャンマーから来日」
9月19日	「道栄高、市内に移転方針 学校法人 市長に説明」
9月21日	「香山リカ ふわっとライフ 親しい間柄だからこそ」
9月23日	「北洋大 秋季リーグ3位 道六大学野球 最終戦飾れず」
9月28日	「道栄高の移転方針「期待持って注視」 苫小牧市教育長」
10月5日	「香山リカ ふわっとライフ 冬は大切な休息期」
10月9日	「ごみ拾い時間内で競う 苫小牧 43人が楽しく環境美化」
10月12日	「「国政が遠い」「私利私欲捨てて」「政治に何を期待？北洋大の学生に聞く」
10月14日	「恐竜着ぐるみ姿で力走」
10月19日	「香山リカ ふわっとライフ 「身近な青い鳥」探したい」
10月28日	「アートとライブ 芸術の秋楽しむ 北洋大で」
11月2日	「ひと〈苫小牧〉独学で日本語 中国から北洋大に 毛添鱗（もう・てんりん）さん（25）」
11月2日	「香山リカ ふわっとライフ あたりまえじゃないと思えば…」
11月16日	「香山リカ ふわっとライフ 闇バイトの危険 どう伝えれば」
12月7日	「地域の宝、探して磨いて 苫小牧総合経済高で観光の講義」

## 読売新聞

日付 見出し

1月31日 「墨絵作家と園児の絵 展示 北洋大のカフェ」

## Asahi Weekly

日付 見出し

3月3日 「メディアでひもとく英語の世界 24 分裂文 福嶋剛司」

3月17日 「メディアでひもとく英語の世界 25 疑似分裂文 福嶋剛司」

3月31日 「メディアでひもとく英語の世界 26 All疑似分裂文 福嶋剛司」

4月7日 「メディアでひもとく英語の世界 27 何が消えているのかに注目しよう！ 福嶋剛司」

8月25日 「メディアでひもとく英語の世界 36 空所化 福嶋剛司」

9月8日 「メディアでひもとく英語の世界 37 空所化福嶋剛司」

## 北洋大学紀要 投稿規程

1. 投稿論文は、複数の査読者による査読結果を基に研究・図書・情報委員会が任命する編集委員会の審査を経て受理する。
2. 当紀要誌は、北洋大学における多文化間の理解や学際的研究の方法の発展を目指す研究成果の投稿を受け付ける。
3. 投稿資格は、本学専任及び非常勤講師に限る。ただし、編集委員会が認めた場合は、この限りではない。
4. 同一論文を異なった投稿先に同時に投稿してはならない。
5. 同一号への掲載は、単著1編と筆頭著者ではない共著1編、あるいは、共著2編（そのうちの1編は筆頭著者ではないもの）までとする。
6. 論文執筆に際しては、以下の指示に従うものとする。
  - i. 使用言語は、原則として、日本語もしくは英語とする。また、母語以外の言語で執筆した場合、ネイティブ・スピーカーのチェックを受ける等、著者の責任においてミスのないように努めること。
  - ii. 論文は、未発表のものに限ること。ただし、口頭発表したもので、その旨を記してある場合は、この限りではない。また、博士論文や修士論文、ならびに、その一部を論文として投稿することは認めない。なお、論文の内容・文体などについては、多様な専門分野の研究者のリーダービリティに十分に応えるものとする。
7. 論文の体裁については、執筆要領を参照すること。
8. 著者校正は、原則として、初校のみとし、印刷上のミスに限るものとする。
9. 著者は、本刷3部を受け取ることができる。ただし、抜き刷りについては、希望により別途著者負担で作成するものとする。
10. 完成した原稿は電子メール添付にて、件名を「氏名\_紀要第〇号投稿」とし、北洋大学図書館（[toshoh@hokuyo.ac.jp](mailto:toshoh@hokuyo.ac.jp)）宛に送付すること。投稿の締め切りは、11月末日の日本時間 23:59 とする。添付する原稿のファイル名は「氏名\_タイトル\_年月日8桁」とすること。
11. 諸事情により予定号に掲載できない場合は、編集責任者の判断で次号に回す場合がある。

# 北洋大学紀要 執筆要領<sup>1</sup>

## 1. 投稿時の注意点

- i. 投稿時には論文および実践報告・研究ノート・レビュー論文のどちらで投稿するかをメール本文で示し投稿してください。(投稿内容を受け、希望する分類では受理できないと編集委員会が判断した場合には、もう一方の分類での受理を可能とする旨を伝える可能性があります。)
- ii. 原稿のファイルは、原則として、Word形式およびPDF形式の両方でご提出ください。
- iii. 原稿のWordファイルは必ず互換モードで保存の上、Word/PDFファイルにはパスワード保護などはせずお送りください。
- iv. タイトル・著者名・要旨などは1頁目に記入し、本文は2頁目からとします。

## 2. 使用ソフト、枚数・用紙設定に関して

- i. 執筆には、原則として、MS Word (98以降) をご使用ください。
- ii. 論文は原則として、A4横書き、注・参考文献・図表を含めて15~20頁を目処とします。実践報告・研究ノート・レビュー論文については同様の要件で10~15頁を目処とします。
- iii. 原稿のページ設定については、ワードの初期設定(「ページレイアウト」→「ページ設定」文字数と行数の設定[40字×34行]、余白[上35ミリ、下・左・右30ミリ])でお書きください。  
\*既存のWord文書フォーマットを使用する場合は、[40字×34行]の設定が適用されていないため、文字数超過例が多いです。設定に不便を感じる方は投稿テンプレートを利用してください。
- iv. 編集の都合上、ページ数は挿入しないでください。

## 3. タイトルと著者名

- i. ページの最初にタイトルをお書きください。その下に著者名と所属機関を一行ずつお書きください。
- ii. タイトルと著者名のフォントは、和文MSゴシック・英文Times New Romanにて作成してください。
- iii. タイトルおよび副題は、14ポイント、中央揃えにしてください。ボールド体(太字)は使わないでください。
- iv. 著者名は、姓(氏)と名の間にスペースを一文字(全角)空け、12ポイント、中央揃えにしてください。ボールド体(太字)は使わないでください。
- v. 所属先は基本的に1つのみとします。またフォントは和文MS明朝・英文Times New

Roman にて 11 ポイント、中央揃えにしてください。ボールド体（太字）は使わないでください。

- vi. 和文の場合、日本語でタイトル・著者名・所属機関名を記した後に、1 行をあけ、同じ順序で英語表記を付してください。ポイントに関しては和文に準じてください。
- vii. タイトルと著者名と所属機関との間は行をあけず、所属機関と要旨の間は 1 行あけてください。

#### 4. 要旨

- i. 和文の場合、要旨は日本語以外（英語・中国語など）で作成してください。
- ii. 英文の場合、要旨は英語以外（日本語・中国語など）で作成してください。
- iii. 要旨の分量は、日本語・中国語の場合 400 字以内、英語など欧文では 200 語以内で作成してください。

#### 5. 章・節のタイトルのフォント

- i. 章立ては、1. 2. …（半角）としてください。その下にセクション（節）を立てる場合は、1.1. 1.2. 1.2.1. 1.2.2. と半角数字を半角ピリオドで区切ってください。
- ii. 章のタイトルは MS ゴシック・12 ポイント、英数字の場合は Times New Roman・半角・12 ポイントでお書きください。ボールド体（太字）は使わないでください。
- iii. 節のタイトルは MS ゴシック・10.5 ポイント、英数字は Times New Roman にしてください。ボールド体（太字）は使わないでください。
- iv. 各章のはじまりは 1 行あけ、その下のセクションは行をあけないでお書きください。

#### 6. 本文のフォント

##### 【和文】

- i. 本文は原則 MS 明朝・10.5 ポイント、英数字の場合は Times New Roman・半角・10.5 ポイント、両端揃えでお書きください。
- ii. 句読点は、「。」（句点）と「、」（読点）を使用してください。句点（。）読点（、）ともに全角を使用してください。
- iii. 本文中の括弧は全角を使用してください。

##### 【英文】

- iv. 本文は Times New Roman・半角・10.5 ポイント、両端揃えでお書きください。
- v. 句読点は、「.」（ピリオド）と「,」（コンマ）を使用してください。「.」（ピリオド）「,」（コンマ）ともに半角を使用してください。
- vi. 本文中の括弧は半角を使用してください。

## 7. 図と表

- i. 図・表の上下に1行あけてください。
- ii. 表のキャプションは表の上に、図のキャプションは図の下に記載してください。  
図・表のキャプションの文字はMS明朝10.5pt・半角英数字Times New Roman・中央揃えでお書きください。
- iii. 表中の文字はMS明朝10pt・英数字Times New Romanでお書きください。

## 8. 注や参考文献など

- i. 注や参考文献のタイトルはMSゴシック・10.5ポイントでお書きください。ボールド体(太字)は使わないでください。
- ii. タイトル以外の部分は9ポイントでお書きください。ポイントを除いた書式については執筆者の専門分野に一任します。

## 9. 末尾連絡先

注や参考文献を含めた論文の最終行の後に1行あけて、著者名とメールアドレスを右揃えでお書きください。著者名は、姓(氏)と名の間スペースを一文字(全角)空け、MSゴシック・10.5ポイントでお書きください。その右隣の( )内に、連絡用メールアドレスを英数字(Times New Roman・半角・10.5ポイント)でお書きください。括弧は全角にしてください。

---

## 注

- 1 指定するフォントやサイズは版組の際に一部入れ替えることがありますが、変更箇所を明確にするためにも執筆要領を遵守し提出ください。

## 編集後記

皆様のおかげで、『北洋大学紀要』第4号の発行は、滞りなく遂行することができました。この場を借りて、執筆された先生方、労力を惜しまず査読にご協力いただいた先生方に心より感謝いたします。また、刊行に関わった北斗プリント社と編集委員会の皆様にお礼を申し上げます。

AIが急速に発展している中、文系の専攻はますます重要視されなくなっています。しかし、今の時代こそ人間の内的側面をさらに力を入れて研究すべきだと思います。言語と文化は、動物と人間を区別する重要な特徴として、そのメカニズムを解明することが人間自身への深い理解に繋がります。本号には、言語や文化、心理、教育など幅広い研究分野の人間の内的側面に関わる研究成果が盛り込まれていますので、ご一読いただけますと幸いです。

(Y・F)

## 北洋大学紀要 第4号

---

令和7(2025)年3月31日印刷発行

編集発行

北洋大学

〒059-1266 苫小牧市錦西町3丁目2番1号  
電話 0144-61-3111

印刷

株式会社北斗プリント社

---







# BULLETIN OF HOKUYO UNIVERSITY

## Vol. 4

### (Part 1) Articles

Perception of the Mongolian Aspiration Contrast by Native Speakers — A Perceptual Experiment with Native Mongolian Speakers —	◀ UETA Naoki ▶	3
Survey of event participants at cosplay events and future possibilities for cosplay events — Through a survey of participants in “Tomakomai Cosplay Festa” —	◀ HIGUCHI Aoi ▶	21
An Analysis of Chinese Classifier Reduplications	◀ FENG Yifeng ▶	39
Contemporary “ <i>Shinbutsu-shūgō</i> ” discourse — Focusing on newspaper articles since 2000 —	◀ HIROIKE Shinichi ▶	55
Considerations on Rules, Standards, and Points to Note Regarding The Use of Honorific Language in Modern Japanese Society — Through Examples from Practical Books on Honorific Language from the 1990s —	◀ FUKUMOTO Tatsuya ▶	73
The Desire to Lose Weight and Its Association with Self-Esteem and Eating Behavior of College Students Majoring in Sports	◀ YAMANAKA Shin · UKE Suzuna · SUGIYAMA Kiichi ▶	89
Design and Demographic Factors in Online Mindfulness Interventions — Exploring Cultural Adaptations in Japan —	◀ LI Sheng ▶	99
Reports, Remarks, and Reviews		
Ancient Languages of the Northern Japan Region from an Archaeological Perspective	◀ TANEISHI Yu ▶	115
Proactive Learning in Chinese Language Education — Activities for Beginner and Intermediate Classes —	◀ CHEN Xi ▶	125
Pseudoclefts and their intention in the context — An observational study based on TOEIC L&R Test corpus —	◀ FUKUSHIMA Tsuyoshi ▶	135
(Part 2) What's New at Hokuyo University		147